

十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小浜山横穴墓群 I

(神門横穴墓群第 10 支群)

— 本 編 —

1995 年 3 月

出雲市教育委員会

小浜山横穴墓群 I 正誤表

ページ 行・図	正	誤
挿図目次	第 53 図 C-5 号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第 53 図 C-5 号横穴墓遺物出土状況図
挿図目次	第 151 図 上塙治横穴墓群第 1.7 支群 1.1 号穴	第 151 図 上塙治横穴墓群第 2.1 支群 3 号穴
32 ページ 18 行	N-82°-E	N-82°-W
47 ページ 1~2 行	須恵器 (7·9·11)	須恵器 (7·9·10)
64 ページ 15 行	环身 1 個体が正位で、	环身 1 個体が伏せた状態で、
72 ページ 20 行	14.74 ~ 15.05m	14.75 ~ 15.5m
76 ページ 第 70 図	1.4 · 1.5 の拓影位置は左右逆	
81 ページ 7 行	15.3 ~ 15.5m	14.8 ~ 15.0m
86 ページ 第 83 図	6 の拓影位置は左右逆	
91 ページ 1 行	身である 2 ~ 4	身である 1 ~ 4
102 ページ 10 行	S-10°-W	S-10°-E
108 ページ 17 行	S-8°-W	S-8°-E
126 ページ 13 行	頭部が平らで、	頭部が平頭で、
132 ページ 25 ~ 26 行	地蔵堂 2 支群 2 号穴	地蔵堂 2 支群 1 号穴
136 ページ 24 ~ 25 行	玄室は奥幅 1.55m。前幅 1.36m で (中略) 長さは 2.12m・高さ 1.1m	玄室は奥幅 1.7m。前幅 1.2m で (中略) 長さは 1.84m・高さ 1.05m
138 ページ 5 行	奥幅 1.0m、	奥幅 0.1m、
139 ページ 23 行	羨門より 30cm 奥に	羨門より 1.81cm 奥に
140 ページ 25 ~ 26 行	高さ 0.85m で	高さ 0.85cm で
145 ページ 18 行	穂床は E-6 · 8 号穴で	穂床は E-6 号穴で
155 ページ 16 · 22 行	梶谷徳次	梶谷徳治
171 ページ 第 165 図	第 6 支群 9 号穴はアーチ形	
180 ページ 6 行	(梶谷徳次宅裏横穴墓群)	(梶谷徳治宅裏横穴墓群)

序

出雲市には、東に上塩治横穴墓群、西に神門横穴墓群という二大横穴墓群が従来より知られ、出雲平野は横穴墓の密集地として周知されていました。

今回発掘調査を致しました小浜山横穴墓群は、独立丘陵である真幸ヶ丘に所在する神門横穴墓群の西端に位置する横穴墓群です。神門横穴墓群は、以前から開口していた横穴墓などは知られていましたが、本格的に発掘調査が行われたのは、今回が初めてであります。

その結果、35穴もの横穴墓が発見され、それぞれが7つの支群に分かれて掘削されていました。その中には家形に掘削した秀麗なもの、ベッド状の石床を設えたものなど個々に特徴を備えていました。副葬品として、土器の他に金環・耳環・下類・鉄刀・鉄剣・刀子・鉄鎌などが見つかりました。

以上今回の調査において多くの貴重な成果を得ることができました。これらの成果が、古墳研究資料として、また郷土の歴史復元の資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、ご指導・ご協力いただきました関係者の皆様には、心よりお礼申し上げます。

出雲市教育委員会
教育長 松元昭憲

例　　言

1. 本書は島根県出雲土木事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成4年度に実施した十問川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘地は次のとおりである。

小浜山横穴墓群　島根県出雲市神西沖町字小濱2642番地

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　下垣晴司（文化・スポーツ課長）

川上　稔（文化・スポーツ課係長）

調査員　松山智弘（文化・スポーツ課主事）

米田美江子（文化・スポーツ課臨時職員）

調査指導　池田満雄（出雲市文化財審議会委員）・渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

丹羽野裕（島根県教育委員会）・角田徳幸（同）

発掘調査　安食　徹・小玉　勇・勝部健三・西村清市・滝　彩子・滝　典子・浜村明良

鐘撞藏吉・佐藤保信・岡　省吉・吾郷要子・片山　修・奥田広信・三原　登

吉田　進・神田千歳・有田松生

整理員　石川桂子・鶴口令子・河井栄子・竹田章乃・永田節子・矢田愛子

4. 本書で使用した方位は磁北を示す。

5. 本書における須恵器の編年は下記の文献によっている。

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994 島根考古学会

6. 遺物は、土器について松山・竹田・鉄器は松山・米田・竹田が、玉類は米田・竹田がそれぞれ実測した。遺構外の遺物については鶴口・小村が行い、米田が補測した。浄書は永田・鶴口が行った。

遺構図・遺物の版組み等は松山が行い、一部を米田が補った。浄書は米田・永田・鶴口が行った。

7. 写真撮影は、遺構・遺物とも松山が行い、遺物（鉄器）の一部については米田が行った。

8. 本書の報告編の執筆は松山・米田が分担して行ったうえで協議し、最終的には米田が整合を測り編集したものである。考察については松山・米田が行い担当を明記した。

9. 鉄器は基本的にX線撮影を島根県埋蔵文化財調査センターにて行った。

10. 出土遺物及び実測図・写真・X線フィルムは出雲市教育委員会で保管している。

11. 調査ならびに報告書の作成にあたり、下記の方々のご指導・ご助言を得た。記して感謝申し上げます。

西尾克己・原田敏照・守岡正司・大谷晃二・榎原博英・勝部智明・増野晋次・久米　基

多田　洋・櫛山範一・大岡晴雄・牧本哲雄・池上　悟・神西公民館・神門公民館

12. 以下は当該書で使用する横穴墓の遺構内名称、遺構形態分類名称及び加工痕名称である。

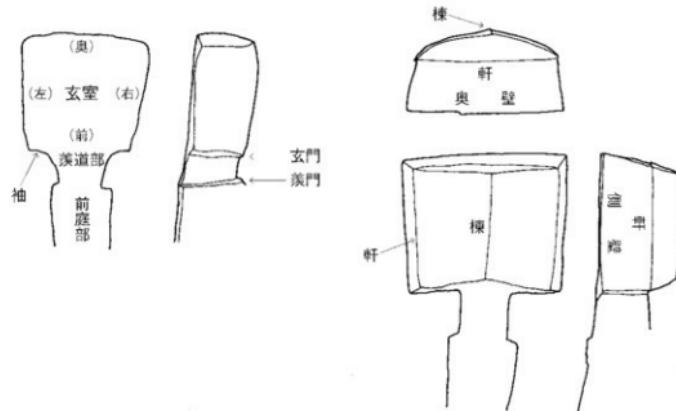
当該横穴墓群の横穴墓は前庭部・羨道部・玄室から成り立つ。次ページに略図を掲載する。

玄室形態を分類するため、以下の用語を用いることとする。平面形態として、正方形、奥へ長い

長方形を縦長長方形、入り口面に対して長い長方形を横長長方形とする。天井形態として、側壁と奥壁の界線が明瞭で奥壁が直に立ち上がり横断面が半円形を呈するものをアーチ形とする。アーチ形を基本形に2側壁に軒線があり天井に棟線のあるものを切り妻家形とする。また4壁に軒線があり天井に棟線のある家形石棺と類似したものを寄せ棟家形とする。

加工痕については、以下の用語を用いることとする。工具の先端部がU字状を呈するものを円刃加工痕、工具の先端部がコの字状を呈するものを平刀状加工痕、幅と深さが約1cm、長さ30cm以上はあるものを溝状加工痕とする。掘削痕が断面皿状を呈する溝状の加工痕を天井の頂部に棟線のように入れ、その棟線から両側壁の天井部へ平行した断面皿状の溝を連続して入れることにより肋骨状を呈するものを肋骨状加工とする。

横穴墓模式図と部位名称



目 次

〈小浜山横穴墓群 I〉

一本編

序

例 言

目 次

挿図目次

第1章	調査の経緯と経過 [川上・米田]	1
第2章	位置と環境 [米田]	3
第3章	神門横穴墓群 [米田]	7
第4章	小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）[松山]	10
第5章	調査の概要 [米田]	
第1節	A群（1～3号穴）の調査	14
第2節	B群（1～5号穴）の調査	20
第3節	C群（1～5号穴）の調査	39
第4節	D群（1～6号穴）の調査	62
第5節	E群（1～8号穴）の調査	88
第6節	F群（1・2号穴）の調査	102
第7節	G群（1～6号穴）の調査	111
第8節	遺構出土遺物	125
第6章	小浜山横穴墓群の調査から [松山]	131
第7章	神門横穴墓群について [米田]	154
おわりに	[松山]	184

〈小浜山横穴墓群 II〉

－観察表・写真図版編－

目 次

観察表目次	1
観察表の記載事項について	2
遺物観察表	4
写真図版目次	27
写真図版	33

挿図目次

- 第1図 神門横穴墓群と周辺の主要な遺跡
第2図 神門横穴墓群分布図
第3図 小浜山横穴墓群地形測量平面図
第4図 小浜山横穴墓群地形測量立面図
第5図 A-1号横穴墓尖測図
第6図 A-1号横穴墓出土遺物実測図
第7図 A-2号横穴墓尖測図
第8図 A-3号横穴墓実測図
第9図 A-3号横穴墓遺物出土状況図
第10図 A-3号横穴墓出土遺物実測図1
第11図 A-3号横穴墓出土遺物実測図2
第12図 B-1号横穴墓実測図
第13図 B-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第14図 B-1号横穴墓土層断面図
第15図 B-1号横穴墓出土遺物尖測図
第16図 B-2号横穴墓実測図
第17図 B-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第18図 B-2号横穴墓出土遺物実測図
第19図 B-3号横穴墓実測図
第20図 B-3号横穴墓玄室横断面図
第21図 B-3号横穴墓土層断面図
第22図 B-3号横穴墓石床実測図
第23図 B-3号横穴墓遺物出土状況図
第24図 B-3号横穴墓出土遺物実測図1
第25図 B-3号横穴墓出土遺物実測図2
第26図 B-4号横穴墓尖測図
第27図 B-4号横穴墓土層断面図
第28図 B-4号横穴墓遺物出土状況図
第29図 B-4号横穴墓出土遺物実測図1
第30図 B-4号横穴墓出土遺物尖測図2
第31図 B-5号横穴墓実測図
第32図 B-5号横穴墓土層断面図
第33図 B-5号横穴墓出土遺物実測図
第34図 C-1号横穴墓尖測図
第35図 C-1号横穴墓出土遺物実測図
第36図 C-2号横穴墓尖測図
第37図 C-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第38図 C-2号横穴墓遺物出土状況図
第39図 C-2号横穴墓出土遺物実測図1
第40図 C-2号横穴墓出土遺物尖測図2
第41図 C-2号横穴墓出土遺物実測図3
第42図 C-3号横穴墓尖測図
第43図 C-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第44図 C-3号横穴墓出土遺物実測図1
第45図 C-3号横穴墓出土遺物実測図2
第46図 C-3号横穴墓出土遺物尖測図3
第47図 C-4号横穴墓実測図
第48図 C-4号横穴墓遺物出土状況図1
第49図 C-4号横穴墓遺物出土状況図2
第50図 C-4号横穴墓出土遺物尖測図1
第51図 C-4号横穴墓出土遺物実測図2
第52図 C-5号横穴墓尖測図
第53図 C-5号横穴墓遺物出土状況図
第54図 C-5号横穴墓出土遺物実測図
第55図 D-1号横穴墓実測図
第56図 D-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第57図 D-1号横穴墓出土遺物実測図1
第58図 D-1号横穴墓出土遺物実測図2
第59図 D-2号横穴墓実測図
第60図 D-2号横穴墓石床実測図
第61図 D-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第62図 D-2号横穴墓遺物出土状況図

第63図	D-2号横穴墓出土遺物実測図1	第93図	E-2号横穴墓出土遺物実測図2
第64図	D-2号横穴墓出土遺物実測図2	第94図	E-2・3号横穴墓出土遺物実測図
第65図	D-2号横穴墓出土遺物実測図3	第95図	E-3号横穴墓実測図
第66図	D-2号横穴墓出土遺物実測図4	第96図	E-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第67図	D-3号横穴墓実測図	第97図	E-3号横穴墓石床実測図
第68図	D-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第98図	E-3号横穴墓出土遺物実測図1
第69図	D-3号横穴墓出土遺物実測図1	第99図	E-3号横穴墓出土遺物実測図2
第70図	D-3号横穴墓出土遺物実測図2	第100図	E-4号横穴墓実測図
第71図	D-3号横穴墓出土遺物実測図3	第101図	E-5号横穴墓実測図
第72図	D-4号横穴墓実測図	第102図	E-6号横穴墓実測図
第73図	D-4号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第103図	E-6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第74図	D-4号横穴墓出土遺物実測図1	第104図	E-6号横穴墓出土遺物実測図
第75図	D-4号横穴墓出土遺物実測図2	第105図	E-7号横穴墓実測図
第76図	D-5号横穴墓実測図	第106図	E-7号横穴墓出土遺物実測図
第77図	D-5号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第107図	E-8号横穴墓実測図
第78図	D-5号横穴墓出土遺物実測図1	第108図	F-1号横穴墓実測図
第79図	D-5号横穴墓出土遺物実測図2	第109図	F-1号横穴墓遺物出土状況検討図
第80図	D-5号横穴墓出土遺物実測図3	第110図	F-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第81図	D-6号横穴墓実測図	第111図	F-1号横穴墓出土遺物実測図1
第82図	D-6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第112図	F-1号横穴墓出土遺物実測図2
第83図	D-6号横穴墓出土遺物実測図1	第113図	F-1号横穴墓出土遺物実測図3
第84図	D-6号横穴墓出土遺物実測図2	第114図	F-1号横穴墓出土遺物実測図4
第85図	E-1・3号横穴墓配置図及び土層断面図	第115図	F-1号横穴墓出土遺物実測図5
第86図	E-1号横穴墓実測図	第116図	F-2号横穴墓実測図
第87図	E-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第117図	F-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
第88図	E-1号横穴墓出土遺物実測図1	第118図	F-2号横穴墓出土遺物実測図
第89図	E-1号横穴墓出土遺物実測図2	第119図	G-1号横穴墓実測図
第90図	E-2号横穴墓実測図	第120図	G-2号横穴墓実測図
第91図	E-2号横穴墓遺物出土状況図	第121図	G-2号横穴墓遺物出土状況図
第92図	E-2号横穴墓出土遺物実測図1	第122図	G-2号横穴墓出土遺物実測図1
		第123図	G-2号横穴墓出土遺物実測図2
		第124図	G-3号横穴墓実測図

第125図	G-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第157図	神門横穴墓群遺構実測図2
第126図	G-3号横穴墓出土遺物実測図	第158図	神門横穴墓群遺構実測図3
第127図	G-4号横穴墓実測図	第159図	神門横穴墓群遺構実測図4
第128図	G-4号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	第160図	神門横穴墓群遺構実測図5
第129図	G-4号横穴墓出土遺物実測図	第161図	神門横穴墓群遺構実測図6
第130図	G-5号横穴墓実測図	第162図	神門横穴墓群遺構実測図7
第131図	G-5号横穴墓遺物出土状況図	第163図	神門横穴墓群遺構実測図8
第132図	G-5号横穴墓出土遺物実測図	第164図	神門横穴墓群出土遺物実測図
第133図	G-6号横穴墓実測図	第165図	神門横穴墓群遺構一覧図
第134図	G-6号横穴墓石棺実測図		
第135図	G-6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図	表1	神門横穴墓群一覧表
第136図	G-6号横穴墓出土遺物実測図1	表2	小浜山横穴墓群一覧表
第137図	G-6号横穴墓出土遺物実測図2	表3	小浜山支群一覧表
第138図	G-6号横穴墓出土遺物実測図3	表4	小浜山支群の変遷
第139図	古墓出土遺物実測図	表5	神門横穴墓群一覧表
第140図	古墓出土古銭拓影		
第141図	遺構外出土遺物実測図1		
第142図	遺構外出土遺物実測図2		
第143図	小浜山横穴墓群(第10支群)遺構一覧図		
第144図	出雲平野の主要古墳と横穴墓分布図		
第145図	長方形プランアーチ形の変遷		
第146図	小浜山D-2号穴		
第147図	正方形プランアーチ形の変遷		
第148図	アーチ形からアーチ系家形へ		
第149図	小浜山B-3号穴		
第150図	小浜山I-1号穴		
第151図	上塙治横穴墓群第21支群3号穴		
第152図	上塙治横穴墓群第27支群2号穴		
第153図	小浜山支群における石棺・石床・刀剣の分布		
第154図	神門横穴墓群各横穴墓配置図1		
第155図	神門横穴墓群各横穴墓配置図2		
第156図	神門横穴墓群遺構実測図1		



第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

十間川中小河川改修計画地は真幸ヶ丘丘陵の西端にあり、横穴墓が存在する可能性が高いことから、平成4年1月23日、出雲土木建築事務所から埋蔵文化財の分布状況について出雲市教育委員会に照会があった。

計画地付近は、横穴墓が密に分布する県下有数の神門横穴墓群の一角にあり、相当数の横穴墓が存在することが予想されたため、試掘調査を実施して分布状況を把握することになった。

試掘調査は立木伐採後の平成4年2月28日に実施し、開発予定地内に3ヶ所トレンチを設定した。調査の結果、計画地付近で知られていた横穴墓3穴のほかに、新たに3穴を発見し、開発予定地全域にわたり横穴墓が分布することが想定されたので、開発地全域の発掘調査が必要な旨を平成4年3月3日出雲土木建築事務所に通知した。

平成4年4月2日出土310号により出雲土木建築事務所からの文化財調査の依頼を受け、出雲市教育委員会と出雲土木建築事務所は、試掘調査の結果をふまえ本調査を実施に向けて協議を重ね、平成4年7月から発掘調査を実施することで合意した。



第2節 調査の経過

調査は、平成4年7月2日から開始した。調査地は丘陵先端部に位置しており、西側の斜面と東側の斜面を便宜上区別し、西側斜面から表土剥ぎを始めた。当初、10数穴が検出されており4ヶ月間の予定であった。

西側斜面には8穴の横穴墓が大きくふたつの群を成しており、A群・B群と区別し、同時に調査を行った。

7月末には東側斜面の表土剥ぎも横穴墓の調査と並行して進めていった。9月中旬には東側斜面の北半分に横穴墓が10穴以上確認され、西側斜面以上に密集していることが判り、小支群もC～E群と増えた。それとともに東側斜面の横穴墓の調査を開始した。

10月初旬には、丘陵下部に表土が厚く堆積しているため、重機で表土掘削を進めた結果、東側斜面には27穴もの横穴墓が存在することが判明し、小支群はG群まで増えた。

そのため出雲市教育委員会は出雲土木建築事務所と協議をし、その結果、調査期間を3ヶ月延長することとした。

調査は冬季に入り、日没後はライトアップを、吹雪の日は入り口をコンバネで蓋をし、実測を行った。1月中旬には、別の遺跡発掘調査チームが調査を終了して合流した。

平成15年2月8日、合計35穴の横穴墓の調査を完了し、7ヶ月に及ぶ調査を終了した。



第2章 位置と環境

小浜山横穴墓群は、出雲市中心城から西へ5km、神西湖まで1.5kmの神門川左岸に位置し、南山からの丘陵が延び出した独立丘陵を成す真幸ヶ丘の西端部に所在する。

出雲平野は、斐伊川と神戸川による沖積作用によって形成された平野である。約6～5千年前頃の縄文時代から徐々に沖積作用が働き、それによって形成された自然堤防、その後背渉地となる沼沢地が至る所に広がった景観は、風土記の時代までも続いているようである。

縄文時代から弥生時代にかけて急激な沖積作用により、早くから自然堤防の発達していた矢野遺跡では、平野中央部では希である縄文時代後・晩期から集落が形成され、古墳時代初頭まで連綿として遺跡が続いている。そのまた南に位置する善行寺遺跡¹¹からは旧河道らしき跡から縄文時代晩期の遺物が出土している。また海岸砂丘上に立地している上長浜貝塚¹²からは縄文時代早期末の遺物が出土しており、丘陵谷部に位置する三田谷I遺跡¹³からも縄文時代後・晩期の遺物が出土している。

弥生時代前期の様相は今ひとつ不明で、矢野遺跡・三田谷I遺跡といった縄文時代から続く遺跡から遺物を検出しているのみである。

出雲平野に遺跡が急増するのは弥生時代中期中葉からである。自然堤防上に立地する古志本郷遺跡・田畠遺跡・知井宮多聞院遺跡・天神遺跡・白枝荒神遺跡¹⁴などでは、ほぼ同時期から集落を営んでいる。中でも、天神遺跡では集落を開むと考えられるような大きな溝が数条検出されている¹⁵。

弥生時代後期後葉、西谷丘陵に築かれた四隅突出形墳丘墓は、この出雲平野に巨大な権力者の存在を、また権力者を中心に集落が発展してきたであろうことを想像させる。

これらの遺跡に遅れて集落を築くのは、山持川川岸遺跡¹⁶などである。しかし前記した集落も、後記した集落も、一部を除き古墳時代初頭にはほぼ姿を消してしまう。

これ以後の古墳時代集落は、先に姿を消した集落とは立地を別にした山持川川岸遺跡など若干継続する遺跡はあるが、遺跡数が減り、詳細は不明である。中期には三田谷I遺跡から遺物が出土しているほかは、前期と同様な状況である。また後期集落も様相が今ひとつ掴めていない状況である。

集落の状況と比べ、古墳の様相はもう少し明確である。古墳時代前期末になると斐伊川左岸に大寺古墳が、神西湖右岸に山地古墳が築かれる。中期には斐伊川左岸に西谷15・16号墓などが、神西湖右岸に北光寺古墳・丁之内古墳など大小の古墳が築かれるが、数は少ない。このように一時衰退したかのように見えた出雲平野も、後期になると神戸川右岸に今市大念寺古墳・上塩治築山古墳・地蔵山古墳・光明寺古墳群などが、神戸川左岸に妙蓮寺山古墳・放レ山古墳・宝塚古墳・刈山古墳群など大型古墳を含む多数の古墳が築かれると共に、神戸川右岸に上塩治横穴墓群・神戸川左岸に小浜山横穴墓群を含む神門横穴墓群という二大横穴墓群を中心には、北山に矢尾横穴墓群・古前背後横穴墓、斐伊川左岸に権現山横穴墓群・長廻横穴墓群・久瀬園横穴墓群・祝廻横穴墓群・神戸川左岸に地蔵堂横穴墓群・井上横穴墓群・深出谷横穴墓群・湖東屋山横穴墓群・正久寺横穴墓群・九景山横穴墓群など多くの横穴墓群が築かれるようになる。

律令期の出雲平野は、天平5年(733)に作成された『山雲国風土記』に記載されているように、

島上山より西流して神門水海に入る「出雲大川」即ち斐伊川と、琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれる。神門水海は現在の高松・長浜地区周辺を覆う地域を占し、「菌の松山」とよばれた「菌の長浜」によって潟湖を形成していた。弥生時代中期に集落が急激に増加したのは、このような肥沃な土地が現れたためでもあろう。

出雲平野は『出雲國風土記』によると、神門郡と出雲郡にあたる。神門郡家に比定されているものには古志本郷遺跡・墨書き器・縁軸陶器・大型の掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡などがある。また神門寺境内発見は神門寺新造院の、矢野遺跡は八野郷の比定地である。

中世には、鳴ヶ堀城・大廻城(向山城跡)・大井谷城・半分城などが築城されたほか、平野部では、矢野遺跡・天神遺跡などで集落が検出されている。

註1 平成6年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

註2 平成4年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

註3 平成6年度から島根県教育委員会により発掘調査が行われている。

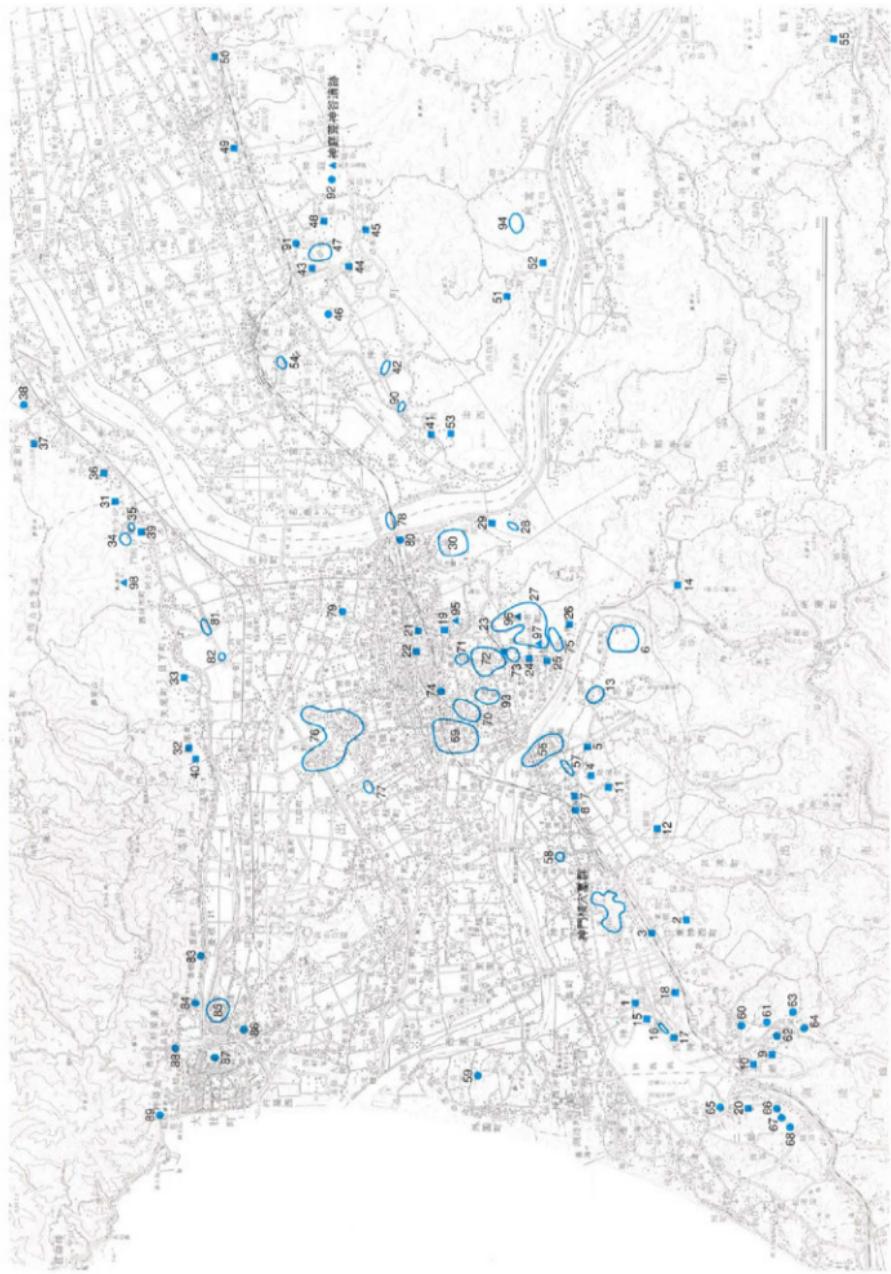
註4 平成5年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

註5 平成6年度出雲市教育委員会により発掘調査を行い、弥生時代中期～古墳時代初頭の人溝を7条検出した。

註6 平成6年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

1. 山地古墳	26. 光明寺古墳群	51. 高野古墳群	76. 四格遺跡群(矢野遺跡)
2. 北光寺古墳	27. 上塩治横穴墓群	52. 布子谷古墳	77. 小山遺跡・大塚遺跡
3. 丁之内古墳	28. 樹現山横穴墓群	53. 山の奥横穴墓群	78. 白枝荒神遺跡
4. 妙蓮寺山古墳	29. 長船横穴墓群	54. 平野横穴墓群	79. 太歲遺跡
5. 放レ山古墳	30. 西谷墳墓群	55. 松本古墳群	80. 石手手遺跡
6. 刈山古墳	31. 大寺古墳	56. 古志本郷遺跡	81. 山持川川岸遺跡
7. 宝塚古墳	32. 石臼古墳	57. 田嶋遺跡	82. 里方別所遺跡
8. 天神原古墳	33. 大前山古墳	58. 知井宮多聞院遺跡	83. 美根遺跡
9. 雲部古墳群	34. 平林寺古墳群	59. 上長浜貝塚	84. 修理面本郷遺跡
10. 倉庭古墳	35. 善崩山古墳群	60. 田中谷貝塚	85. 原山遺跡
11. 地藏堂横穴墓群	36. 美談神社古墳	61. 三部竹崎遺跡	86. 南原遺跡
12. 深田谷横穴墓群	37. 上鳥古墳	62. 庭坂遺跡	87. 鹿島山遺跡
13. 井上横穴墓群	38. 源代古墳	63. 奥ノ谷遺跡	88. 大社境内遺跡
14. 祀船横穴墓群	39. 古前背後横穴墓	64. 御領田遺跡	89. 稲佐遺跡
15. 潟東屋山横穴墓群	40. 矢尾横穴墓群	65. 西安原遺跡	90. 後谷遺跡
16. 正久寺横穴墓群	41. 出西小丸古墳	66. 姉谷忠比寿遺跡	91. 宮谷遺跡
17. 九景山横穴墓群	42. 城山古墳群	67. 只谷Ⅱ遺跡	92. 西谷遺跡
18. 神持山横穴墓群	43. 貴船古墳	68. 只谷Ⅲ遺跡	93. 神門寺境内発見
19. 久瀬園横穴墓群	44. 蒼城古墳	69. 天神遺跡	94. 天寺平廢寺
20. 八幡宮横穴墓	45. 武部西古墳	70. 高西遺跡	95. 大廻城(向山城跡)
21. 今市大念寺古墳	46. 神氷二・メ田古墳群	71. 角田遺跡	96. 大井谷城
22. 今市塚山古墳	47. 新古墳群	72. 宮松遺跡	97. 半分城
23. 上塩治篠山古墳	48. 西光院横古墳	73. 朱山遺跡	98. 鳴ヶ堀城
24. 地蔵山古墳	49. 神庭岩舟山古墳	74. 善行寺遺跡	
25. 半分古墳	50. 軍原古墳	75. 三田谷遺跡	

第1図 神門構穴墓群と周辺の主要な遺跡



参考文献

出雲市教育委員会編

『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集－』1960

『出雲市天神遺跡』1972

川上 稔『古志地区遺跡分布調査報告書』1988

川上 稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989

川上 稔・松山智弘『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う 矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』1991

西尾克己・大國晴雄『出雲平野の古墳』『出雲市民文庫9』1991

『出雲市遺跡地図』1993

川上 稔・湯村 功・松山智弘『駿河南地区広域営農田地農道整備事業に伴う 西谷15・16号墓発掘調査報告書』

1993

松山智弘『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書－下古志地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』1994

川上 稔『古志木郷遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第4集』1994

島根県教育委員会編

『出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』1980

その他

『西谷古墳群』『古代の出雲を考える』1980 出雲考古学研究会

加藤義成『修訂 出雲国風土記参究』1981

『出雲平野の集落II－矢野遺跡とその周辺－』『古代の出雲を考える5』1986 出雲考古学研究会

田中義昭ほか『矢野遺跡の研究』『山陰地域研究 第3号』1987 島根大学山陰地域総合センター

田中義昭ほか『矢野遺跡の発掘調査』『研究成果報告書』1989

渡邊貞幸ほか『西谷埴輪郡の調査（I）』『山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究』1992 島根大学法文

学部考古学研究室

第3章 神門横穴墓群

出雲平野の南西、神戸川左岸には、小さな丘陵が派生しアーバ状に展開する真幸ヶ丘丘陵が所在する。その斜面には多くの横穴墓が染かれている。それを総称して神門横穴墓群とし、神戸川を挟んだ東に所在する上塙治横穴墓群と合わせ、二大横穴墓群を形成している。

今回報告するに当たって、神門横穴墓群の分布調査を行った。その結果、以前から知られていた10支群(福知寺山・山本陽一郎宅裏・三成範夫宅裏・東谷北・東谷・マキチン坂・梶谷徳次宅裏・小浜山・小浜寺山・真幸ヶ丘)の他に、ふたつの支群を発見した。ひとつは、三成範夫宅裏横穴墓群が所在する丘陵の反対東側斜面からで8基を、もうひとつは、マキチン坂横穴墓群が所在する丘陵の反対西側斜面からで3基である。それぞれを神田工業倉庫裏横穴墓群、マキチン坂裏横穴墓群と命名し、計12支群の存在を確認した。最東部に位置する福知寺山・山本陽一郎宅裏横穴墓群の所在する丘陵先端部と、最西端に位置する小浜寺山横穴墓群とは直線距離で約800mを測る。

表1はこれらを支群毎に一覧表としたものである。支群番号は便宜的に市指定の文化財となっている福知寺山横穴墓群を第1とし、反時計回りに並べていったものである。支群数が増えていくにつれ煩雑になることが予想されたため、今回このような処置をとった。

以下、第2図を参照しながら各支群の分布状況を概説する。各支群の詳細は第7章に記す。

最も古くから知られている第1支群(福知寺山横穴墓群)は、真幸ヶ丘丘陵東北麓に所在する福知寺の裏山中腹に多くの横穴墓が存在する。今回の分布調査により、第1支群はやや広範囲に小支群を形成していることが判った。別の支群とするには、福知寺の敷地裏に当たるので、小支群として捉えておきたい。

第2支群(山本陽一郎宅裏横穴墓群)は、第1支群の丘陵尾根を挟んだ真北に所在する。第2図からは第1支群との連続性も窺えるが、東にある智伊神社が所在する丘陵と両横穴墓群の所在する丘陵の東先端部とが古くには繋がっていた可能性があるので、今回も両横穴墓群は、丘陵先端部の延長線上で分断させておく。

今回新発見の第3支群(神田工業倉庫裏横穴墓群)は、第2支群から西へ往った先の丘陵が北へ派生する付近に位置しており、疎らな分布状況を示している。

第4支群(三成範夫宅裏横穴墓群)は、その派生した丘陵の西側斜面に位置している。

第5支群(東谷北横穴墓)は、第4支群が所在する丘陵面が南に下がった付け根付近に単独で1基確認されている。今回の分布調査でも他には発見できなかった。

第6支群(東谷横穴墓群)は、他の支群が丘陵先端部の両側斜面を利用しているのとは違い、両丘陵先端部に挟まれた入江状ではあるが、開けた丘陵中腹に位置している。

小さく派生した丘陵の東側斜面に位置する第7支群(マキチン坂横穴墓群)は、第6支群と小さな谷を隔てただけで、対面している。

今回新発見の第8支群(マキチン坂裏横穴墓群)は、その派生した小さな丘陵の西側斜面に位置している。

第9支群(梶谷徳次宅裏横穴墓群)は、真幸ヶ丘丘陵西で大きく北へ飛び出した丘陵の東側斜面に連続して築かれたものである。南側の横穴墓は、やや奥まったところに位置している代わりに、丘陵裾の低い位置に築かれており、北側の開けた位置の横穴墓は中腹の若干高い位置に造られている。

第11支群(小浜寺山横穴墓群)は、真幸ヶ丘丘陵の西端で十間川を挟んだ小さな独立丘陵の南側斜面に位置している。

第12支群(真幸ヶ丘横穴墓)は、第6支群から丘陵の頂部を通って南斜面に降りる付近で、単独で1基確認されている。今回の分布調査でも他には発見できなかった。

そして第10支群(小浜山横穴墓群)を含め、計12支群である。

12支群は、そのほとんどが北側面を向いて造られており、南側面には、東西端にのみ分布している。南側面中央に位置する第12支群も1基のみが頂部付近に存在するだけである。『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』には、公園が出来る前の地図が掲載してあるが、それには現在の公園地域の中心を成す丘陵南側中央部は、分布域から外してある。

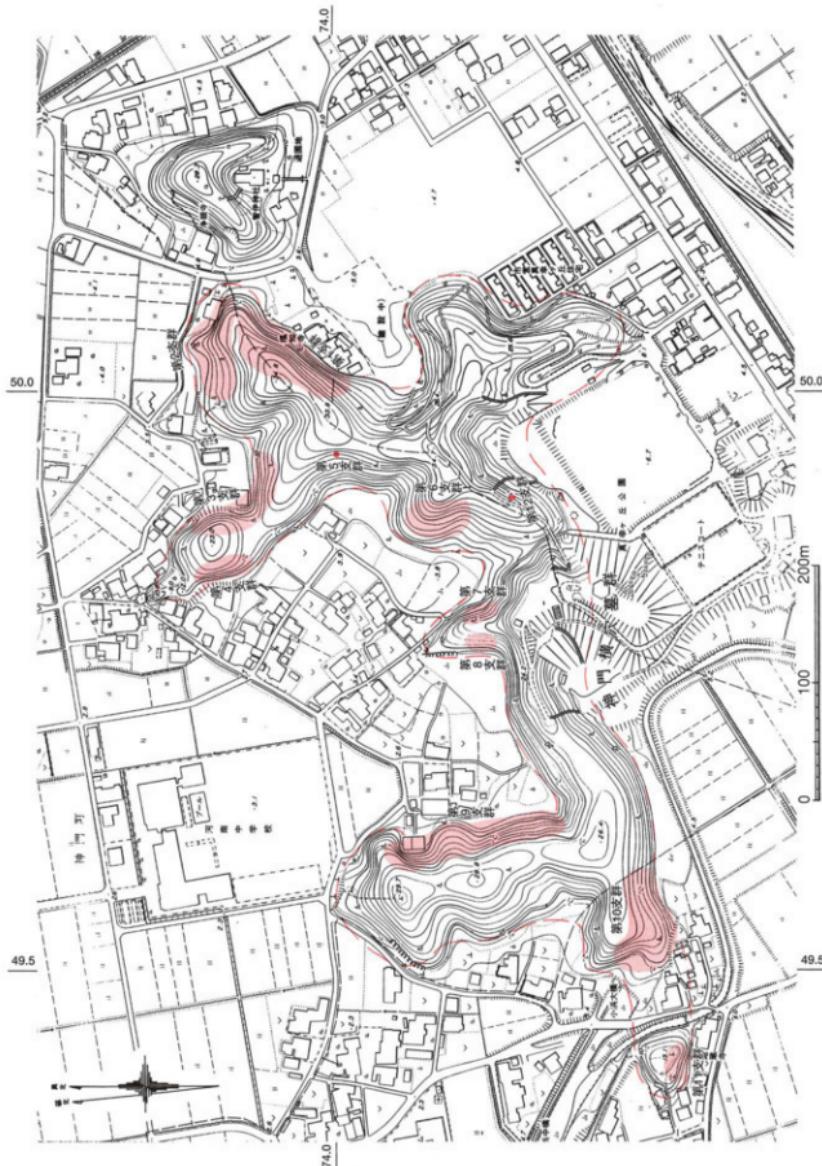
参考文献

- 池田満雄「知井宮町福知寺山横穴群」『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集－』1960 出雲市教育委員会
島根県教育委員会「出雲・上塩治地域を中心とする 墓葬文化財調査報告』1980
出雲市教育委員会『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989
出雲市教育委員会『出雲市遺跡地図』1993
島根県教育委員会『増補改訂 島根県遺跡地図I (出雲・隠岐編)』1993

表1 神門横穴墓群一覧表

支群番号	横穴墓名	確認横穴墓数	概要
第1支群	福知寺山横穴墓群	19基	4つの小支群を成す・家形石棺あり
第2支群	山本陽一郎宅裏横穴墓群	10基	5つの小支群を成す
第3支群	神田工業倉庫裏横穴墓群	8基	疎らな分布状況を呈する
第4支群	三成範夫宅裏横穴墓群	5基	
第5支群	東谷北横穴墓群	1基	
第6支群	東谷横穴墓群	9基	3つの小支群を成す・家形石棺あり
第7支群	マキチン坂横穴墓群	5基	
第8支群	マキチン坂裏横穴墓群	3基	
第9支群	梶谷徳次宅裏横穴墓群	19基	6つの小支群を成す
第10支群	小浜山横穴墓群	41基	10の小支群を成す・家形石棺あり
第11支群	小浜寺山横穴墓群	2基	
第12支群	真幸ヶ丘横穴墓群	1基	

第2図 神門横穴墓群分布図



第4章 小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第10支群）

今回調査した小浜山横穴墓群は、出雲平野の西方にあたる神門川下流の左岸に位置する。平野の中の独立丘陵である真幸ヶ丘陵に開口しており、当時は出雲風土記における神門水海が現在の平野に大きく入り込んでいたと考えられることから、この丘陵の西側は入海が近接していたものと考えられる。

調査した横穴墓は35基であるが、調査範囲外にも数基の横穴墓が開口しているし、真幸ヶ丘陵の各所には古くから知られている福知寺山横穴墓群や東谷横穴墓群など、多くの横穴墓の存在が知られており丘陵全体が一つの横穴墓群として捉えられ神門横穴墓群と称されている。小浜山横穴墓群はこの神門横穴墓群の分布する丘陵西端の尾根に開口している。

今回の調査では当初の予想をはるかに上回る37基の横穴墓が検出され、小浜山横穴墓群の調査は神門横穴墓群内で初めて行われた本格的な調査となった。

また、周辺には妙蓮寺山古墳・放れ山古墳・宝塚古墳など横穴式石室をもつ古墳や地蔵堂横穴墓群・神待山横穴墓群なども知られており、後期古墳の密集地帯となっている。

小浜山支群として調査したのは35基であるが、調査を進める中でこれが数基程度で一定のまとまりを形成していることがわかった。このため7個の小単位に分けA～Gとした。A-1号穴というような呼称でそれぞれの横穴墓を扱うこととした。分類の根拠は平面分布のまとまりと、横穴墓の高低差によっている。西側斜面ではA群とB群の二つに小単位を設定した。東側斜面ではC群とD群では1基を除いて比高差があることから、このような垂直分布の差も造墓単位を意図的に示したものととらえることとした。G群は玄室床面が標高11.65～12.9mにあり最も低いレベルのものを一単位とした。G群は同レベルのE群とは平面的に区分することができ、平面的には近距離のF群とは比高差がある。尾根の先端側に分布する2基をF群とした。これらは玄室上半2/3は削平されていることから、西側にも横穴墓が存在した可能性がある。E群としたものは上下2段に分布しており、上段はD群に下段はG群として捉えることも出来るが、上段はD-5号穴とE-1号穴間で比高差があることからD群と分けることとした。下段については根拠がないが便宜的に上段と合わせてE群とした。以上E群については明確でないものの7単位にわけた。

また、調査範囲外にも三箇所で横穴墓が分布している。小浜山支群では10単位の横穴墓のまとまりが確認できる。

調査を行った横穴墓の中には玄室の大半をすでに失っているものも多く、床面のみを残すようなものもあった。特に東斜面の尾根先端側は崩壊が著しかった。このあたりと尾根の頂部は最近まで墓地になっており、かなり改変されていたようである。また、丘陵自体も自然崩壊しており前部の大半がすでに失われているものがほとんどであった。

このような状況であったため、多くの横穴墓が後世のなんらかの改変を受けているものと思われる。閉塞石が残っていたB-3号穴なども、閉塞石の上端が壊されそれらが前部に散乱していたことか

ら、すでに一度開口されたものと思われる。しかしながら、須恵器などが少なからず残っているものが多く横穴墓の時期を推測する資料をえることができた。また、C-2号穴・C-4号穴・D-2号穴・F-1号穴は比較的多くの遺物を残していることから、あるいは改変を受けていない状態であった可能性もある。

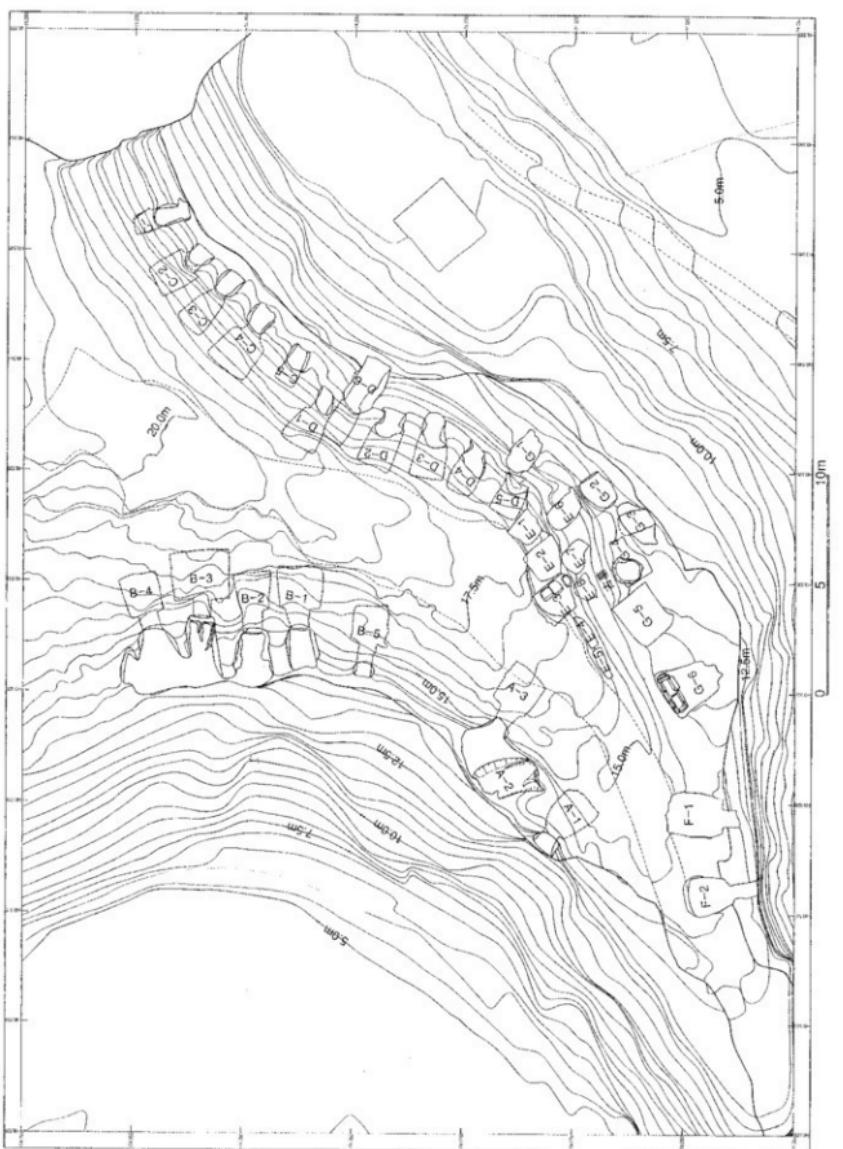
遺物の出土状況も、床直や浮いた状態で出土するものなどさまざまであったが、追葬によるものか後世の改変によるものか明確にすることはできなかった。遺物の残存が最もよかつたD-2号穴でも遺物の出土は床直だけではなくかなり浮いた状態で出土したものもあった。玄門より前庭部にかけてはすでに崩壊しており流入土が著しいなど、追葬の有無について明瞭かにすることは出来なかった。

横穴墓自体については凝灰質砂岩に造墓されていることもあり、加工痕等が良好に残っているものが多く、横穴墓の掘削技法を復元するための良好な材料となった。

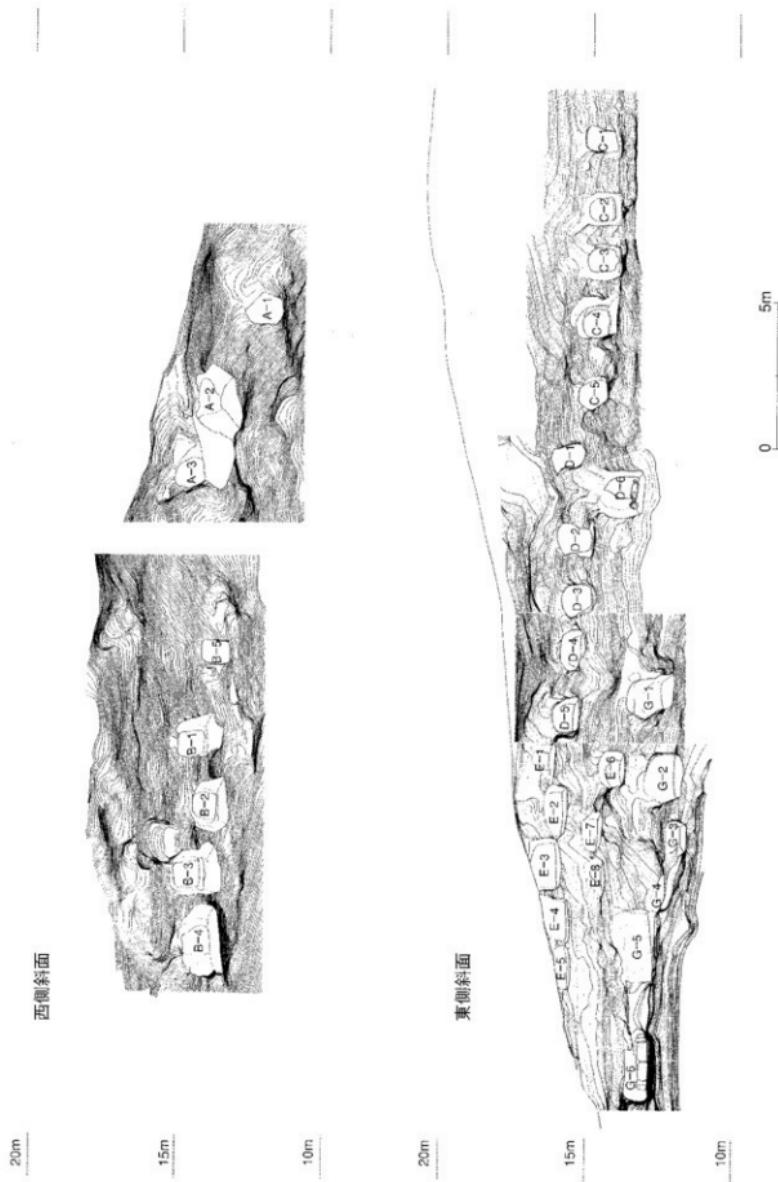
今回の調査では観察が不十分な点もあり埋葬の状況などについて不明な点を多く残したが、横穴墓の形態や時期について検討することがある程度可能になったと思われる。



第3図 小浜山横穴墓群地形測量平面図



第4図 小浜山構穴墓群地形測量立面図



第5章 調査の概要

第1節 A群の調査

西側斜面の尾根先端側に位置し、造墓途中のものを含めて3基の横穴墓から成っている。それぞれ一段ずらしながら開口している。最も高所に位置するA-3号横穴墓と最も低所に位置するA-1号横穴墓の玄室床面における比高差は2.5mである。他の小支群ではほぼ同レベルでの造墓が成されており、また造墓途中で終わっているものを含むなど、他の小支群とは違う様相を呈している。

(1) A-1号横穴墓（第5・6図）

A群の最も低所に位置する。前庭部が若干残存し、天井は羨道部で崩壊している。床面標高11.25～11.8mを測り、開口方向はN-37°Wである。

土層堆積状況

遺物がほとんど在存していないため全部掻き出されたものと考えられる。2層は地山レキ層で天井が剥落したものと考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部は若干残存する程度で、中央には玄室から続く溝が確認できるのみである。

羨門は天井が崩壊し詳細は不明であるが、幅は75cmを測る。

羨道部は長さ80cm、幅75cmを測り、天井は崩壊しており高さは不明である。床面中央には幅20cm、深さ8cmの溝がのびる。羨道部と前庭部床面では5cmの段が設けられている。

加工痕

風化が著しく明確ではないが天井に加工痕が確認される。

玄門・玄室

玄門は崩落しているが、上層断面B-B'ラインに位置する。幅100cm、高さ105cmを測る。

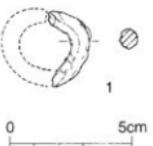
玄室は長さ207cm、前幅120cm、奥幅183cm、高さ105cmを測る。平面形態は、縦長方形で両袖が不明瞭である。天井形態は、奥壁が垂直に立ち上がるアーチ形である。前壁は明確に作り出されていない。床面には各壁に沿って溝が廻っており、前壁に当たる部分は袖部がないためカーブを描き中央で合流する。また中央にも溝があり床面を2分し、左右に屍床を造り出している。

遺物出土状況

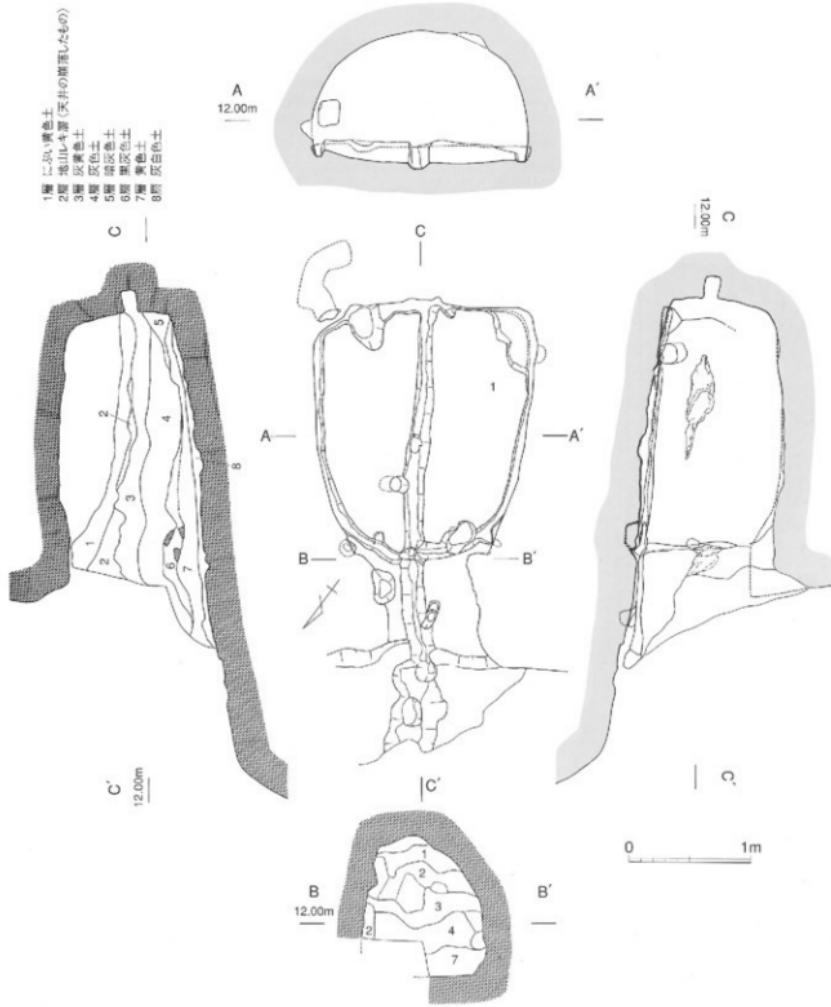
玄室は完全な盜掘を受けており、出土遺物は耳環の残欠1点のみで、床直出土である。

出土遺物

6-1は銅芯のみ半分が残っている。長さ3.1cmで、断面径が0.75cmである。



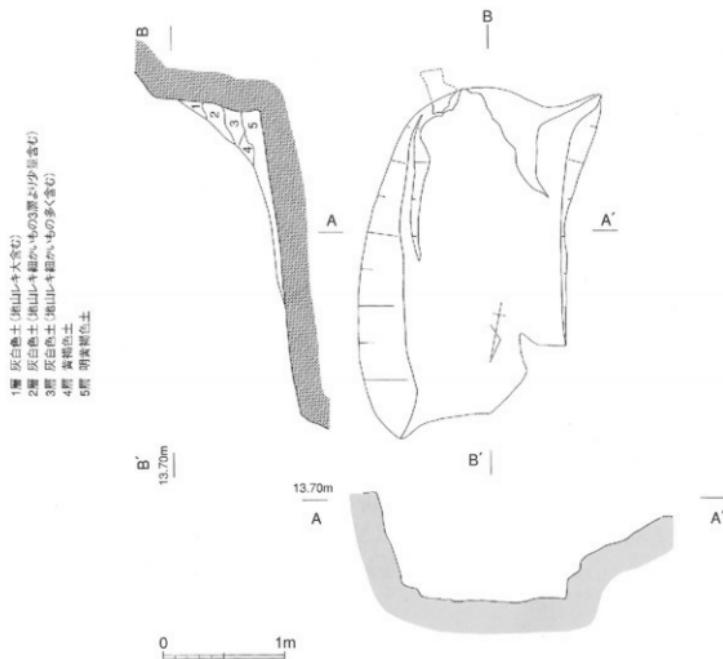
第6図 A-1号横穴墓
出土遺物実測図
(S=1/2)



第5図 A-1号横穴墓実測図 ($S = 1/40$)

(2) A-2号横穴墓 (第7図)

現状では長さ250cm、幅130cmを測る加工段状になっており、造墓途中で中止した状態と考えられる。おそらく前庭部をほぼ確保した段階であろう。造墓が中止された理由は不明だが、岩盤等に当たった様子は観られない。床面標高12.65~12.95mを測り、軸方向はN-12°-Wである。出土遺物は皆無である。



第7図 A-2号横穴墓実測図 ($S = 1/40$)

(3) A-3号横穴墓 (第8~11図)

A群の最も高所に位置する。床面標高13.15~14.3mを測り、開口方向はN-48°-Wである。

土層堆積状況

下位層ほど地山レキを多く含んでおり、全部掻き出された可能性あり。

前庭・羨門・羨道

羨門前面に長さ180cm、幅250cmの不整菱形平坦面があり、これが前庭部に当たると考えられる。

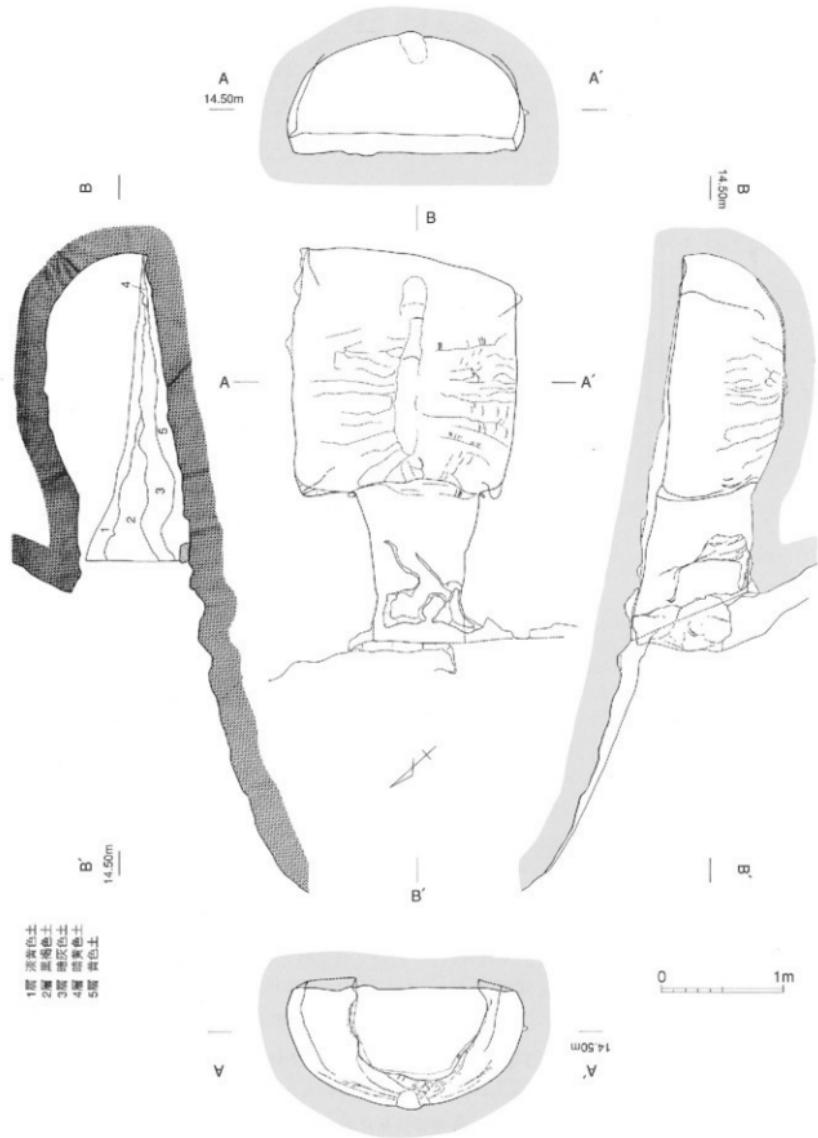
羨門は崩壊が著しく残存していないが、床面には前庭部との境に高さ8cmの段が残っている。

羨道部はこの段から長さ123cm、幅75~100cmを測り、平面形態は逆台形を呈する。高さ90cmを測り横断面は方形である。

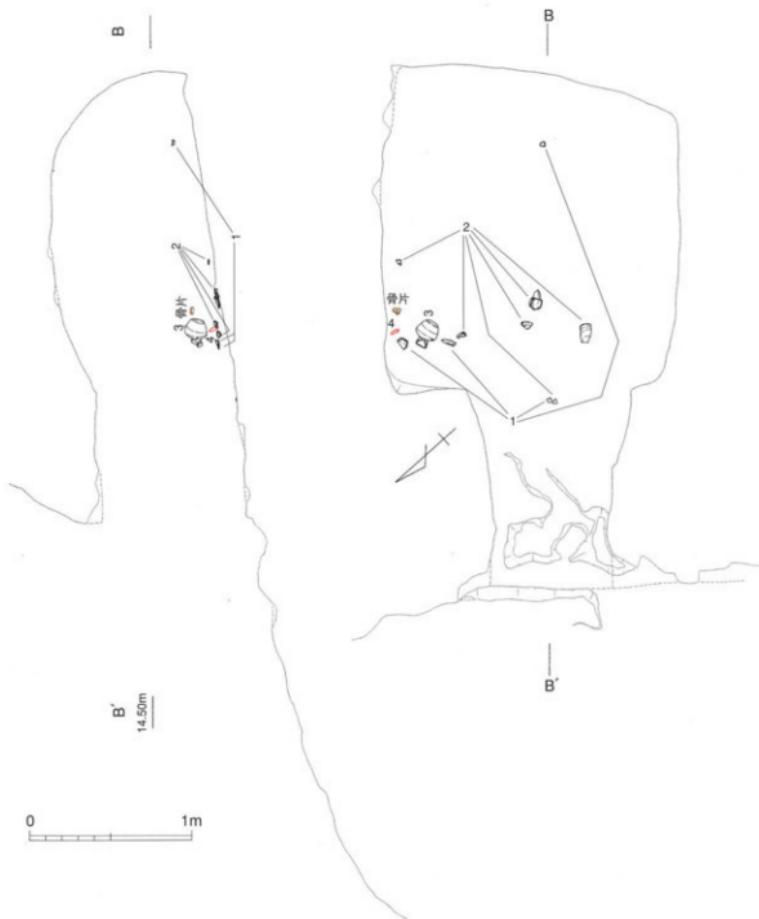
玄門・玄室

玄門は床面で幅100cm、高さ85cmを測る。

玄室は長さ167~200cm、前幅165cm、奥幅175cm、高さ100cmを測る。平面形態は、やや縦長の



第8図 A-3号横穴墓実測図 ($S = 1/40$)



第9図 A-3号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

正方形であるが、左側が長くなっているため奥壁が斜めになっている。天井形態は、奥壁が内湾し天井との界線が不明瞭であるが、基本はアーチ形を呈する。袖部分は、床面で右袖20cm、左袖50cmの前壁を作り出しているが、天井との境は奥壁同様明瞭ではない。

加工痕

玄室にて、天井頂部から側壁にかけて平行に削り落とす肋骨状の加工痕が観察された。ただし、前壁と奥壁が垂直でないため肋骨状の加工が及ぶ範囲は中央部のみで狭い。また中軸には棟を表す加工が成されている。

遺物出土状況

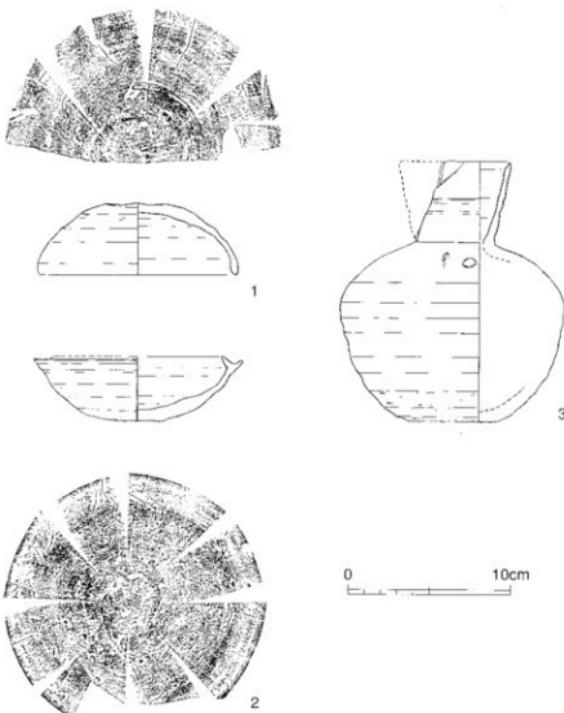
完全な盗掘を受けしており、遺物の大半は失われたものと考えられる。須恵器の蓋坏と直口壺が1点ずつと鉄鎌1点が出土している。須恵器の蓋坏はそれぞれ破片となって散らばっていた。

出土遺物

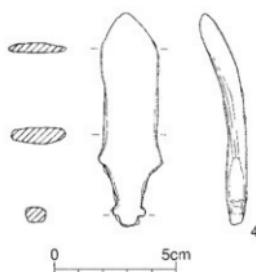
10-1~3は須恵器

である。1は坏蓋で口径12.1cmで、天井はナデ調整でヘラ切り痕が残っている。周辺部は砂粒子の動きが見られ、削られているのかもしれない。口縁端部は厚くなりそのまま丸くおさめる。また、内面には接合痕が残っており簡略化されたつくりである。2は坏身で口径11.6cmで口縁部の立ち上がりは短い。底部の調整は雑でケズリの後ナデ調整を行っているようである。3は直口壺で高さ16.0cm、胴部最大径13.8cmである。口縁部は直線的に開き2条の浅い沈線が廻っている。肩部には9mmの円形浮文が2対ある。底部及び底部から2cmはヘラケズリである。

11-4は鉄鎌である。長さ8.8cm、最大幅2.6cmの頭部柳葉形を呈するもので、鎌身部は反っている。



第10図 A-3号横穴墓
出土遺物実測図1
(S=1/3)



第11図 A-3号横穴墓出土遺物
実測図2 (S=1/2)

第2節 B 群の調査

西側斜面A群の北に位置する。5基からなり、玄室床面が標高13.6~14.3mの高さにあり、ほぼ同一レベルに並んでいる。ただし、交互のB-1号横穴墓とB-3号横穴墓はやや高い位置を占めており、隣り合わせが同じ高さにならないように造摹しているようである。

(1) B-1号横穴墓（第12~15図）

B群の最も高所に位置する。前庭部は前面が若干壊れている。床面標高は13.4~14.3mを測り、開口方向はN-83°-Wである。

土層堆積状況

全体的に1層が覆ったような堆積状況を呈する。玄室奥にはほとんど堆積しておらず、遺物もあまりないことから一度掻き出された可能性が考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部は現存長138m、幅95~120cm以上を測り、平面形態は外に向かって開く台形状を呈する。羨門は幅95cm、高さ90cmで、床面には幅8cm、深さ12cmの閉塞施設を受けるための溝状の加工がある。この加工は中央部では前庭部の床面と同じフラットな面となるが、両側では深さ10cmの段がついている。

羨道部は長さ90cm、前幅82cm、奥幅120cmを測る。床面には右半分に径40×50cm、深さ15cmのピット状の加工がある。このピットには玄室からの溝が繋がり、ピットからさらに羨門まで溝が延びている。この溝は羨道部の中央やや右寄りにあり幅15cm、深さ5cmを測る。また床面には羨門より30cm奥に軽い段差がついている。

玄門・玄室

玄門は床面で幅115cm、高さ85cmを測る。

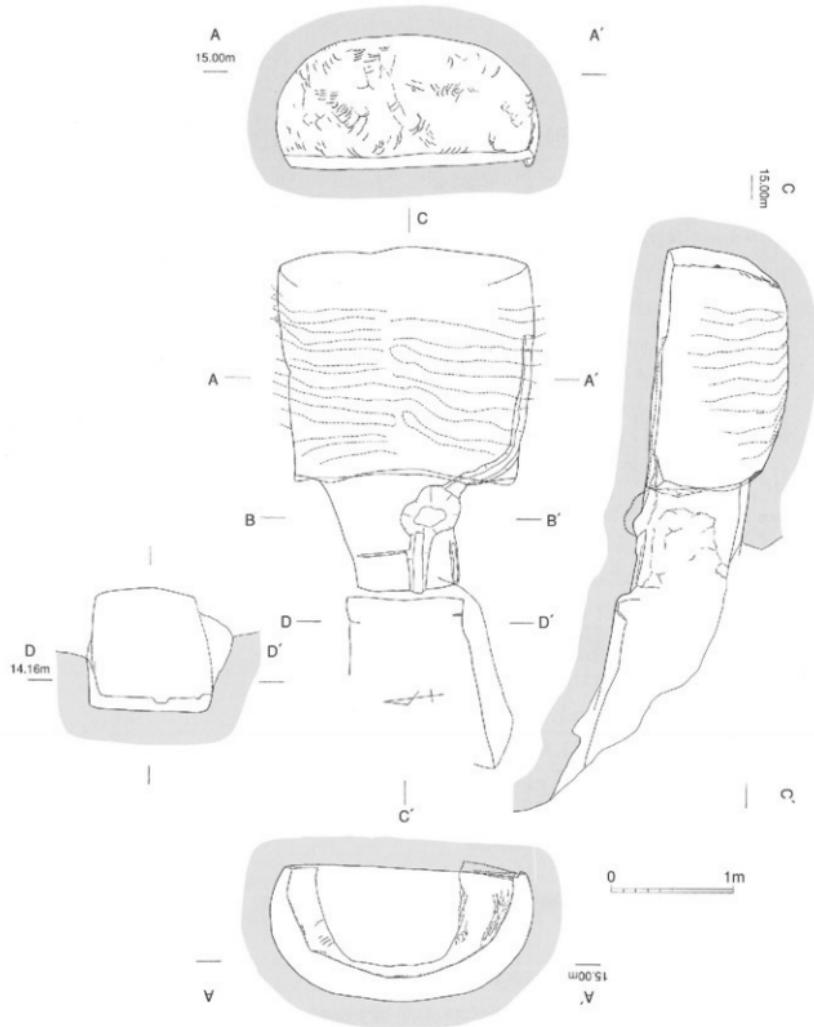
玄室は長さ193cm、前幅181cm、奥幅204cm、高さ109cmを測る。床面積が比較的広く、奥が若干広いが平面形態はほぼ正方形である。奥壁は高さ90cmで、垂直に立ち上がりっているが、上部は側壁との界線が曖昧になり内湾している。基本的には奥壁を明確に造っていることから天井形態はアーチ形を呈する。前壁は上部はやや内側に内湾しているが、ほぼ垂直に立ち上がり、右袖は41cm、左袖は21cmで、側壁・天井との界線は明確で1枚の壁として意識されている。

床面には右側壁から右袖に沿って幅12cm、深さ5cmの溝が設けられている。この溝は奥壁までは達しておらず、奥から60cmのところで止まっている。また床面は前庭部に比べると水平に近い。

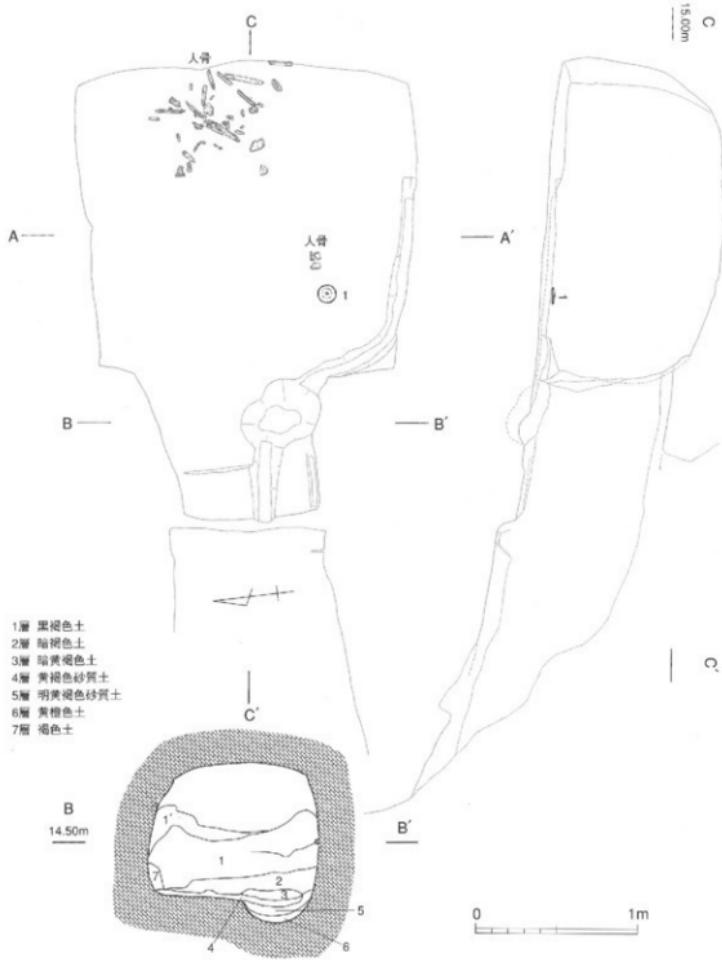
加工痕

玄室にて、最終的な仕上げの加工として天井から側壁にかけては肋骨状加工が見られる。幅7~12cmで断面U字形の掘削溝が天井の中心から床面に向けて平行に施されている。

奥壁も円刀の工具痕が見られるが、特に一定の方向に加工しているような様子は見られない。



第12図 B-1号横穴墓実測図 (S = 1 / 40)



第13図 B-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

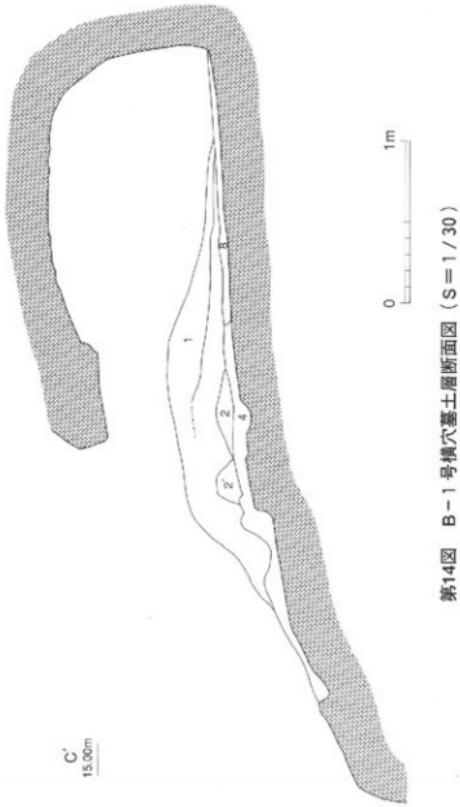
遺物出土状況

玄室右前に壙蓋(1)1点のみが、床直に正位で出土した。

玄室左奥と15-1の近くから人骨がバラバラの状態で出土した。8層に載った出土状況を呈しており、盃掘により元位置を動かされたものと考えられる。

出土遺物

15-1は須恵器の壙蓋である。かえりがつくタイプで口径9.5cm、器高2.4cm、天井はヘラケズリされ、径0.8cmの乳頭状つまみが付く。



第15図 B-1号横穴墓
出土遺物実測図 (S = 1 / 30)

(2) B-2号横穴墓 (第16~18図)

羨門上部が剥落しているのみで、ほぼ完全な形で残存している。床面標高は13.2~13.9mを測り、開口方向はN-84°-Wである。

土層堆積状況

少なくとも1~4層は掻き出されたのちに堆積した層と考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部は長さ181cm、幅110~167cmを測る。現状では不整形な床面となっているが、幅110cmの長方形を呈していたと思われる。

羨門は羨道床面より6cm低くなっているが、削り込み等の加工はない。左端には直径26cmのピットがあるが、用途は不明である。

羨道は長さ109cm、幅90~94cm、高さ85cmで、横断面は長方形である。

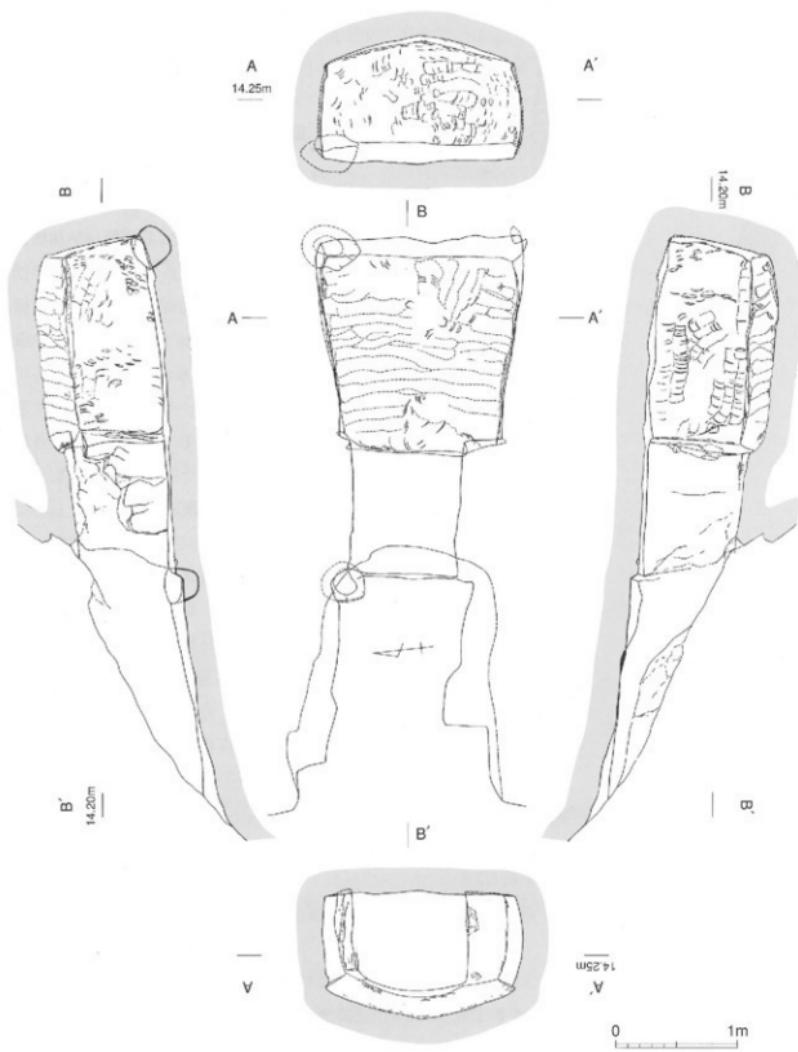
玄門・玄室

玄門は床面で幅94cm、高さ83cmを測る。

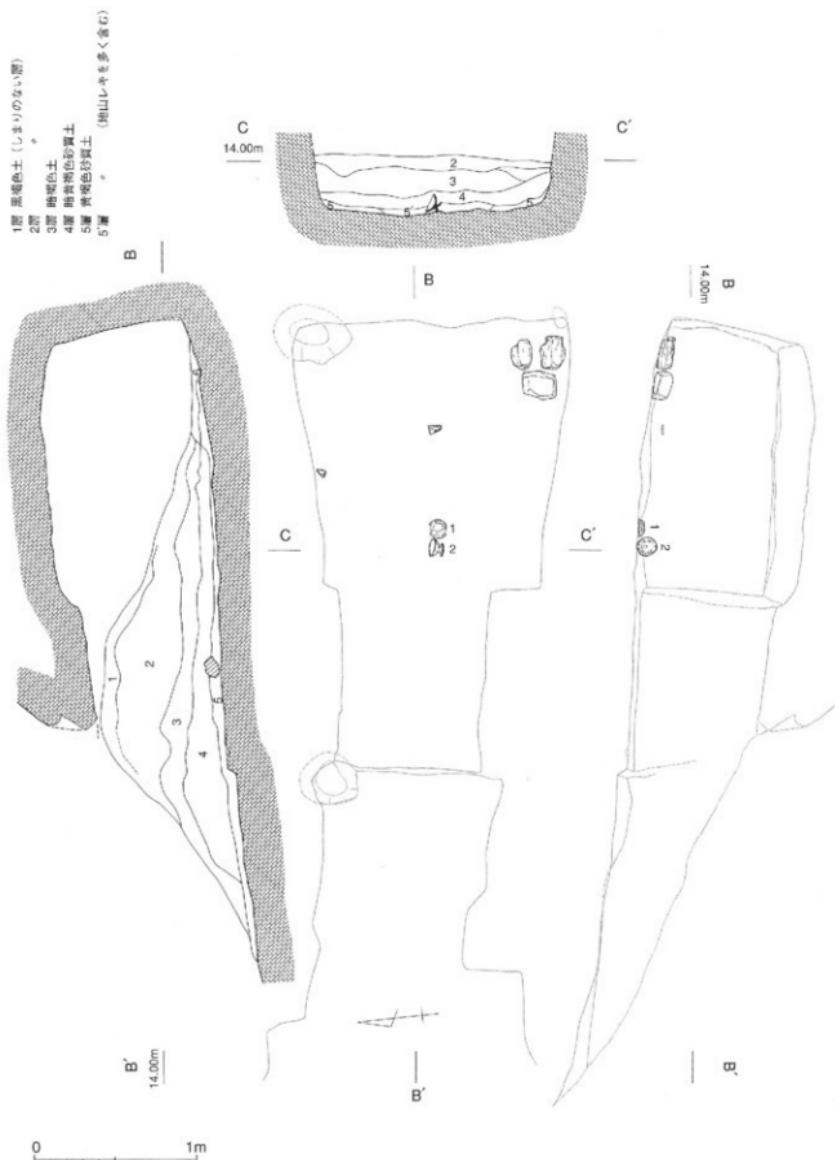
玄室は長さ167cm、前幅133cm、奥幅170cm、高さ105cmを測り、平面形態は奥が広く前の狭い正方形を呈している。

奥壁は高さ80cmで直線的に立ち上がり、天井との界線のない一連の面となっている。このため天井は切り妻となっている。側壁は高さが右側壁75cm、左側壁65~70cmを測り、垂直に立ち上がり天井との境には軒を示す段を有する。この段は幅が一定せず高さも上下する粗雑な造りである。天井は100cm以下と低く、横断面・縦断面ともやや丸みをもつ。前壁は右袖31cm、左袖8cmを測り、玄門から天井界線まではわずか数cmで、右袖のみ明確に造っている。天井は肋骨状加工によって棟を造り出しており、天井形態はアーチ形を基本に切り妻形にしたものと考えられる。

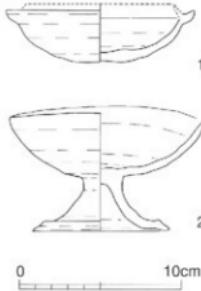




第16図 B-2号横穴墓実測図 (S = 1 / 40)



第17図 B-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第18図 B-2号横穴墓

出土遺物実測図 (S=1/3)

玄室入り口付近から須恵器の壊身(1)と高環(2)が1点ずつ出土した。ほぼ床面直上である。須恵器壺小破片2点は床面から10~15cm浮いた状況で出土した。玄室右奥からは長さ約20cm、幅・厚さ約15cmの縦が3点出土している。

出土遺物

18-1・2は須恵器である。1は壊身で、口径10.4cm、復元器高3.6cmである。焼成不良で残りが悪く調整等は不明である。2は高環で、口径10.7~11.2cm、器高7.2~7.7cmである。壊部は椀形を呈し、脚は大きく八の字に開いている。これも1と同様で焼成やや不良である。

(3) B-3号横穴墓 (第19~25図)

B群の高所に位置する。閉塞石で塞がれ、羨門上部が剥落しているのみで、ほぼ完全な形で残存している。床面標高は13.55~14.2mを測り、開口方向はN-86°-Wである。

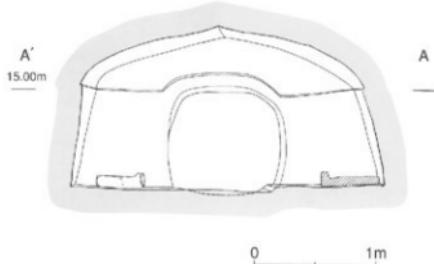
土層堆積状況

閉塞石の上部が壊れているため玄室入り口にも流入土が天井近くまで堆積している。前庭部11層中に横たわる石は閉塞石の上部が壊された時の破片と考えられる。

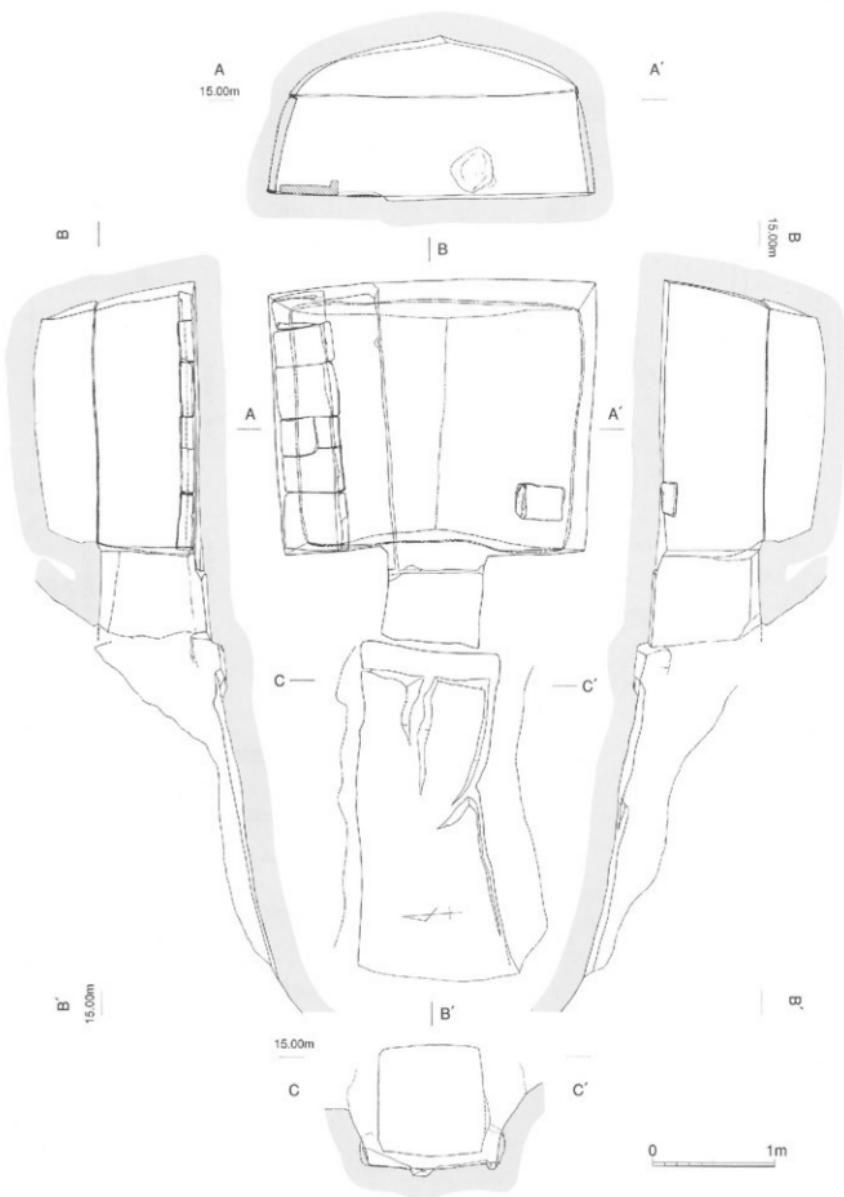
前庭・羨門・羨道

前庭部は長さ267cm、幅115~130cmを測る。床面には閉塞石を受ける部分から、中央と右側壁に沿って溝が設けられており、側壁沿いの溝は途中で分岐している。

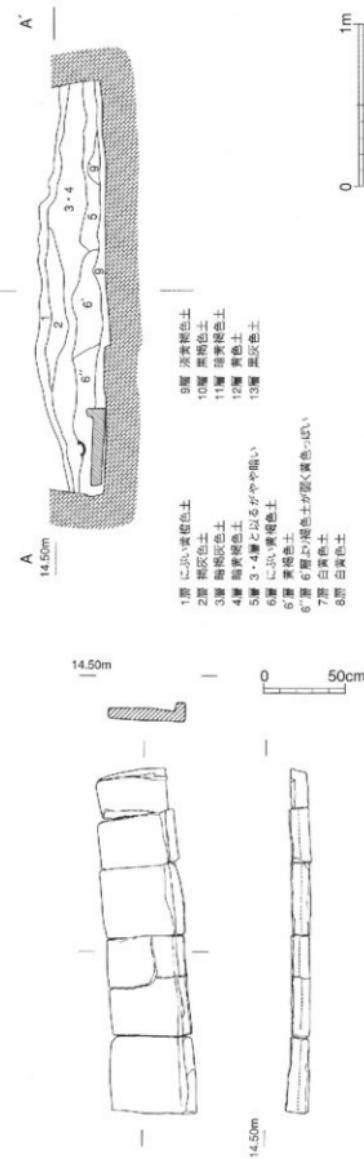
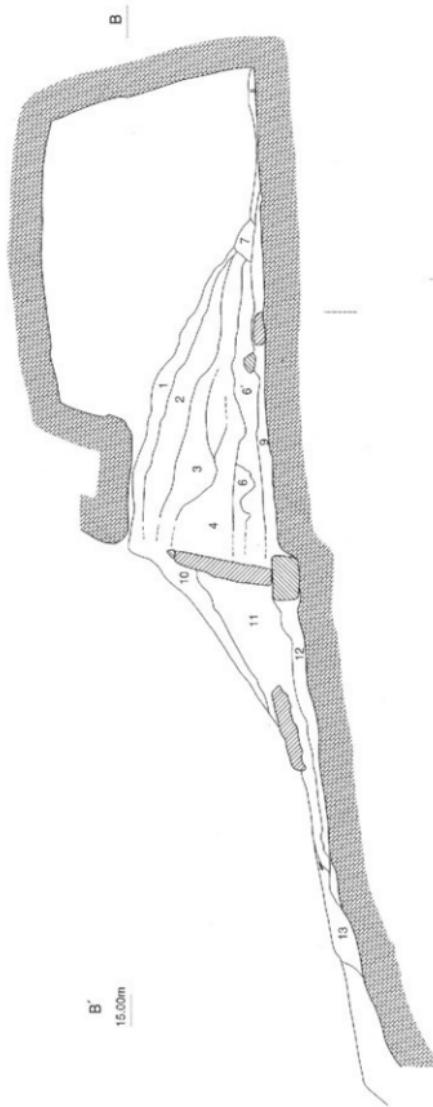
羨門には閉塞石が残存していた。



第20図 B-3号横穴墓玄室横断面図 (S=1/40)

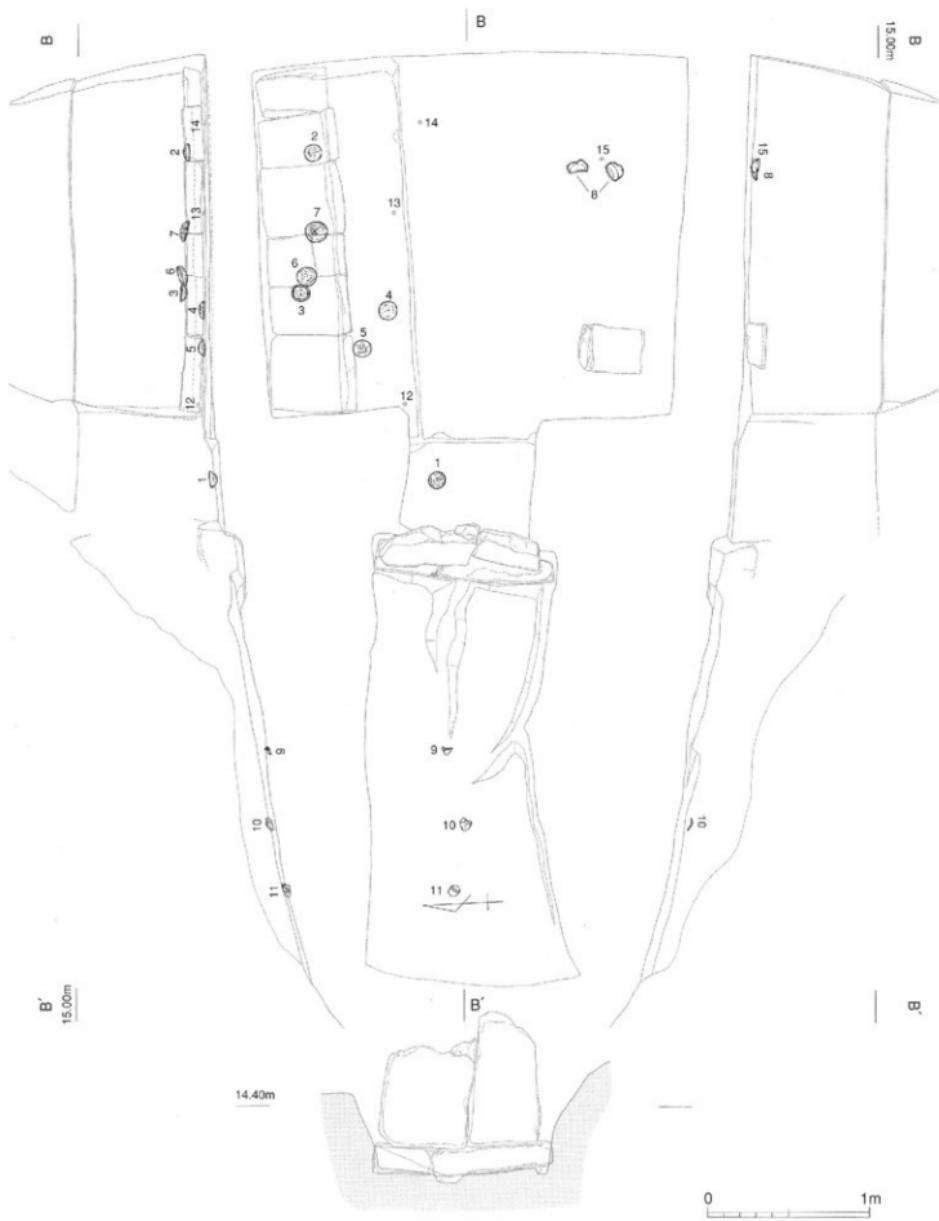


第19図 B-3号横穴墓実測図 (S=1/40)

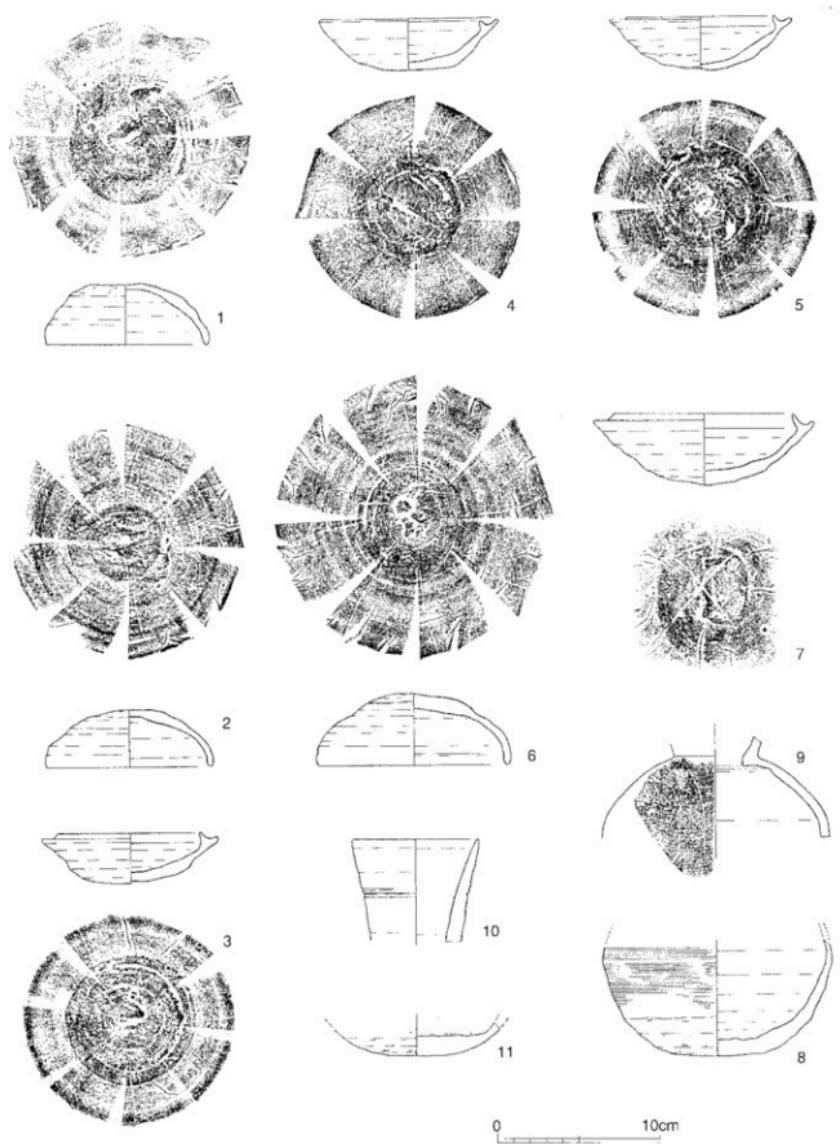


第21図 B-3号横穴墓土層断面図 ($S = 1 / 30$)

第22図 B-3号横穴墓石床実測図 ($S = 1 / 30$)



第23図 B-3号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第24図 B-3号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)



第25図 B-3号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/2)

これを受けるために床面に長さ115cm、幅20cm、深さ10cmの溝を掘り込み、そこに長さ110cm、幅15cm、高さ25cmの角柱状の石を台として置き、その上に閉塞用の2枚の板石を載せている。閉塞石は右側が現存長85cm、幅45cm、厚さ10cmを、左側が現存長65cm、幅55cm、厚さ11cmを測る。

羨道部は長さ73cm、幅80cm、高さ90cmで、玄室寄り床面には数cmの段が設けられている。

玄門・玄室

玄門は床面で幅82cm、高さ85cmを測る。

玄室は長さ223cm、前幅245cm、奥幅268cm、高さ135cmを測り、前側が若干狭くなるが、平面形態は横長長方形である。平面形態が横長長方形をとるものは、今回の調査中では一例のみである。

奥壁の高さは80cmで天井との境には幅2cmの軒の段を有し、天井に当たる部分の高さは44cmである。天井は傾斜せずに奥壁から直線的に立ち上がる。前壁も奥壁同様軒の段が玄門の上部を幅2cmで縁取るように加工されている。側壁は右側壁が高さ85cm、左側壁が高さ80cmで、幅2cmの切り込みが水平に加工されている。天井は構造的には切り妻で、側壁から外反ぎみに立ち上がり、横断面はやや膨らんだ形になっている。また頂部には棟のラインが明瞭に施してあり、縱断面では中央奥壁寄りが高くなりその前後に傾斜している。

この横穴墓は四壁に軒の段を加工していることからも、寄せ棟の天井形態を意識したものであることが解るが、奥壁から天井までが直線的であることや天井横断面が膨らんだ丸みのあることから、天井形態はアーチ形を基本とした切り妻家形である。B-2号横穴墓などの切り妻の天井と共にした特徴をもつため、肋骨状の加工方法と同じ手法によるものと考えられる。平面形態が横長長方形を呈し、非常に整美な加工がされており、当該横穴墓群の中では特異なものであるが、造墓技術などは共通したものと考えられる。

床面はほぼ水平に造られ、左側に幅90cm、高さ8cmの屍床が造られている。この屍床の幅は左袖幅より大きいため、屍床の右側縁が羨道部の段まで延びている。屍床の上には左側壁に沿って、長さ210cm、幅40~45cmの石床が設置されている。また右袖から28cmのところには石床と同じ加工を施した切石が一枚置かれている。この石を枕として使用した可能性が考えられる。

加工痕

前面を最終的には幅の狭い工具で平滑にし、磨いたような状況を呈している。このため整形段階の加工痕は残っていない。

石床

石床は5枚の切石からなるが、奥の一枚を除いて、断面L字状に加工し縁を作り出している。前壁側のもので、長さ47cm、幅52cm、厚さ6cmで、高さ7cm、幅6cmの縁が片側に作り出されている。

遺物出土状況

遺物は、玄室左側屍床の上と石床の上を中心に出土している。前庭部からも須恵器片が出土しており、中央軸に沿って長頸壺の破片が3点出土している。

玄室左側からは、屍床上から2個体(4・5)、石床上から4個体(2・3・6・7)の須恵器蓋坏が、また金環が床面から1点(14)、屍床上から2点(12・13)が出土している。玄室右側からは、直口壺の胴部破片(8)とその間から金環1点(15)が出土している。また淡道部からも蓋坏が1個体(1)出土している。

屍床上からの出土遺物3点(4・5・13)のみが床面直上の出土であるが、他は床面から数cm浮いた状況での出土である。

出土遺物

24-1~11は須恵器である。1~7は蓋坏の、1・2・6は蓋、3~5・7はかえりのある身である。大きさに大小あり、大きい方は6・7で、口径が11.8cmと12.8cm、小さい方は1~5で、口径が10.0cm前後のものである。6・7にはそれぞれ外面にヘラキズが施されている。8~10は長頸壺の破片、11は器種不明であるが、底部である。9の肩部には葉状のヘラ記号が施されている。

25-12~15は金環である。径は2cm強、厚さ0.6cm前後のものである。

(4) B-4号横穴墓（第26~30図）

B-3号横穴墓と接するように造墓されている。羨門上部が剥落しているのみで、ほぼ完全な形で残存している。床面標高は13.5~14.1mを測り、開口方向はN-82°-Wである。

土層堆積状況

遺物がほとんど残存していない状況を考慮すると、埋葬時の物はほとんど後世に掻き出されたものと考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部は、右側が真っ直ぐに延びるのに対し、左側は不整形に北側へ張り出している。現状では長さ250cm、幅140~270cmを測る。玄室床面と同じ角度で傾斜している。

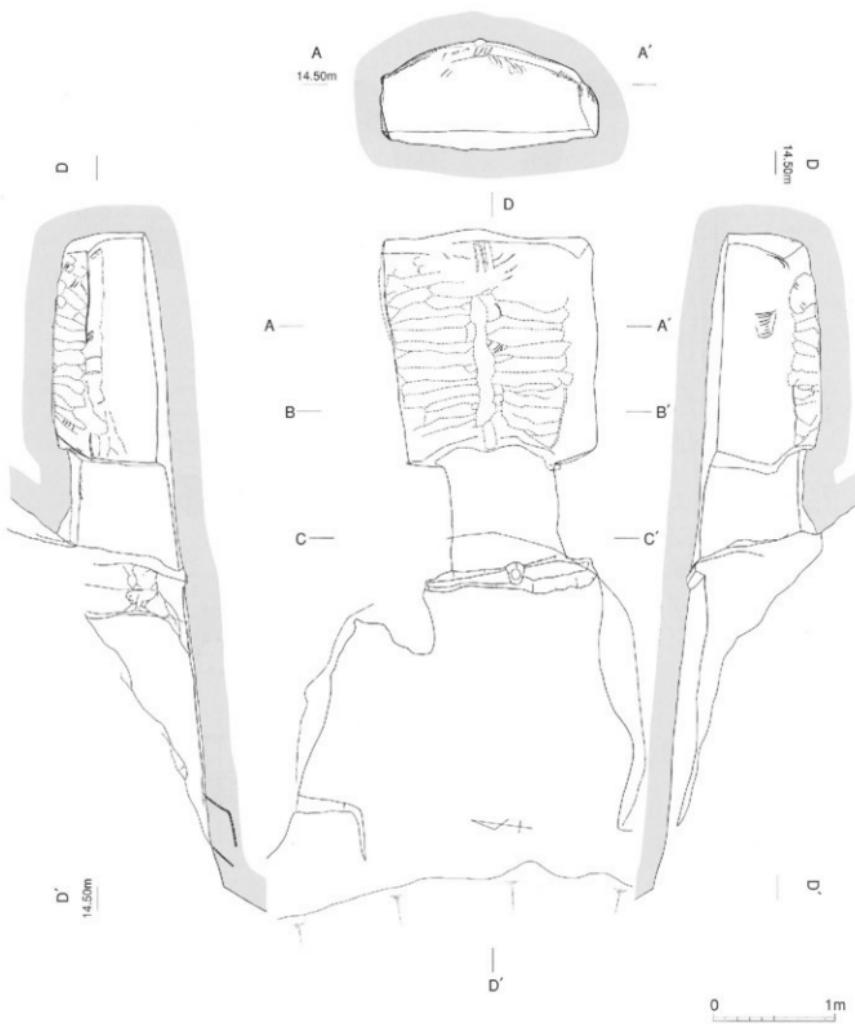
羨門は幅95cmで、床面には長さ140cm、幅15~25cm、深さ2~8cmを測る閉塞石または板を受けるための溝が設けられている。羨道部は長さ88cm、幅90cm、高さ85cmで横断面は方形である。

玄門・玄室

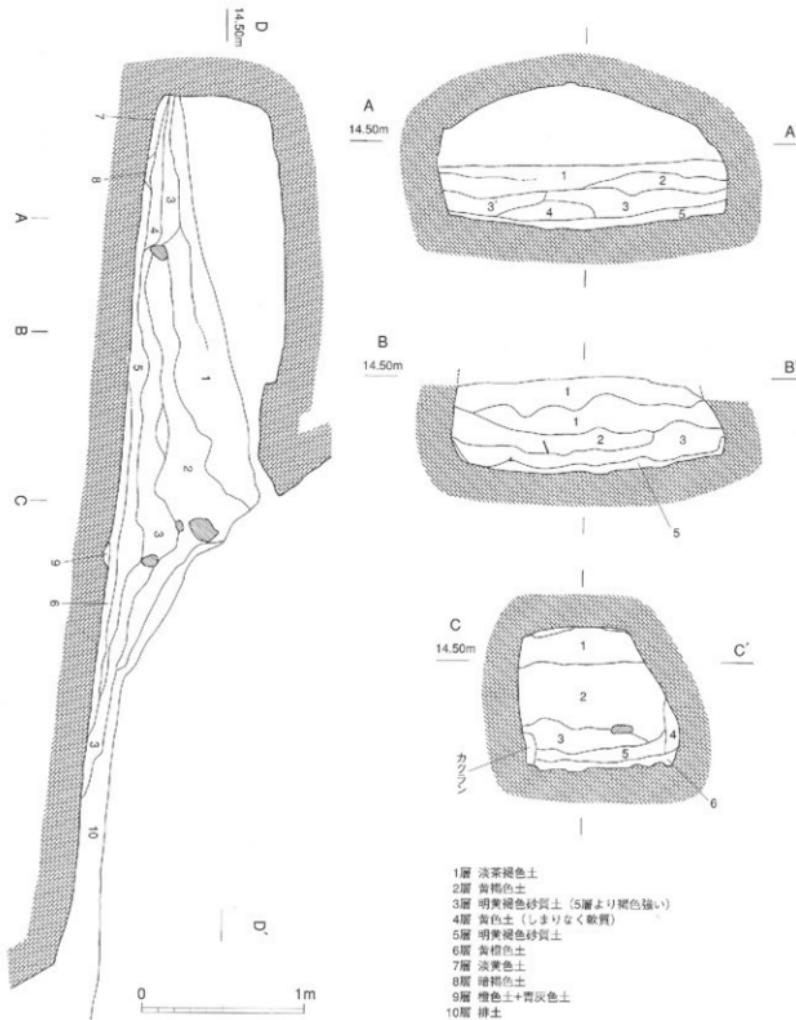
玄門は床面で幅90cm、高さ85cmを測る。

玄室は長さ191cm、前幅155cm、奥幅170cm、高さ95cmで、平面形態は奥がやや広いがほぼ縦長長方形を呈している。

奥壁は高さ63cmで直線的に立ち上がる。側壁は高さが右側壁55~65cm、左側壁45~55cmを測り、やや丸みを帯びて垂直に立ち上がり天井との境には軒を示す不明瞭な段を有する。天井には肋骨状加工が行われ、棟を造り出している。これらから天井形態は、アーチ形を基本にした切り妻の家形である。



第26図 B-4号横穴墓実測図 ($S = 1/40$)



第27図 B-4号横穴墓土層断面図 (S = 1 / 30)



第28図 B-4号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

加工痕

天井には頂部から両側壁に向かって平行に削り下ろしたような肋骨状加工が施されており、これらと同様に壁面には円刀状の工具痕が多く残っている。それとは別に床面には平刃状の工具痕及び溝状の加工痕が残っている。

遺物出土状況

前庭部から多く出土している。ほぼ床面からの出土であるが、統一性がなくバラバラの出土状況を

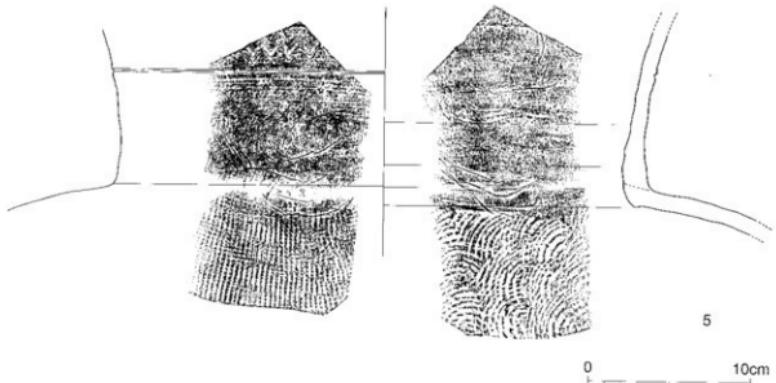
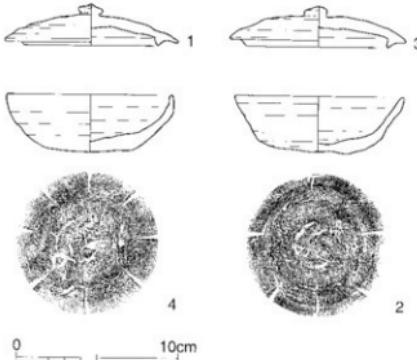
呈するので、埋葬時の位置からは移動した可能性が高い。玄室内からは甕の頭部(5)が1点出土したのみである。これは床面から約10cm浮き5層に載った状況を呈している。

出土遺物

29-1~4・30-5は須恵器である。1~4は蓋坏の1・3は蓋、2・4は身である。1・3の蓋にはつまみ(1は擬宝珠状・3は乳頭状)が付きかえりがあるので、口径はともに9.7cmである。2・4の身は口縁部がすっきりと立ち上がるため、口径は10.3cm・10.2cmと蓋よりも大きいが、蓋の最大径内には収まるものである。

第29図 B-4号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)

5は甕の頭部で、頭部外面には1条の沈線文とその上部に波状文が施されている。



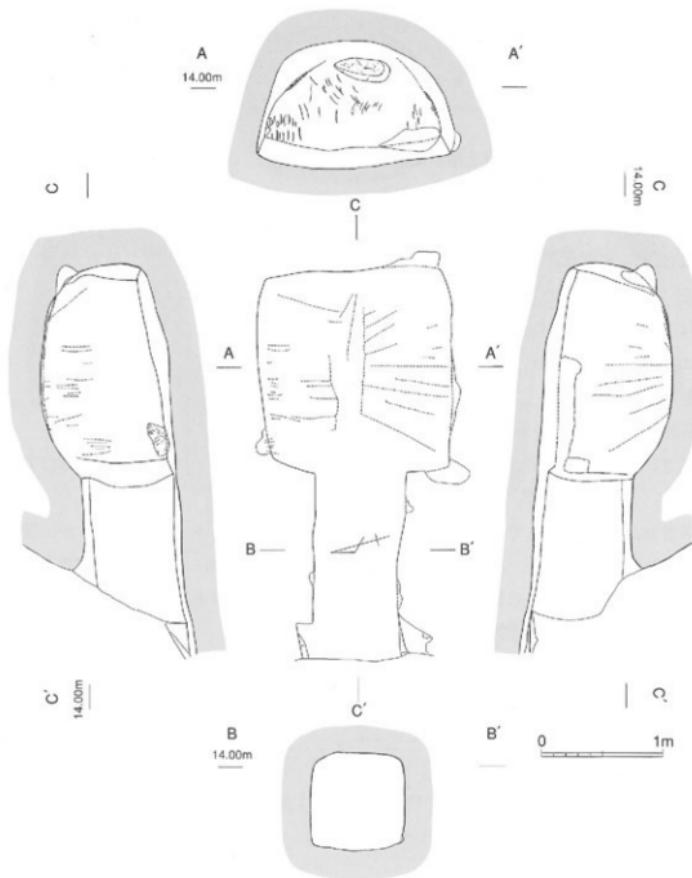
第30図 B-4号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/3)

(5) B-5号横穴墓 (第31~33図)

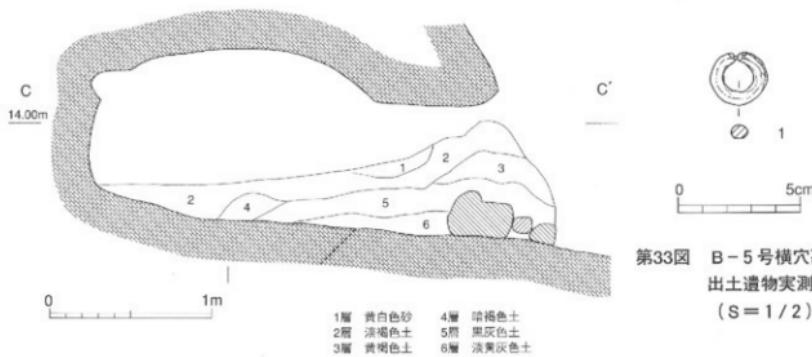
4基とは若干離れて造墓されている。前部から後部にかけてはほとんど残存していない。床面標高は13.15~13.55mを測り、開口方向はN-74°-Wである。

土層堆積状況

開口部には40cm大の礫が数点床面から出土しており、それらを乗り越えて流入土が入り込んでいる。流入土は床面に載っているので、埋葬時の物は全て後世に掻き出されたものと考えられる。



第31図 B-5号横穴墓実測図 ($S = 1/40$)



第32図 B-5号横穴墓土層断面図 (S = 1 / 30)

第33図 B-5号横穴墓
出土遺物実測図
(S = 1 / 2)

前庭・羨門・羨室

前庭部はほとんど崩れ落ち、羨門も床面左隅をわずかに残すのみである。羨道部幅より10数cm広くなるが、他の横穴墓に比べて前庭部の幅は狭かった可能性がある。

羨道部は長さ120cm、幅70~75cmと細長く、高さは80cmで、横断面はやや隅の丸い長方形である。床面は玄室から前庭部まで連続しており、同じ角度で傾斜している。

玄門・玄室

玄門は床面で幅75cm、高さ78cmを測り、横断面は隅丸方形である。

玄室は長さ165cm、前幅145cm、奥幅145cm、高さ105cmを測り、平面形態は正方形に近い縦長長方形を呈する。

奥壁は高さ75cmで、内湾して立ち上がる。四壁の界線が床面からある程度迫るが、奥壁と側壁との界線は頂部付近で不明瞭となる。前壁の袖部は左右とも明確に造られており、側壁との界線も高さ70cmまでは迫る。天井から側壁にかけては肋骨状の加工が施され、棟を作り出している。以上より天井形態はアーチ形と捉える。

加工痕

玄室天井には頂部から両側壁に向かって平行に削り下ろしたような肋骨状加工痕が残存している。奥壁には横方向からの円刃の加工痕が残っている。

遺物出土状況

耳環1点のみを玄室右奥からふるいをかけて見つけた。遺物がほとんどないことから完全に盗掘を受けたと考えられる。

出土遺物

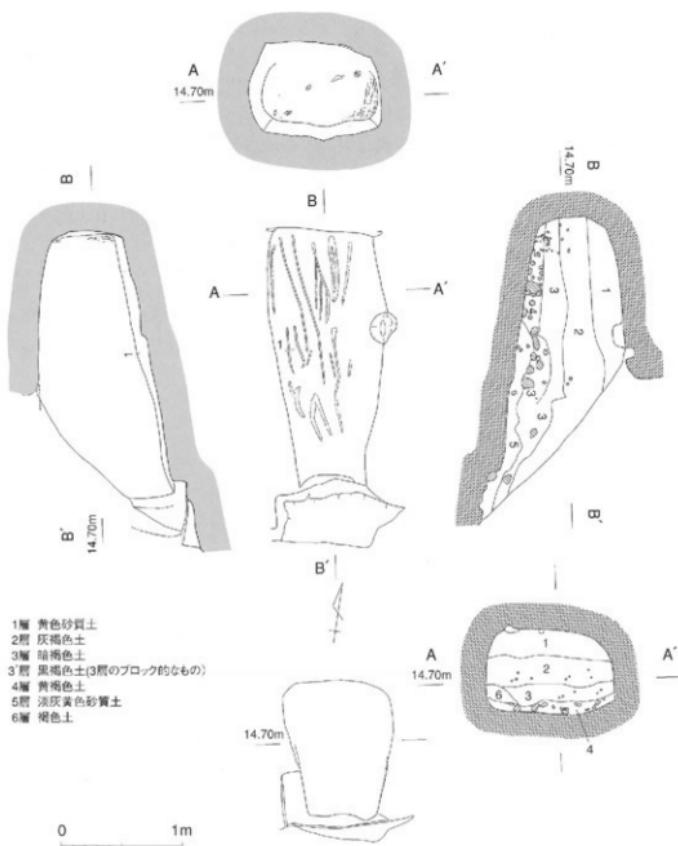
33-1は耳環である。風化著しいが、若干の金箔が確認できるので、金環であったと思われる。径2.2×2.3cmである。

第3節 C 群の調査

東側斜面の最も北に位置する。5基からなり、ほとんどの前庭部が崩壊している。玄室床面標高が14.15~14.6mの高さにあり、ほぼ同一レベルに並んでいる。

(1) C-1号横穴墓（第34・35図）

前庭部はほとんど崩壊している。床面標高は13.95~14.45mを測り、開口方向はS-10°-Eである。



第34図 C-1号横穴墓実測図 (S=1/40)

土層堆積状況

横穴墓内には天井まで流入土が充填している。最下層の5層は玄室から渓門まで地山レキを含んで堆積しており、地山レキを多く含む4層は床面に載っているため、埋葬時の物が全て後世に掻き出されたあとに、これらの流入土は堆積したものと考えられる。

前庭・渓門・渓道

前庭部の大半は失われているが、左側壁が若干残存しているので、幅はおよそ100cmと推定される。渓道部と前庭部の床面には10cmの段があり、この部分が渓門として機能していたものと考えられる。渓道部と玄室との区別は不明瞭であるが、渓門から25cm付近で幅が広がることより、ここまでが渓道部の可能性がある。

玄門・玄室

明確な渓道部がないため、玄門もない。長さ180cm、前幅63cm、奥幅85cm、高さ93cmを測り、平面形態は、袖部分のない縦長長方形を呈する。中ほどが最も幅が広く、入り口に向かって狭くなっている。

奥壁は高さ55cmで垂直に立ち上がり、界線は天井との境以外は明瞭である。横断面は隅の丸い長方形で、天井形態はアーチ形である。

一見すると未完成の横穴墓のように見えるが、側壁・奥壁は比較的平滑に仕上げられており、刀子が出土していることからも埋葬が行われたものと考えられる。

加工痕

渓道部から玄室まで連続した床面に幅1cm強、深さ1cmの溝状の加工痕が縦方向に何本も残っている。これらは、最初に溝を入れておいて、溝と溝との間をブロック状に削り取る作業をするためのものと考えられる。

遺物出土状況

玄室左側から刀子が1点(1)床面から5cm浮いた状況で出土している。

出土遺物

35-1・2は刀子である。同一個体と考えられるが、直接接合はしない。1は刃部、2は茎部である。

(2) C-2号横穴墓 (第36~41図)

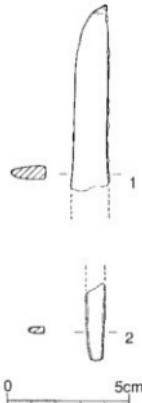
前庭部はほとんど崩壊している。床面標高は13.95~14.35mを測り、開口方向はS-35°-Eである。

土層堆積状況

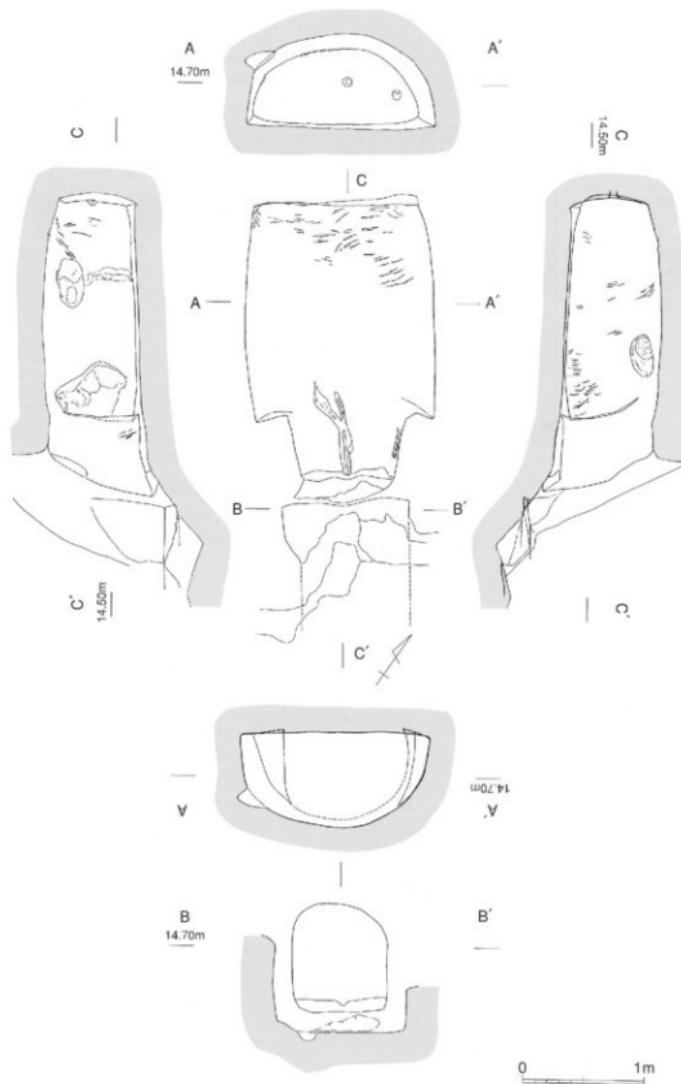
玄門に並べられた置石の上面から下、床面まで堆積している7層は地山レキの数cm程度のものを多く含むよくしまった層で、ここにほとんどの遺物を含んでいる。

前庭・渓門・渓道部

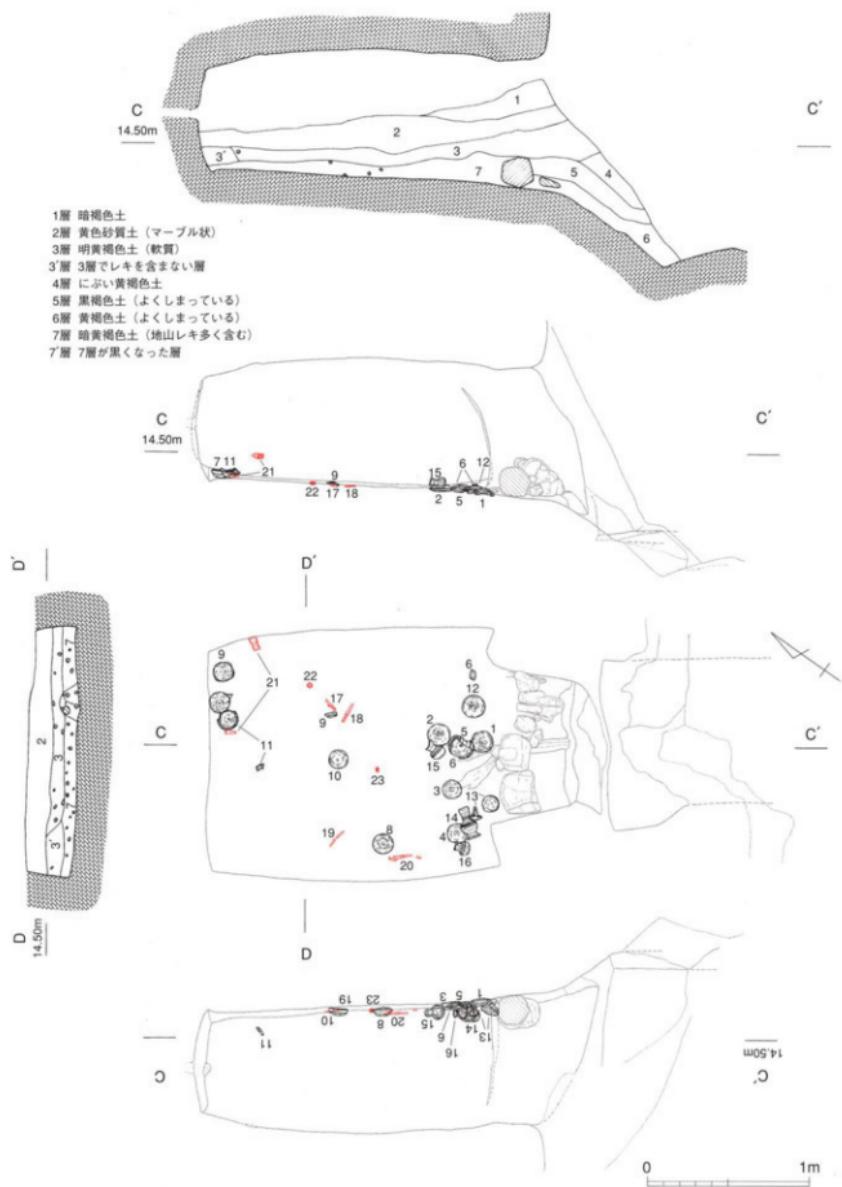
前庭部は大半が失われているが、幅は105cm程と考えられる。渓道部の前端と前庭部床面とは20cmの段があり、この部分が渓門となり、幅108cm



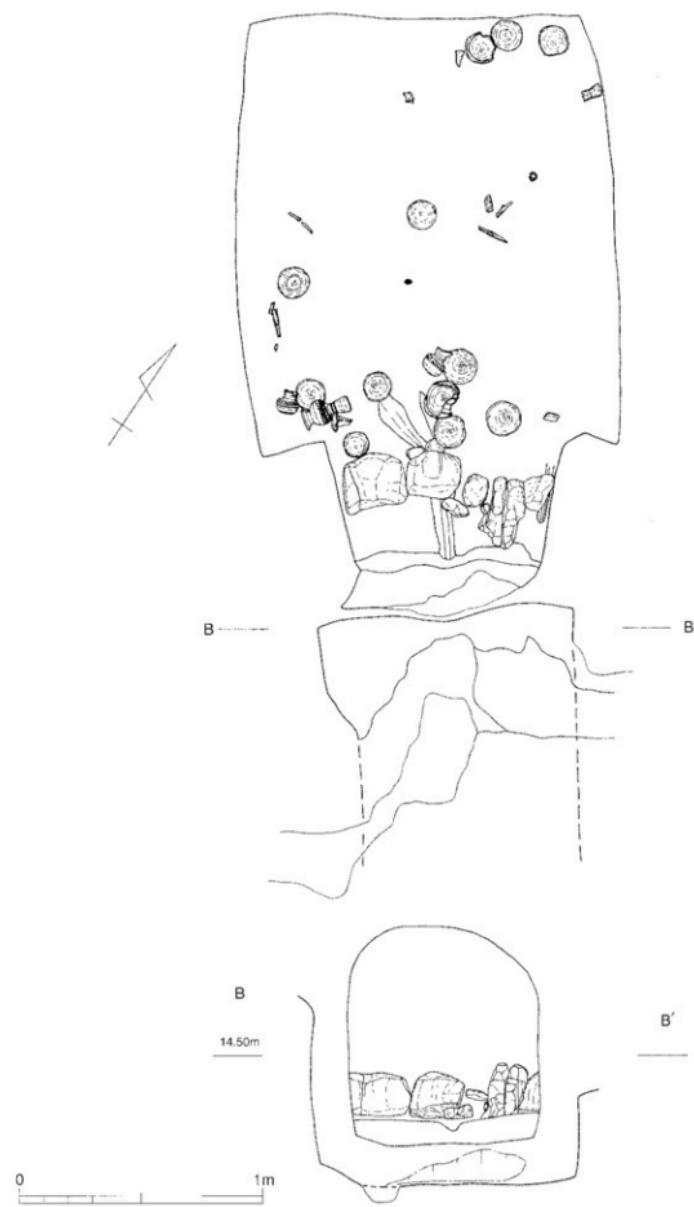
第35図 C-1号横穴墓
出土遺物実測図
(S=1/2)



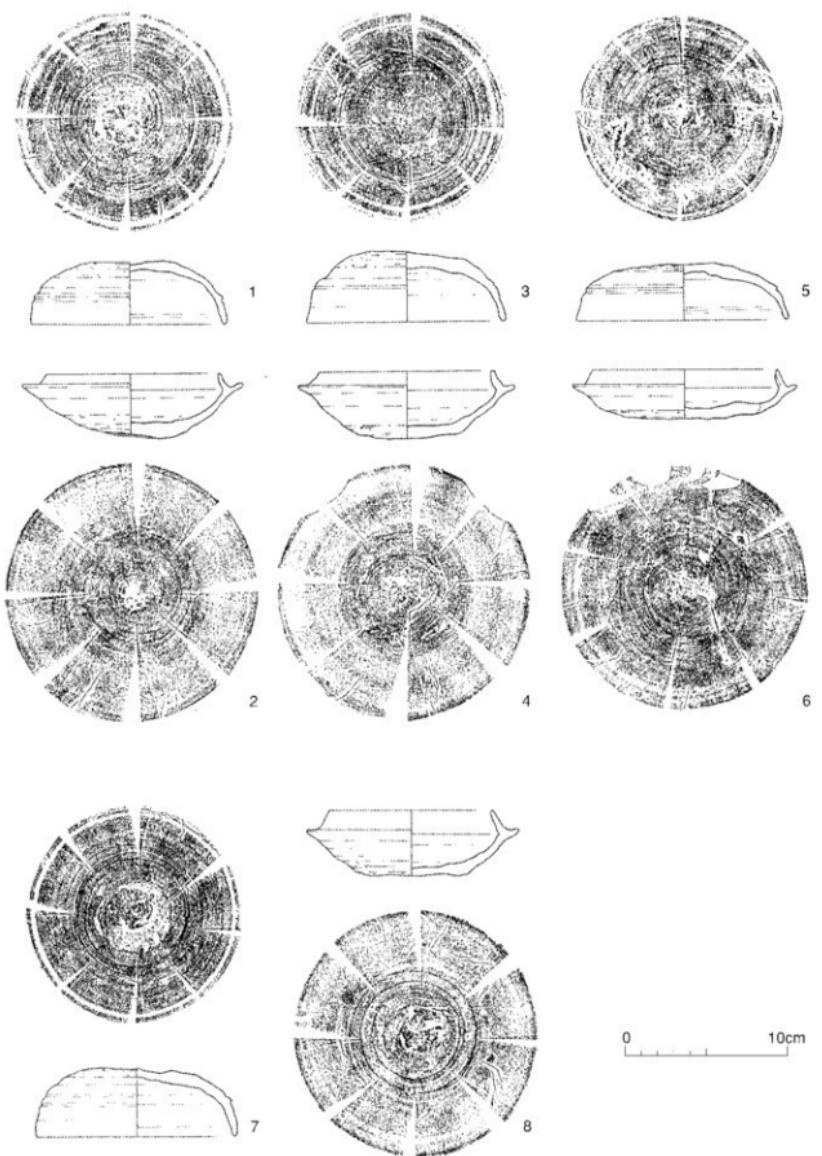
第36図 C-2号横穴墓実測図 (S = 1 / 40)



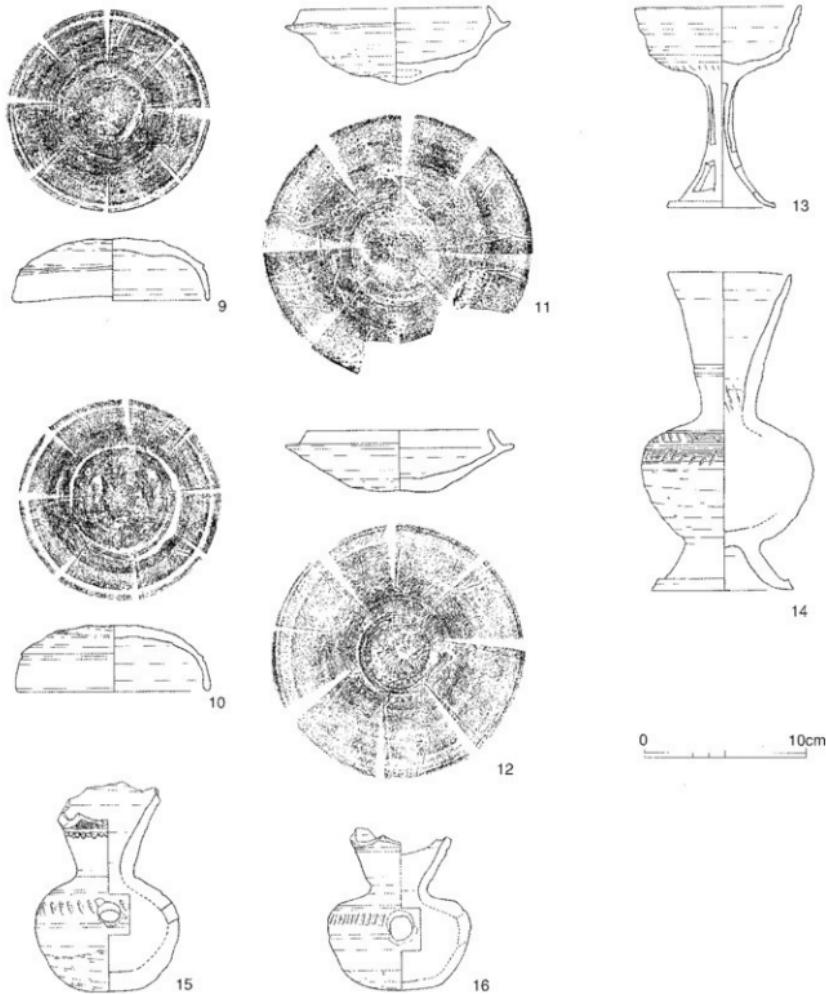
第37図 C-2号横穴墓土断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第38図 C-2号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1 / 20)

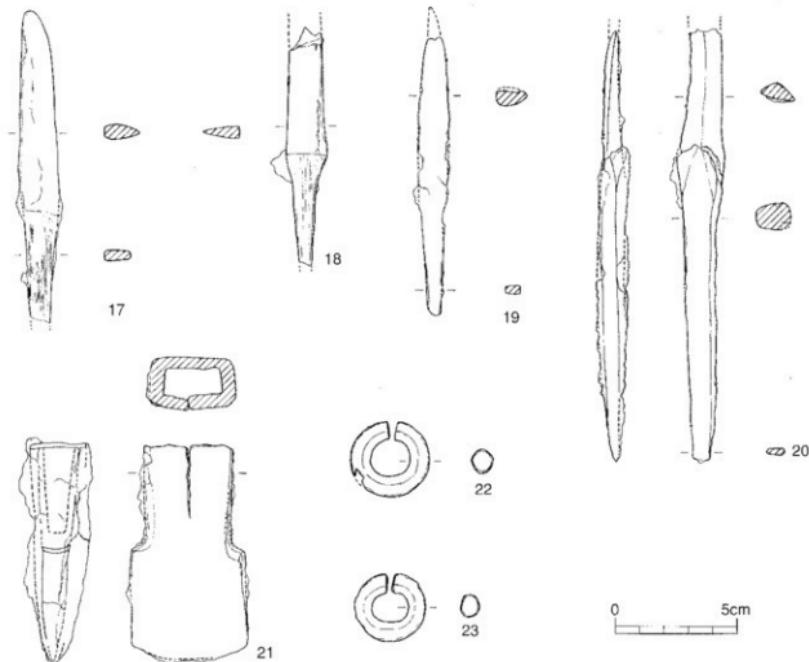


第39図 C-2号横穴墓出土遺物実測図1 (S = 1/3)



第40図 C-2号横穴墓出土遺物実測図2 (S = 1/3)

を測る。閉塞板を受けるような削り込み等の加工はされていない。羨道部は長さ47cm、前幅77cm、奥幅98cm、高さ80cmを測る。羨門付近の床面は傾斜が大きくなっている。これは羨道部の床面と前部の床面との高低差が25cmを測るために、このような加工がなされた可能性がある。



第41図 C-2号横穴墓出土遺物実測図3 (S=1/2)

玄門・玄室

玄門は床面で幅97cm、高さ75cmを測る。

玄室は長さ172cm、前幅145cm、奥幅135cm、高さ80cmを測り、平面形態は、前側がやや広い縱長長方形を呈し、両袖は逆刺し状である。前壁は右袖22cm、左袖26cmと明確な袖部をもつが、天井と前壁の境がなく、天井はそのまま底道部へと移行している。前壁としては両袖部分のみが造られている。

奥壁は高さ62cmで垂直に立ち上がり、天井縦断面はほぼ水平で、天井形態はアーチ形である。床面もほぼ水平で、横断面はきれいな半円形である。

加工痕

肋骨状加工は行われていないようであるが、丁寧な仕上げとなっており、所々幅10cm前後の刃の掘削痕が見られる。

遺物出土状況

底道部に20cm角の石が数個並べられており、玄室の内外を分ける形となっている。この置石は横穴墓が掘削されている岩盤と同じもので、ある程度加工して大きさを整えているようである。閉塞用の石材ではなく、玄門の位置を意識して設置されたと考えられる。

遺物は全て玄室内から出土している。ほとんどの須恵器は床面直上の出土であるが、右奥壁前の須恵器（7・9・10）は若干浮いている。鉄器はほとんどが床面から1～2cm浮きバラバラの状況である。金環2点（22・23）は玄室右側と左側のそれぞれから出土している。この2点はサイズが違うことより、別々の2対の金環の存在が考えられる。

出土遺物

39-1～40-16は須恵器である。1～12は蓋坏の1・3・5・7・9・10は蓋、2・4・6・8・11・12は身である。口径が11.9～13.2cmに収まる大きさで、坏身にかえりの付くものである。13は高坏である。坏部は深く立ち上がりの直立ぎみのもので、脚部上半が異常に細いものである。坏底部には刺突文が施されている。14は台付長頸壺である。台部の安定したもので、頸部に2条の沈線文、胴部上半に2段の刺突文と1条の沈線が有難羽状文を形成している。15・16は壺である。共に口縁部が欠損している。15の体部は肩が膨らみ丸みを帯びるが、16のそれは平肩でつぶれた体部を呈する。

41-17～21は鉄器である。17～20は刀子で、刃部・茎部共に欠損している。21は有肩袋状タイプの鉄斧で、長さ17.7cmの小振りのものである。茎部断面は長方形を呈する。

41-22・23は金環である。現状では風化が著しく全面に綠青が浮いているが、金箔が若干残存し金環であることが判る。内面は中空となっている。幅はそれぞれ3.2cmと2.9cmである。

（3）C-3号横穴墓（第42～46図）

前庭部はほとんど崩壊し、羨道部天井前半分も崩れている。床面標高は13.9～14.3mを測り、開口方向はS-35°-Eである。

土層堆積状況

床面から20、30cm厚さで堆積している3層は、床面に敷いてある須恵器の上に、また羨門入り口側に閉塞施設を押さえるために置かれたと考えられる石を覆い被さるように堆積している。床面に敷いてある須恵器は、後述するが須恵器床と考えられるもので、その破片は開口部に近い2層からもやや多くの出土を見ることから、いったん開口し後世の搔き出しが行われた可能性が考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部の大半は失われている。幅は70cmを測るが長さは不明である。

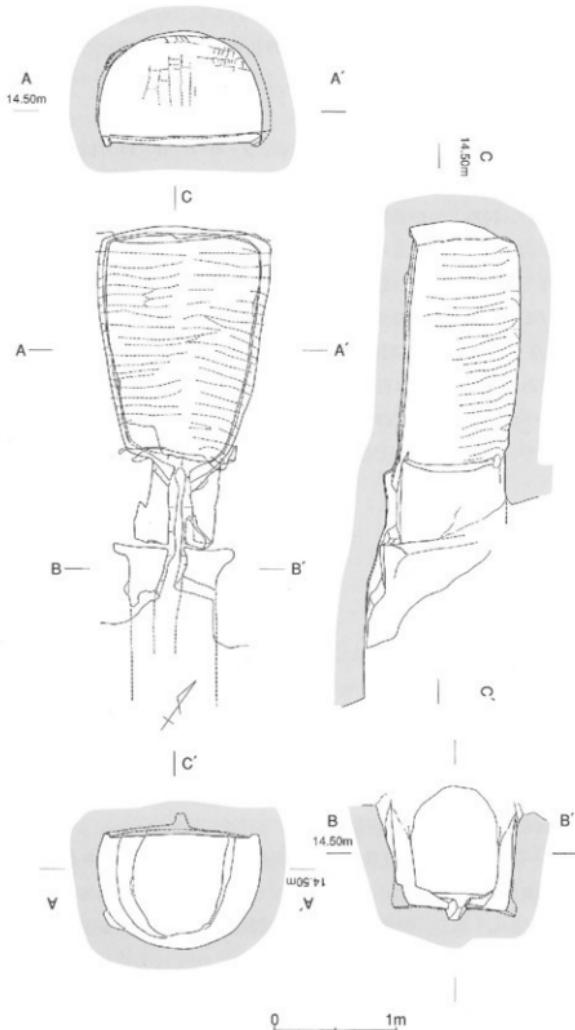
羨門は幅70cmで、前庭部床面から若干高低差をもち、長さ100cm、幅10～15cmの溝が設けられており、閉塞板を上から差し込むような構造となっている。

羨道部は長さ63cm、幅55～64cm、高さ90cmを測る。羨道部床面と前庭部床面の高さは13cmの差がある。

玄室からの溝が羨道部から前庭部にかけて中軸上に延びている。溝は羨道部で幅20cm、深さ10cm、前庭部で幅18cm、深さ8cmを測るしっかりしたものである。

玄門・玄室

玄門は床面で幅65cm、高さ85cmを測る。玄室は長さ193cm、前幅80cm、奥幅138cm、高さ95cmを測る。平面形態は、奥が広く前が狭い縱長長方形で、前壁に明確な袖がなくカーブしながらそのまま羨道部へと移行する徳利形の袖形態を呈している。



第42図 C-3号横穴墓実測図 (S=1/40)

奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、界線も明確であるが、前壁は明確には造られていない。横断面はほぼ半円形で、天井形態はアーチ形である。

床面には溝が廻っており、玄門中央で合流し羨道部へと続く。溝の幅は5~10cm、深さは3、4cmである。

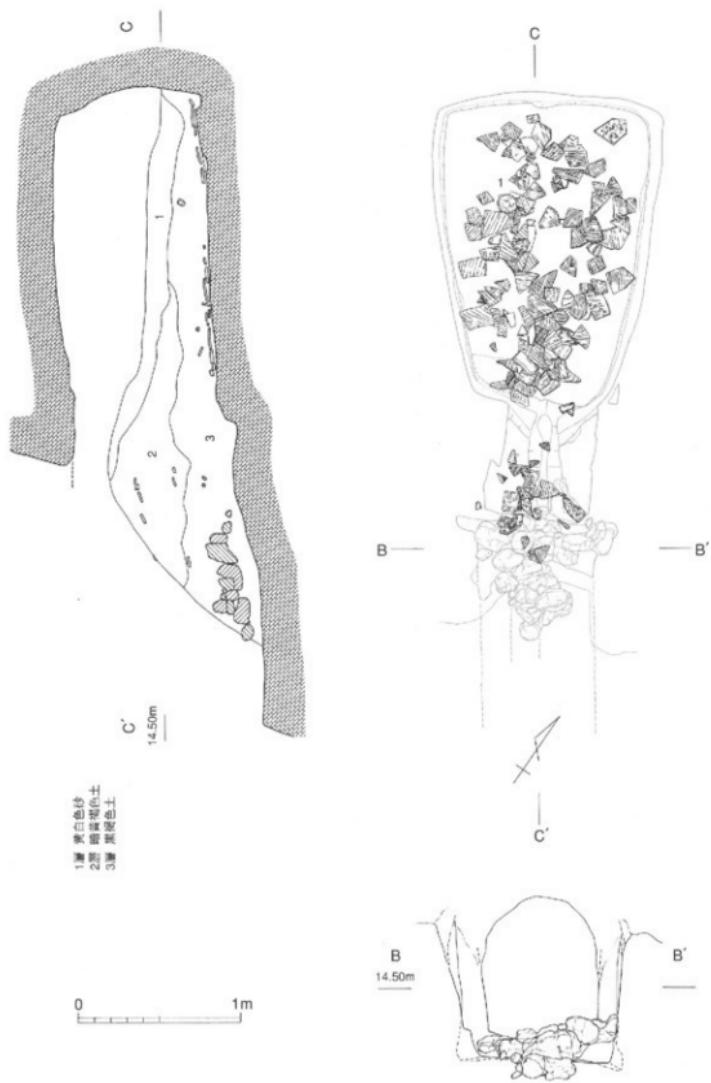
加工痕

玄室天井は肋骨状の加工が施されており、天井頂部から両側壁に平行に削り落とされたきれいな加工痕が幅10cm前後の溝状に残っている。

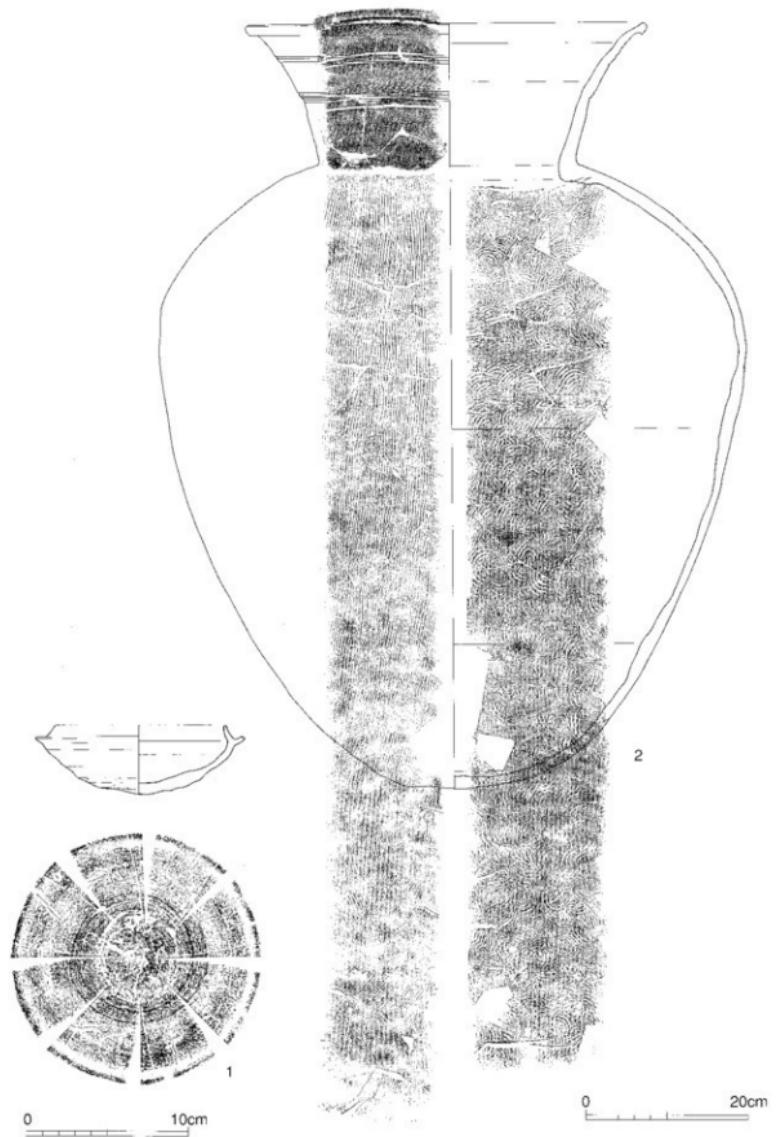
遺物出土状況

前庭部に15cm前後の石が固まって出土している。石は横穴墓が掘削されている岩盤と同じもので、片手で持ち上がるサイズのものを利用したと考えられる。閉塞板を設置したあと、閉塞板を押さえるために置かれたもので、一番奥は羨門に平行して並んでおり、中の石は前庭部床直で中央の溝の上に置かれ、一番前側の石は約8cmの土の上に載っている。

玄室内全面には、須恵器壺が1個体破碎して敷き詰めた状況で検出された。須恵器床と考えられる。壺の破片は2層からもかなり出土しており、元位置のものと移動したものがあるが1個体の大型壺



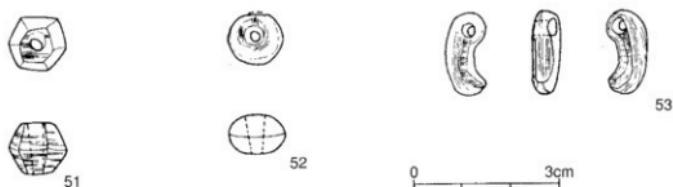
第43図 C-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第44図 C-3号横穴墓出土遺物実測図1 (1 : S = 1/3 2 : S = 1/6)

◎ - 0 3	◎ - 0 4	◎ - 0 5	◎ - 0 6	◎ - 0 7
◎ - 0 8	◎ - 0 9	◎ - 0 10	◎ - 0 11	◎ - 0 12
◎ - 0 13	◎ - 0 14	◎ - 0 15	◎ - 0 16	◎ - 0 17
—				
◎ - 0 18	◎ - 0 19	◎ - 0 20	◎ - 0 21	◎ - 0 22
—				
◎ - 0 23	◎ - 0 24	◎ - 0 25	◎ - 0 26	◎ - 0 27
—				
◎ - 0 28	◎ - 0 29	◎ - 0 30	◎ - 0 31	◎ - 0 32
—				
◎ - 0 33	◎ - 0 34	◎ - 0 35	◎ - 0 36	◎ - 0 37
—				
◎ - 0 38	◎ - 0 39	◎ - 0 40	◎ - 0 41	◎ - 0 42
—				
◎ - 0 43	◎ - 0 44	◎ - 0 45	◎ - 0 46	◎ - 0 47
—				
◎ - 0 48	◎ - 0 49	◎ - 0 50	0	3cm

第45図 C-3号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/1)



第46図 C-3号横穴墓出土遺物実測図3 (S=1/1)

(2)に復元できた。当該横穴墓唯一出土の壊身1個体はこの須恵器床の直上から伏せた状況で出土した。

51点の玉類は玄室内排土をふるいにかけて見つけたもので、ほぼ床直からの出土である。

出土遺物

44-1・2は須恵器である。1はかえりのある壊身で、口径が12.0~12.3cmのものである。2は大型の壺で、須恵器床として使用されていたものである。1の径49.0cm、器高94.4cmを測り、口縁部はハの字状に外反する。体部は倒卵形のプロポーションを呈し、底部は丸底である。

45-3~46-53は玉類である。3~50はガラス小玉で、49・50は他より大きく直径5.5~8mmのもので、他は直径の平均値3.3mmを測る小さなものである。47のみ黄色、3~5・49の4点は水色、他は紺色を呈するが、黄色の1点と水色の大きな2点は不透明のものである。51~53は水晶製のそれぞれ切子玉、丸玉、勾玉である。53の勾玉は長さ1.7cmと小さく、これら玉類は全体的に小さなものである。

(4) C-4号横穴墓 (第47~51図)

前庭部の途中から崩れている。床面標高は14.15~14.65mを測り、開口方向はS-47°-Eである。

土層堆積状況

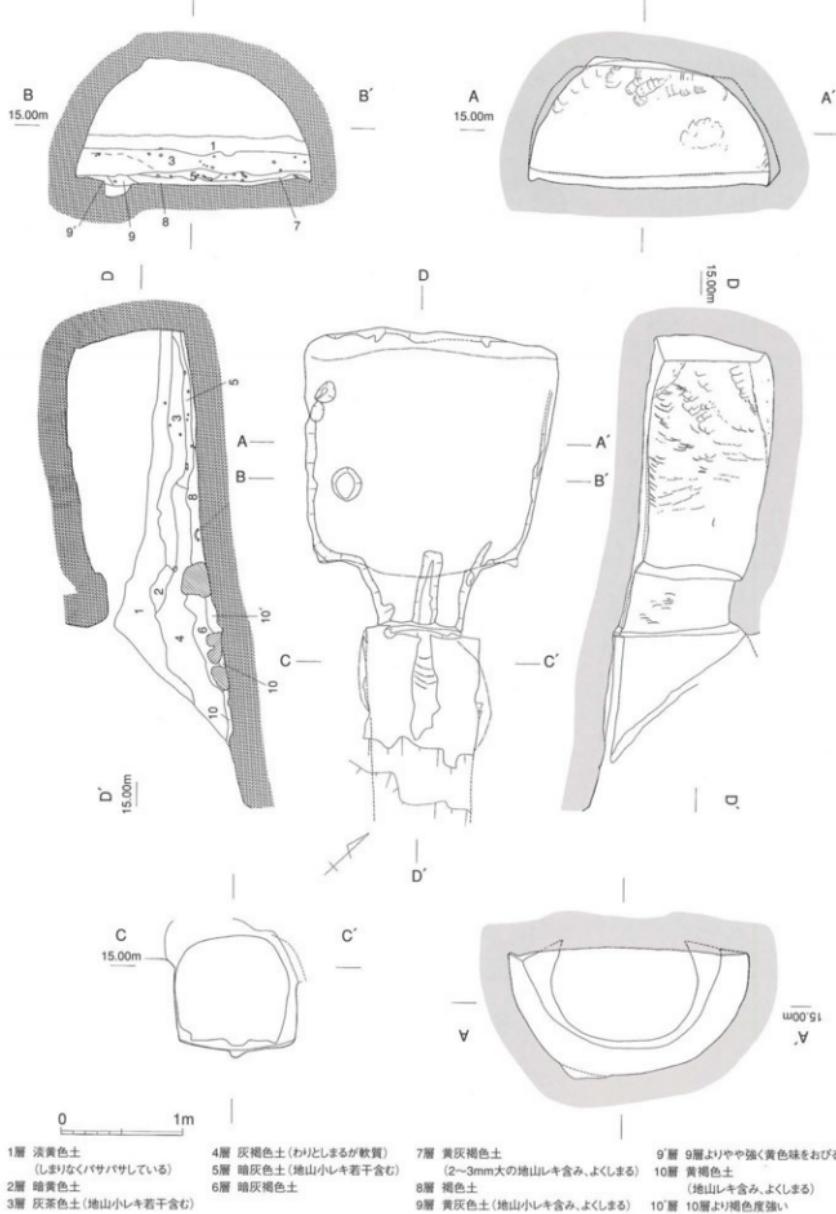
玄門に並べられた置石の上面から若干下より床面まで堆積している8層は、地山レキをあまり含んでいないきれいな層である。その上に堆積する5・7層は地山レキを含み、7層はよくしまった層である。後述するが、遺物は最下層の地山小レキを含むがしまった9層と8層からと、これらの上面となる5・7層から出土しており、その上に流入土である4層が堆積している。

前庭・羨門・羨道

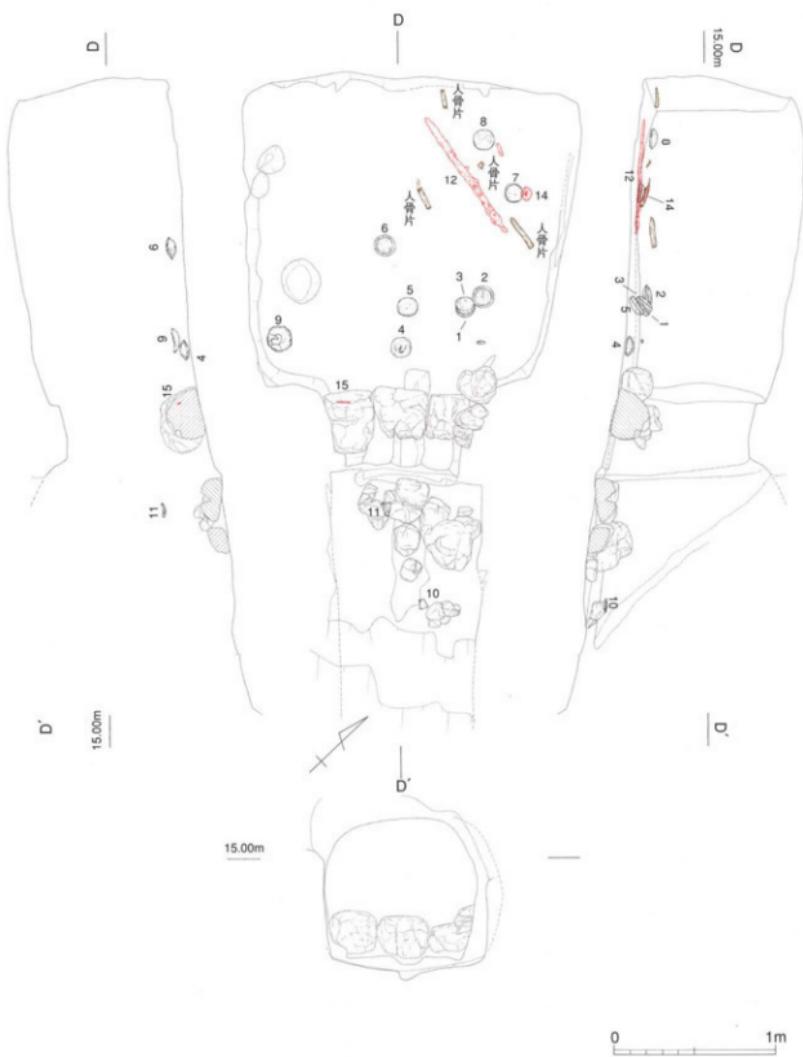
前庭部は幅90cmで真っ直ぐに延び、現状では長さ100cmを測る。床面には中央軸に沿って断面U字状の溝が前庭部途中まで掘られ、長さ83cm、幅8~20cmを測る。

羨門は幅70cm、高さ100cmで、床面には長さ70cm、幅10cm、深さ2~5cmの閉塞施設を受けるための溝状の窪みが設けられている。

羨道部は長さ45cm、前幅70cm、奥幅100cm、高さ88cmで、前が狭く奥の広い台形状を呈する。床面には玄門付近から延びている長さ60cm、幅17cm、深さ5cmの溝が中央軸上に延びているが、前庭部の中央溝との連続性はあまり感じられない。また両側壁沿いにも幅7cm、深さ1~2cmの溝が玄室から延びている。



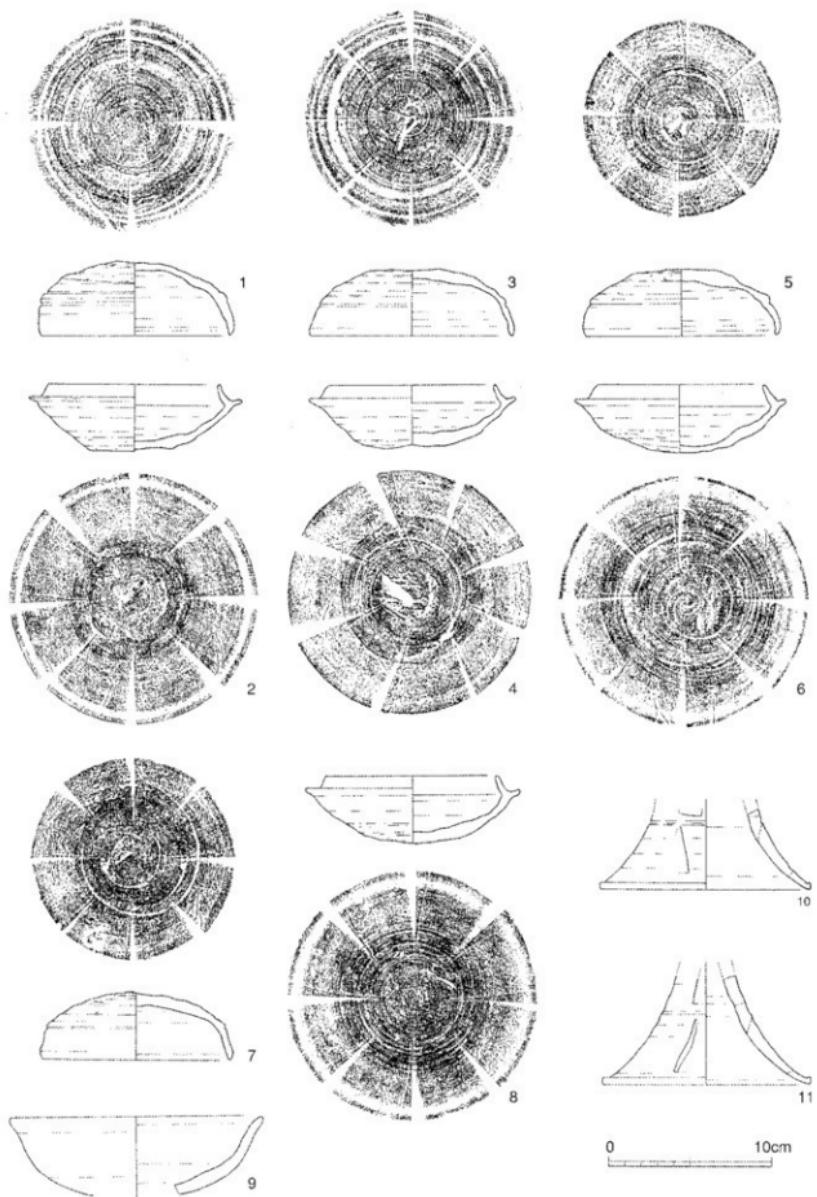
第47図 C-4号横穴墓実測図 (S=1/40)



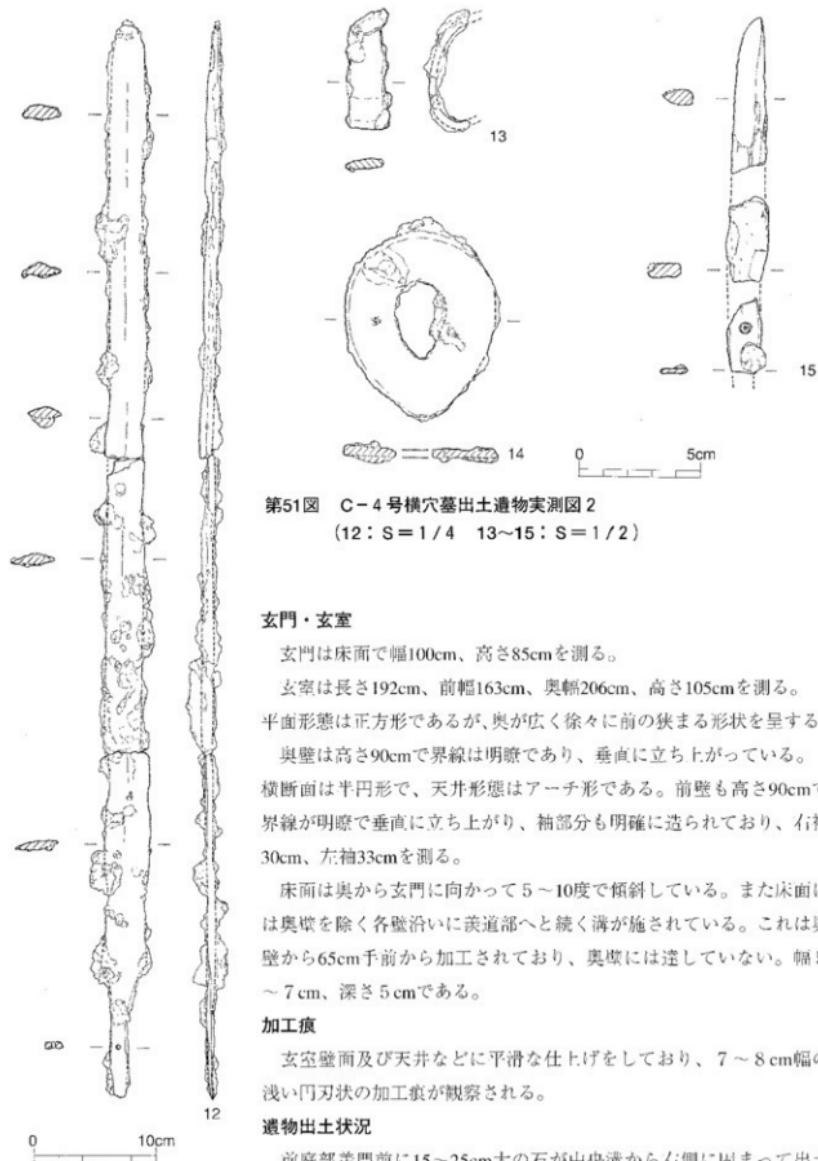
第48図 C-4号横穴墓遺物出土状況図1 (S=1/30)



第49図 C-4号横穴墓遺物出土状況図2 (S=1/20)



第50図 C-4号横穴墓出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)



第51図 C-4号横穴墓出土遺物実測図2
(12: S=1/4 13~15: S=1/2)

玄門・玄室

玄門は床面で幅100cm、高さ85cmを測る。

玄室は長さ192cm、前幅163cm、奥幅206cm、高さ105cmを測る。

平面形態は正方形であるが、奥が広く徐々に前の狭まる形状を呈する。

奥壁は高さ90cmで界線は明瞭であり、垂直に立ち上がっている。

横断面は半円形で、天井形態はアーチ形である。前壁も高さ90cmで界線が明瞭で垂直に立ち上がり、袖部分も明確に造られており、右袖30cm、左袖33cmを測る。

床面は奥から玄門に向かって5~10度で傾斜している。また床面には奥壁を除く各壁沿いに狭道部へと続く溝が施されている。これは奥壁から65cm手前から加工されており、奥壁には達していない。幅5~7cm、深さ5cmである。

加工痕

玄室壁面及び天井などに平滑な仕上げをしており、7~8cm幅の浅い円刃状の加工痕が観察される。

遺物出土状況

前庭部玄門前に15~25cm大の石が中央溝から右側に固まって出土している。石は横穴墓が掘削されている岩盤と同じもので、閉塞板を

設置したあと、閉塞板を押さえるために積み上げられたものが、崩れた状況と考えられる。また奥道部には同じ石材の30cm前後角の石が3個体並べられており、玄室の内外を分ける形となっている。この3個体は面取りして立方体に削り出し、ある程度大きさを整えているようである。

前部から出土している須恵器は、4層からの出土である。

当該横穴墓群唯一出土の土師器椀が、正位で玄室左前の8層上面から出土している。玄室中央から右側には須恵器蓋坏4組と鉄剣が5・7層、8・9層上面から出土している。蓋坏は正位のものもあれば逆位のものもあり、元位置からは移動していると考えられる。鉄剣は床面に対して水平に出土し、鍔が20cm離れて同レベルで出土している。刀子(15)が玄門の置石の直上から1点出土している。

人骨片が鉄剣の周辺から5点出土している。鉄剣よりは若干浮くが7・8とはほぼ同レベルである。

出土遺物

50-1~8・10・11は須恵器である。1~8は蓋坏の1・3・5・7は蓋、2・4・6・8はかえりのある身である。口径が11.9~12.4cmとほぼ同規格のものである。10・11は高坏の脚部で、10は段違いにスカシの痕跡が確認でき、11は2段のスカシが現状で2ヶ所に確認される。

50-9は土師器椀である。口径15.5cmで蓋坏のそれと比較すると大きいものである。風化が著しいが内面に朱塗りの痕跡が観察される。

51-12~15は鉄器である。12は鉄剣の身で、13と14は12のそれぞれ錐と鍔である。刃部長75.5cm、刃部幅3cmを測る細身のものである。15は刀子である。3点別々の出土であるが、幅、厚さなどが連続するため同一個体と考えられる。莖部には目釘穴がある。

(5) C-5号横穴墓 (第52~54図)

玄室のみ残存している状況である。天井部も前半分は崩壊している。床面標高は14.32~14.6mを測り、開口方向はS-51°-Eである。

土層堆積状況

玄室最奥部天井近くまで流入土が入り込んでいる。最下層の11層は粒子が細かくよくしまった層で、遺物が出土するため、埋葬時から開口するまでに堆積した層と考えられる。7層には大きめの地山レキを含み、外側へも堆積しているので、天井が崩壊して以降の堆積と考えられる。

前庭・羨門・羨道

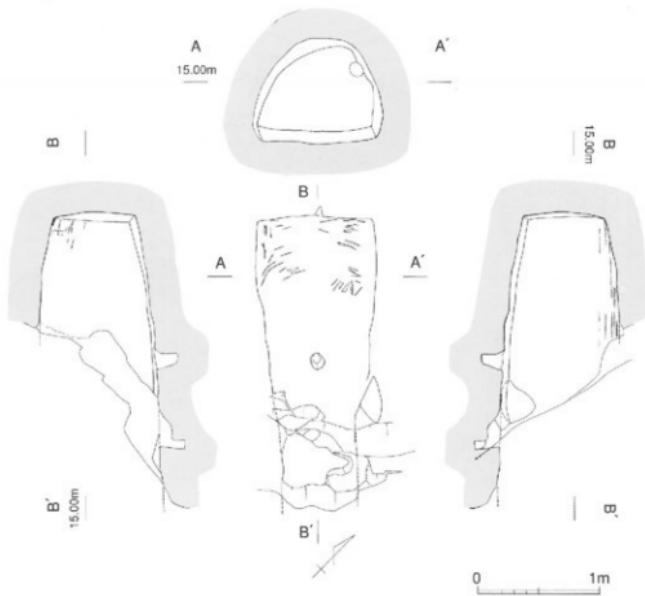
完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

床面が崩壊した直ぐ奥右側に若干広まるところがあり、そこから玄室が始まると考えられる。長さ165cm、前幅72cm、奥幅95cm、残存高94cmを測る。平面形態は、縦長長方形を呈し奥幅が広く前幅が徐々に狭くなり無袖である。

奥壁は高さ70cmで界線は明瞭であり、垂直に立ち上がっている。横断面は頂部が右に偏りやや歪な半円形を呈し、天井形態はアーチ形である。



第52図 C-5号横穴墓実測図 (S = 1 / 40)

加工痕

床面及び残存する各壁には小さなキズ状の加工痕が観察され、特に床面には前奥・左右・斜め方向の筋状の加工痕が、側壁天井にも溝状加工の一部が残った筋状の加工痕が前奥方向に残されている。

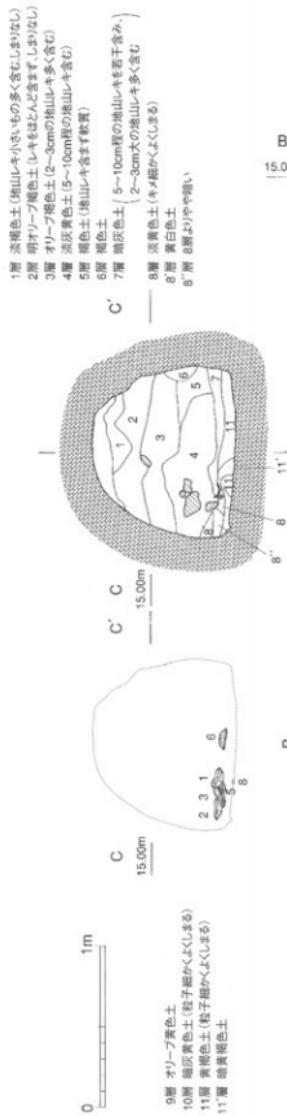
遺物出土状況

玄室左奥に蓋坏の蓋1個体、身4個体が全て口縁部を上にして出土している。身(2~5)はほぼ床面直上から出土しており、元位置の可能性がある。また蓋坏の手前に耳環が1点(8)、床面直上で出土している。中央軸上に出土している蓋坏身(6)のみは口縁部を下に伏せた状態で、床面から若干浮いている。壺の破片が玄室右前から1点(7)のみ出土している。

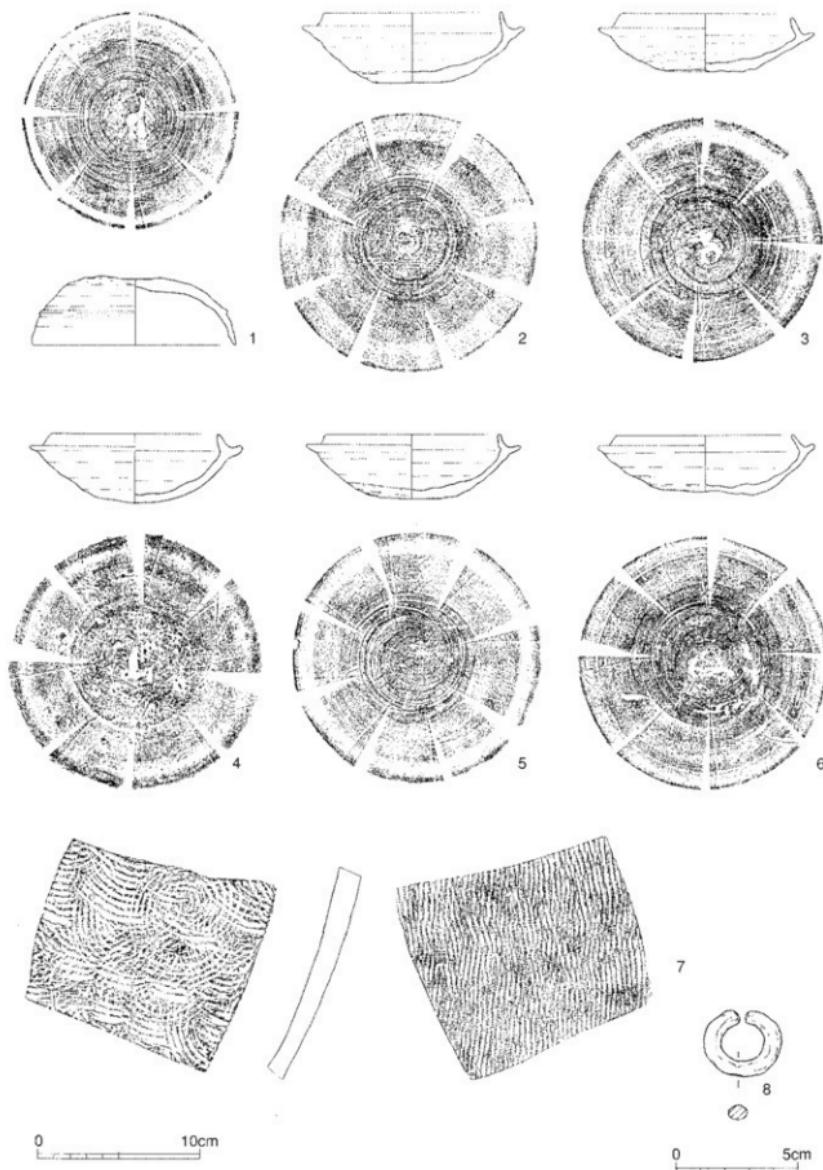
出土遺物

54-1~7は須恵器である。1~6は蓋坏の1は蓋、2~6はかえりのある身である。口径が12.0~12.7cmではほぼ同規格のもので、3·5·6などは底径が5~6cmもあり安定したものである。7は唯一出土の壺の胴部破片である。内面同心円タタキ目、外面平行タタキ目である。

54-8は耳環である。風化が著しく剥落しており、銅軸の周りのメッキは不明である。



第53図 C-5号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



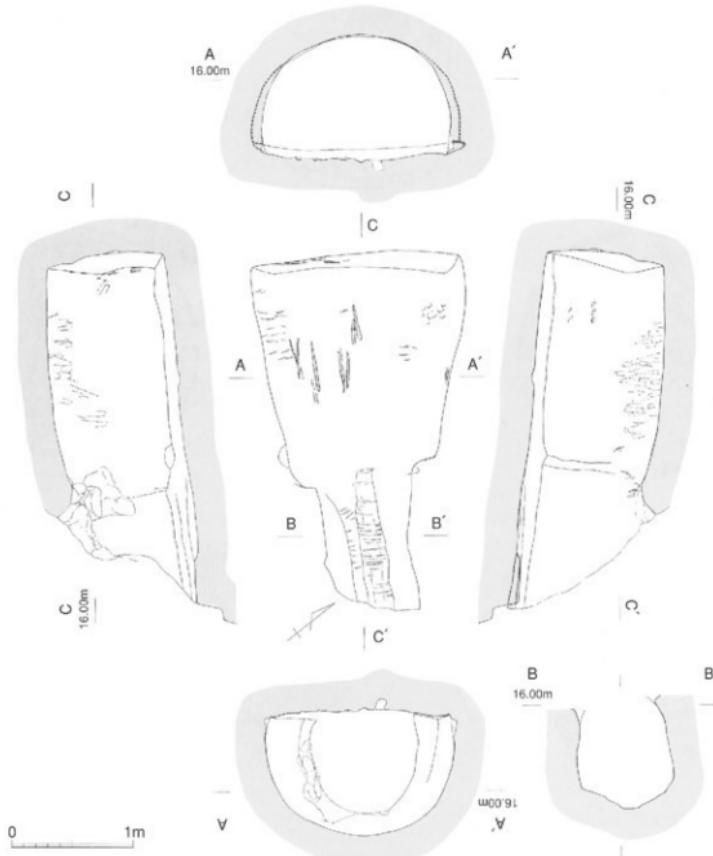
第54図 C-5号横穴墓出土遺物実測図 (1~7: S=1/3 8: S=1/2)

第4節 D群の調査

東側斜面C群の南、C群より一段高い位置に所在する。6基からなり、南側にいくにつれ丘陵頂部の破壊削平がひどくなり、残存率が悪くなる。D-6号横穴墓はひと穴分下がった位置に造られていて、D-1号横穴墓とD-2号横穴墓の間に位置するのでD群として捉えた。

(1) D-1号横穴墓（第55~58図）

D群の中で若干高位置に造られている。床面標高は15.2~15.4mを測り、開口方向はS-51°-Eである。前庭部は崩れたのか存在しない。



第55図 D-1号横穴墓実測図 (S=1/40)

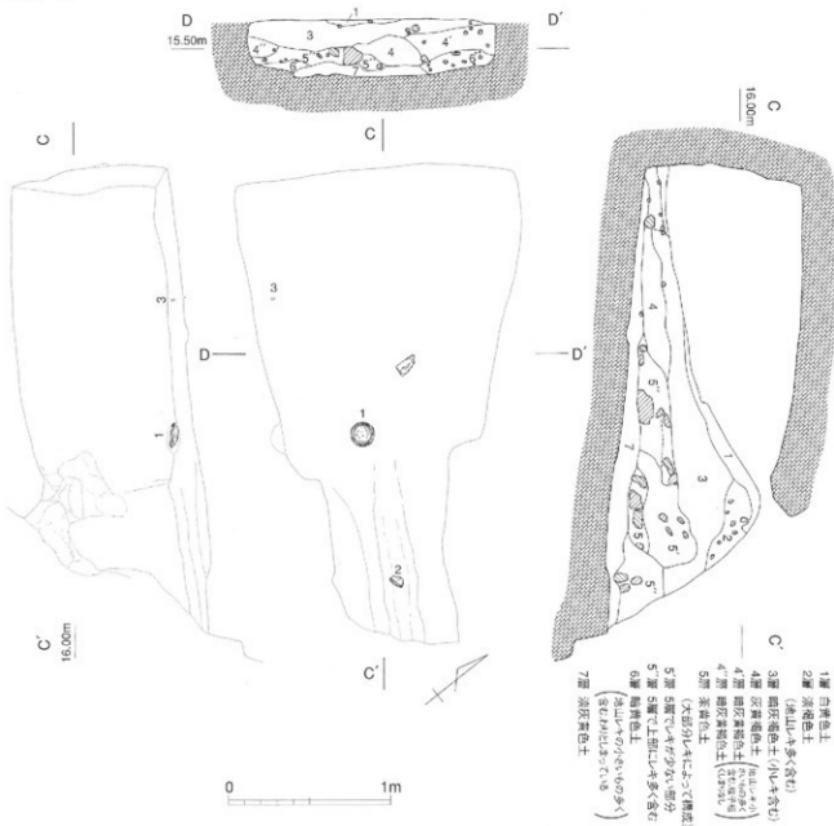
土層堆積状況

後述するが、遺物がほとんどなく、その遺物も床面から10cm以上浮いて出土しているため、遺構内の堆積土は、埋葬時の物が後世に掻き出されたあとに堆積したものと考えられる。特に5層には多くの地山レキを含んでいる。

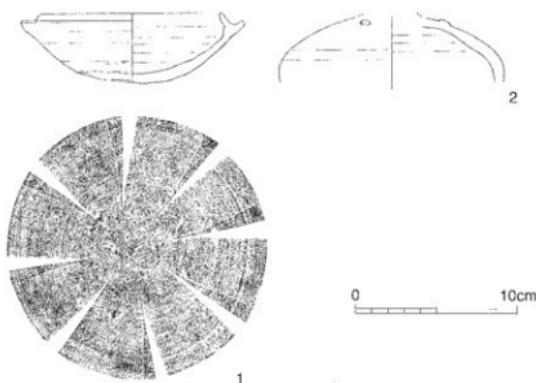
前庭・羨門・羨道

前庭部及び羨門は崩壊している。

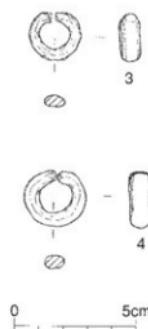
羨道部は天井及び前方部が崩壊しており、平面形態は長方形で、現存長110cm、幅68~80cm、高さ97cmを測る。床面には、玄門中央からの溝が中軸上に崩壊した部分まで延びている。幅20cm、深さ5cmを測る。床面はこの溝に向かい両壁から傾斜しているため、横断面は船底形を呈する。



第56図 D-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第57図 D-1号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)



第58図 D-1号横穴墓
出土遺物実測図2
(S=1/2)

玄門・玄室

玄門は上部が崩れているが、幅90cm、復元高80cmの横長の半円形を呈する。

玄室は右側壁長167cm、左側壁長184cmと長さが違い、前幅120cm、奥幅170cm、高さ105cmを測る。平面形態は、右袖は20cm、左袖が10cmとやや短く不明瞭ではあるが、奥が広く前の狭い縦長長方形を呈する。

奥壁は高さ92cmで界線は明瞭であり、垂直に立ち上がっている。横断面は半円形で、天井形態はアーチ形である。

加工痕

羨道部床面、特に中央の溝内、また右側壁にも一部に円刃状加工痕が観察される。

玄室内床面には幅2~4cmの溝状の加工痕及び幅5~8cmの半刃状の加工痕が観察される。後者は奥から前に施されている。右壁にも若干の上方向の半刃状の加工痕が、天井から両側壁には調整段階の上から下へ平行した削り痕が観察される。

遺物出土状況

羨道部から壺の肩部破片が1点、中央の溝上に浮いた状況で出土している。玄室内からは、左前に壺身1個体が伏せた状態で、その奥に金環1点が共に床から浮いた状況で出土している。もう1点耳環が右奥の土をふるいにかけて出土した。

出土遺物

57-1・2は須恵器である。1は口径12.5cmの壺身で、底面からの立ち上がりが高く、かえりが付くが口縁部からわずかに見える程度のものである。2は壺の肩部で頸部近くに小さな円形浮文を付けている。

58-3・4は耳環である。3は金箔が残存しており金環であるが、4は剥落して不明である。2点ともすりとした手応えがあるので軸芯をもつものであるが、大きさに若干の差があるため対とはならず、2対あったものと考えられる。

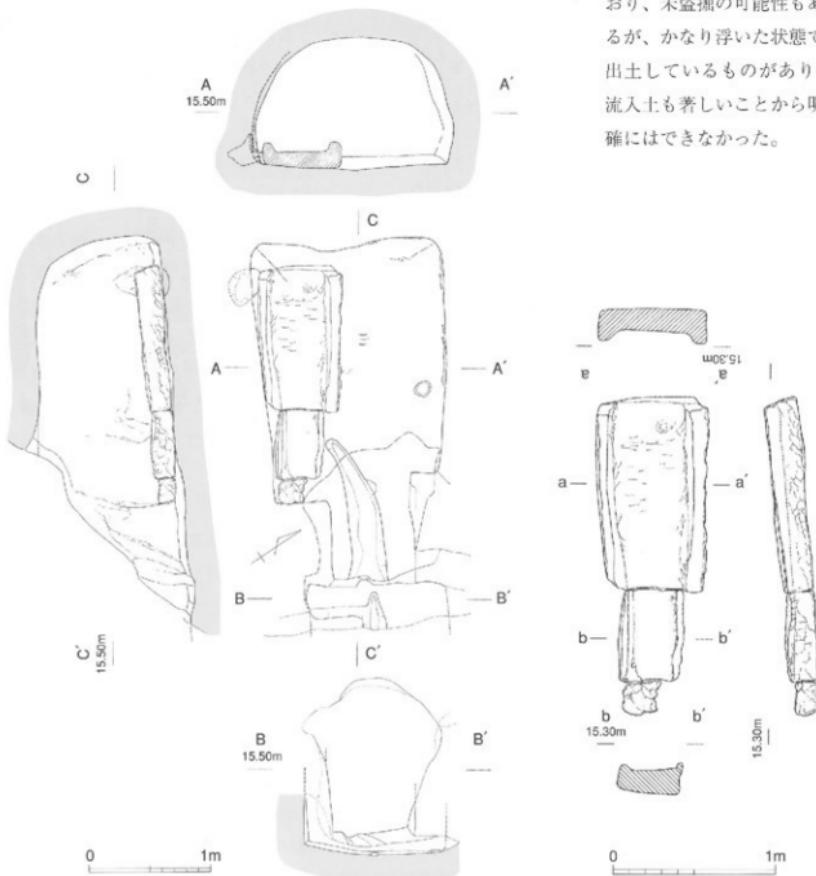
(2) D-2号横穴墓 (第59~66図)

D群内で唯一石床が埋置されていた。床面標高は14.9~15.1mを測り、開口方向はS-56°-Eである。天井は玄室の一部まで壊れ、床面は前庭部が若干わかる程度までは残っている。

土層堆積状況

玄室天井が崩壊しているため、天井近くまで流入土が充填している。13層下半部及び8・9層はあまり疊を含んでいないので、開口するまでに堆積したものと考えられるが、自然堆積かどうかは不明

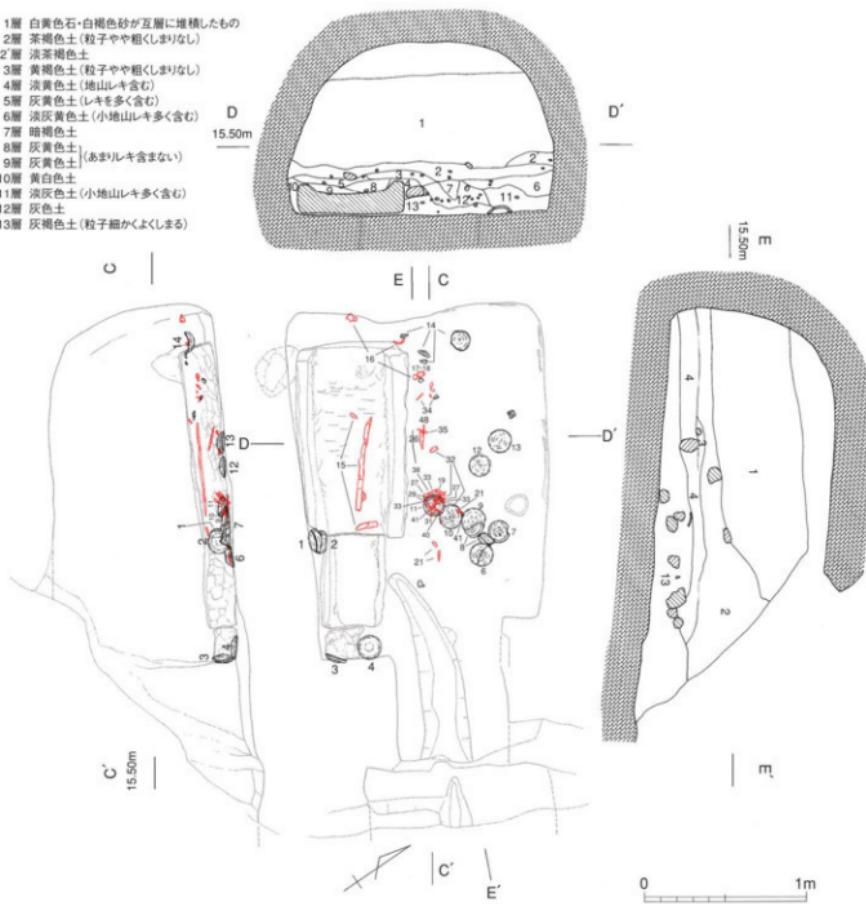
である。遺物が多く残っており、未盗掘の可能性もあるが、かなり浮いた状態で出土しているものがあり、流入土も著しいことから明確にはできなかった。



第59図 D-2号横穴墓実測図 (S=1/40)

第60図 D-2号横穴墓
石床実測図 (S=1/30)

- 1層 白黄色石・白褐色砂が互層に堆積したもの
 2層 茶褐色土(粒子やや粗くしまりなし)
 2'層 淡茶褐色土
 3層 黄褐色土(粒子やや粗くしまりなし)
 4層 淡褐色土(地山レキ含む)
 5層 灰褐色土(レキを多く含む)
 6層 淡灰黄色土(小地山レキ多く含む)
 7層 暗褐色土
 8層 灰褐色土
 9層 灰褐色土(あまりレキ含まない)
 10層 黄白色土
 11層 淡褐色土(小地山レキ多く含む)
 12層 灰色土
 13層 灰褐色土(粒子細かくよくしまる)



第61図 D-2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

前庭・羨門・羨道

前庭部はほとんど崩壊しているが、床面に若干痕跡が残っており、幅115cmである。中央軸に沿つて羨門から幅10~20cm、深さ数cmを測る溝が施されている。

羨門も床面に痕跡を残しており、幅70cmである。床面には長さ115cm、幅30cm、深さ3~5cmの閉塞施設を受けるための溝が造られている。

狭道部も床面しか残っていないが、前庭部より一段高くなっている。長さが左右異なるが平面形態は正方形に近い長方形を呈し、右側壁長85cm、左側壁長65cm、幅68cmを測る。中軸沿いに、玄室内から幅10~30cm、深さ5cmの溝が延びている。

玄門・玄室

天井が崩壊しているため復元は難しうが、幅70cm弱を測る。奥壁からの側壁の長さが違うが、奥壁から狭門までの長さは左右同じとなる。

玄室は右側壁長193cm、左側壁長212cm、前幅136cm、奥幅155cm、高さ110cmを測る。平面形態は奥幅の若干広い縦長方形を呈するが、奥壁の両隅が丸く、前壁の両隅が若干角張っている。また前壁の両袖長も違い、右袖が21cm、左袖が42cmである。これは左側に石床が埋置されているために左側がやや大きく造られたものと考えられる。

奥壁は高さ90cmで、界線は不明瞭で、傾斜をもって直立ぎみに立ち上がる。横断面は半円形を呈し、天井形態はアーチ形である。

左側壁奥に幅25cm、床下10cm、床上15cm、奥行25cmの穴が穿ってある。

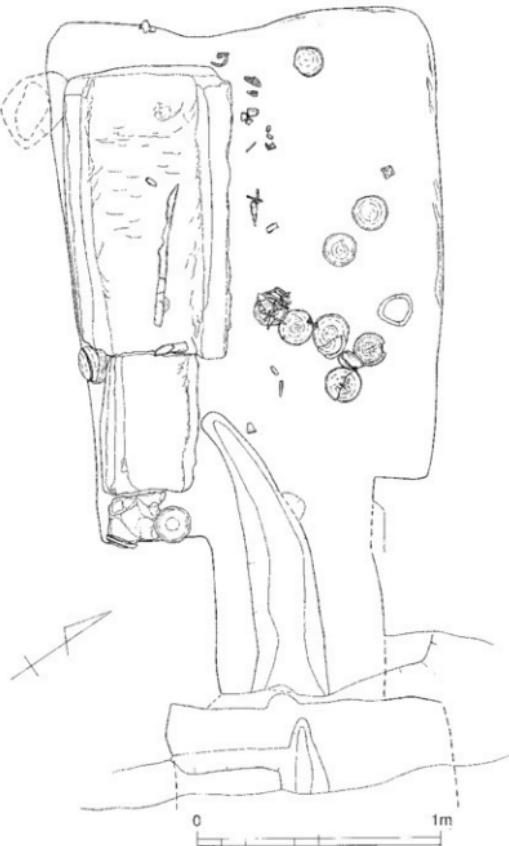
床面には石床から中央軸に湾曲して延び、狭道部へと連続する溝が造られている。

加工痕

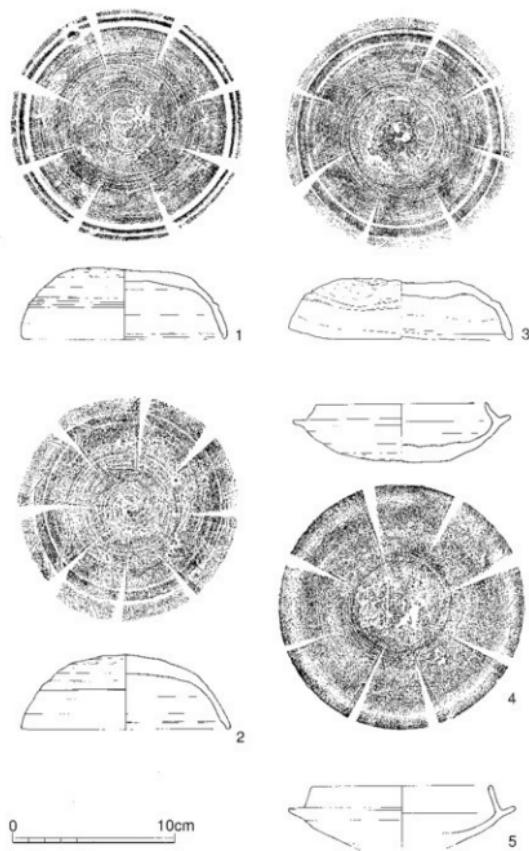
玄室内で観察された。石床下左奥床面には幅6、7cmの上から下に突いたような円刃状の加工痕が、また右奥床面には手前から奥へ5cm幅の、中央床面には奥から手前に8~10cm幅の、石床下左袖床面には中央から前壁方向に幅10cm強の円刃状の加工痕が観察される。左奥壁界線には内から外へ奥壁に平行させた幅5~10cmの円刃状の加工痕が観察される。

石床

玄室左側壁に沿って、長さ170cmの石床が1基埋置されている。基本的には断面U状に加工された



第62図 D-2号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1/20)



第63図 D-2号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)

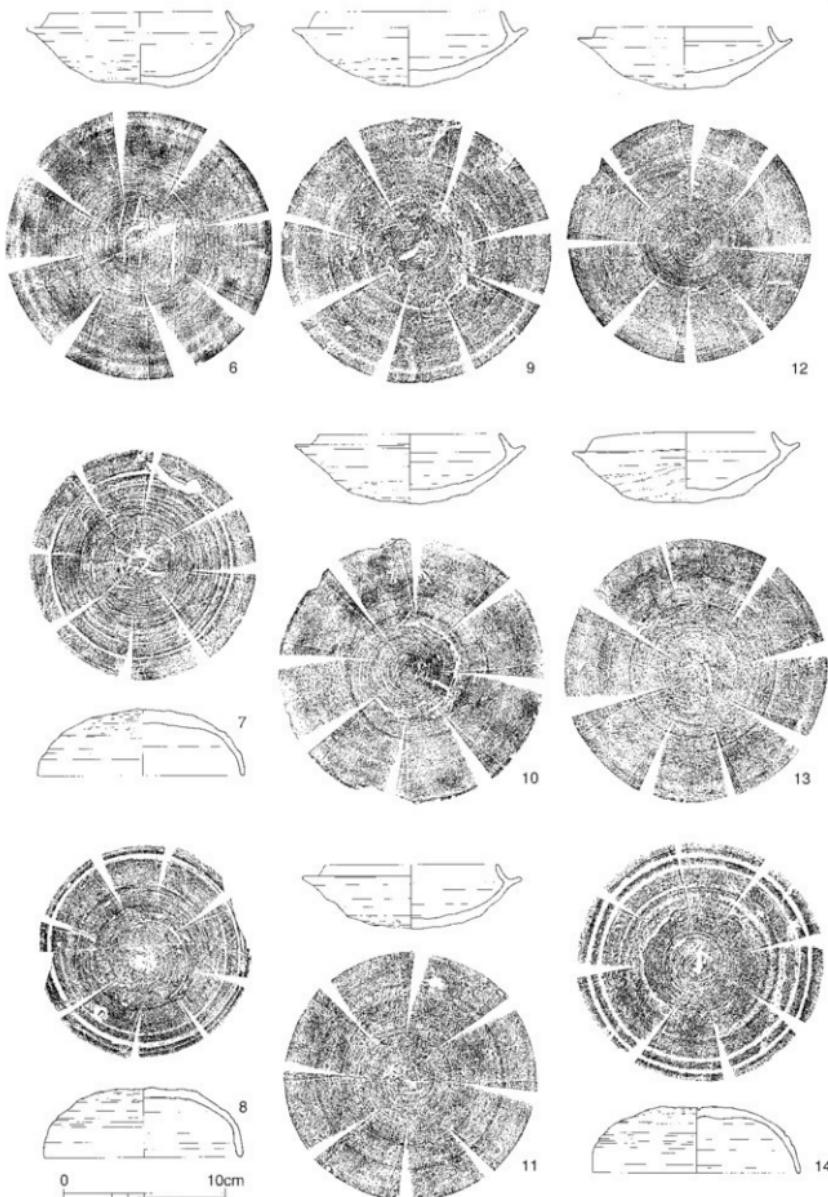
大小2枚の石を並べており、前側の礫は継ぎ足しとして置かれたものと考えられる。奥側が幅を広くしているので、奥方向が頭位と考えられる。大きい方の石を石床大とし、長さ115cm、幅60~70cm、床厚12~13cm、壁厚18~20cm。小さい方の石を石床小とし、長さ56cm、幅38cm、床厚12~16cm、壁厚15~20cmを測る。前側の礫は長さ20cm、幅20cm、厚さ15cmのものである。上面には加工痕が観察される。石床大には、頭位から足位方向の平刃状の加工痕、壁立ち上がり際では中央から壁方向の平刃状の加工痕を基本に、左側には壁から中央方向の平刃状の加工痕もみられる。石床小には、中央から壁方向のみ幅の狭い平刃状の加工痕が観察される。また外壁には幅広の加工痕が観察される。

遺物出土状況

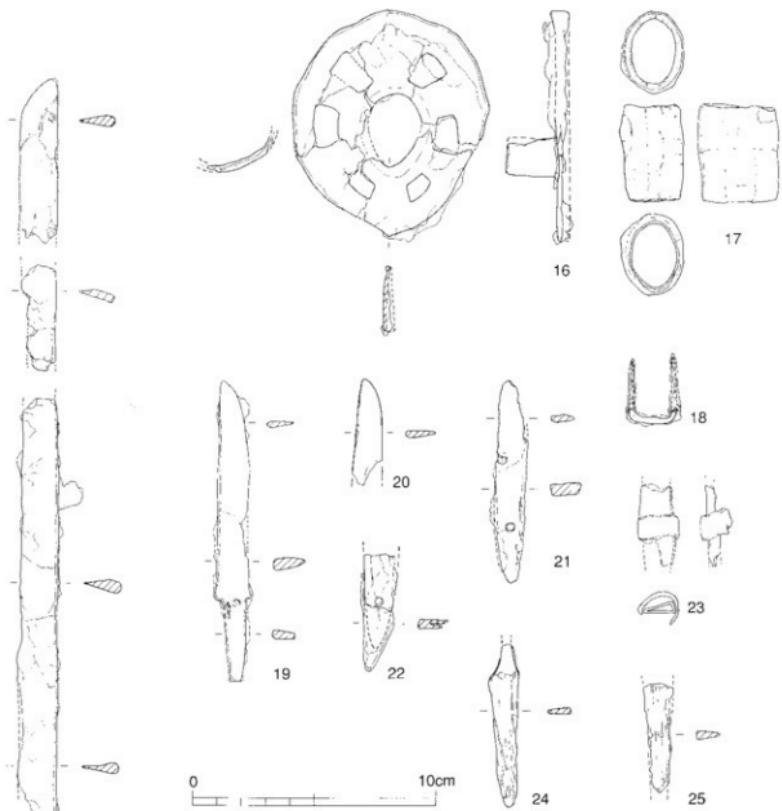
玄室内からの出土である。玄室左側では、石床直上からひと振りの大刀が出土し

ている。石床大の上に右側壁に平行して置かれており、刃先を足位方向に向いていると思われるが、刃先は折れて刃部本体に直角に位置している。石床の周囲には、石床大と石床小の境で左側壁との隙間に壺蓋2個体が口合わせの縦位に、また左前壁と前側の礫の間にこの礫を入れ込んだような状況で壺蓋1個体が縦位で、その右横床面に壺身が伏せた状態で出土している。

玄室右側では、手前に壺蓋が6個体、それより若干奥から2個体が、ほぼ床直上で出土しているが、奥へいくほど若干浮くようである。11のみが上向きで、他は基本的に伏せた状態である。奥壁付近か



第64図 D-2号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/3)

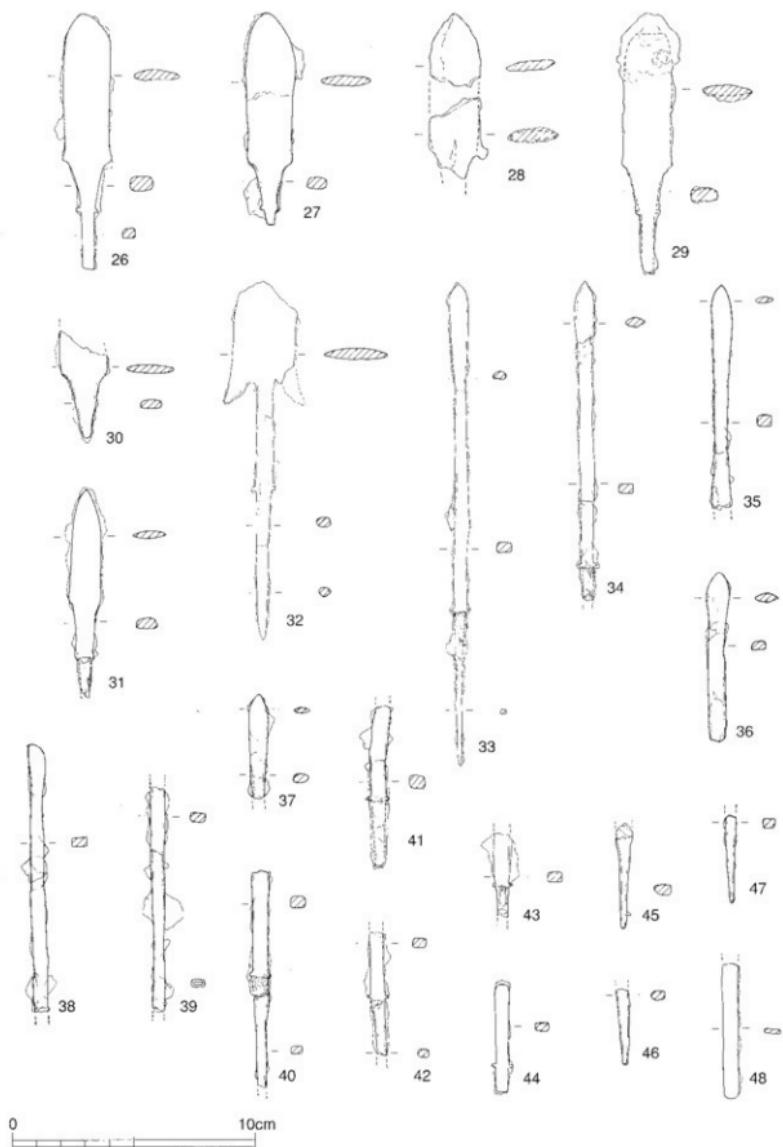


第65図 D-2号横穴墓出土遺物実測図3

(15: S=1/4 16~25: S=1/2)

らは壺蓋1個体のみが出土しているが、床面から18cm浮いており、4層の上に載った感じである。

大刀以外では、鎧1点、錘1点、鞆尻及び鞆尻留金具1点、刀子が可能性あるものも含めて7本、鐵鎌が欠損品も含めて23本など出土している。特に壺身11の上下に集中して鉄器が出土している。下から出土したもの(27・28・31~33・38・41)及びその手前に出土している21は床面直の出土であるが、それより奥にいくにつれ壺蓋の出土状況と同様に床面から浮くようになり、16~18・34のグループは約10cm、最奥のグループは約15cm床面から浮いている。36は壺身9内からの出土、18は17の内部からの出土である。壺身11の上下から出土して



第66図 D-2号横穴墓出土遺物実測図4 (S = 1 / 2)

いるもの同土、床面直上から出土しているもの同土、同レベル出土のもの同土で接合できる。

出土遺物

63-1～5・64-6～14は須恵器の蓋坏で、5以外はほぼ完形品である。1～3・7・8・14は蓋で、3は潰れているため口径が若干大きく13.4cmを測るが、他は12.0～12.8cm内に収まるもので、天井部と体部の境に突帯や稜を表現する沈線を施している。4～6・9～13はかえりの付く身で、口径が11.7～13.0cm内に収まるものである。かえりは内傾してやや長めに立ち上がる。

65-15～25・66-26～48は鉄製品である。15～18は同一個体と考えられる大刀の各部位で、15は刀身で、茎部が欠損し刃部のみであるが、現存長82.5cm、幅3.0cm、厚さ1.0cmを測る細長いものである。16は锷で破片状態の鏃を載せて接合させたものである。17は断面倒卵形を呈する鞘尻で、内面に木質が観察される。18はその尻留めの金具で、目釘2本が外部施設の一部と銘により連結したものである。

19～25は刀子である。19は現存長12.3cmを測り、完形品に近いものである。茎部には若干の木質が観察される。20は刃部のみ、21・22・24・25は茎部のみで、木質が観察される。また21と22にはそれぞれ2ヶと1ヶの目釘穴がある。23は鞘口金具の残存したものである。

26～48は鉄鎌である。26～31は短頭鎌、32～48は長頭鎌である。短頭鎌は頭部が主頭のものに26～29、柳葉形のものに31があり、5点とも撫闇で、棘笠被をもつものは26・27・29・31である。長頭鎌には頭部が三角形のものに32、柳葉形のものに33～37、片刃箭のものに38があり、32は逆刺闇、33～38は無闇で、棘笠被をもつものは32～34・40～44である。

(3) D-3号横穴墓（第67～71図）

床面標高は14.75～15.5m、開口方向はS-74°-Eに位置し、D群内で最も西に振る。天井は玄室の一部まで壊れ、床面は前庭部の一部が残っている。

土層堆積状況

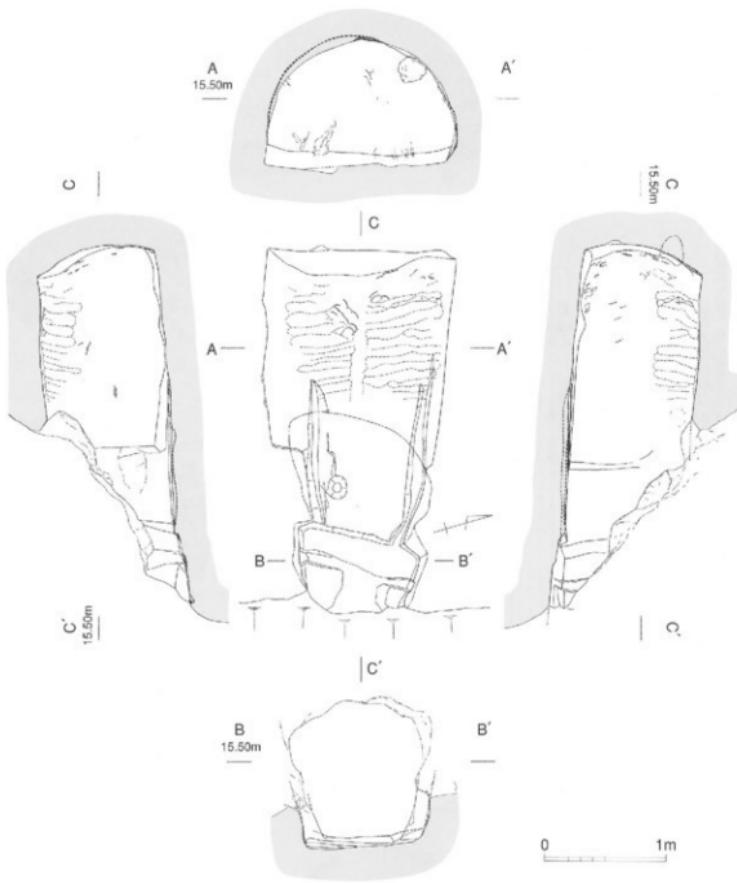
細かな切り合いをもった堆積状況を呈している。遺物がわりと残存しているが、元位置から移動しているものが多く、全体的にしまりのない土層であったことから盜掘を受け一度掻き出された可能性が高い。

前庭・羨門・羨道

前庭部は一部残るのみで、残存長60cm、幅80～100cmを測り、主軸に対して約10度の傾きをみせる。また前方部は若干狭くなるようである。床面には羨門から30cm手前に幅15～30cm、深さ数cmのT字状を呈する溝が施されている。

羨門は幅100cmで、前庭部に造られた溝を境に一段高くなった部分である。閉塞施設は、前庭部との境の溝を利用したものと考えられる。

羨道部は羨門より5cm高くなっている。長さが左右異なるが、平面形態は奥が広がった台形状を呈し、右側壁長66cm、左側壁長58cm、幅75～100cmを測り、奥にゆくにつれ若干高くなっていく。両側壁に沿って、幅10～15cm、深さ5cmの溝が玄室内まで続く。

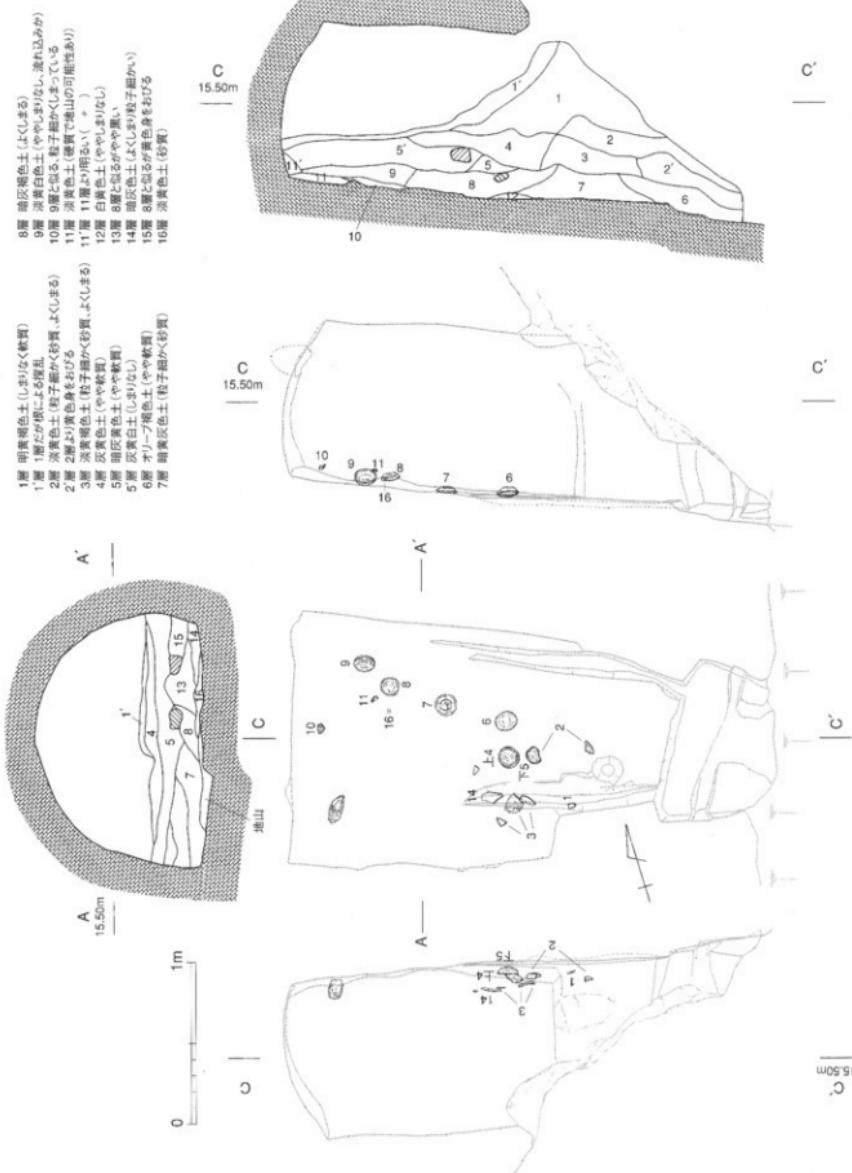


第67図 D-3号横穴墓実測図 (S=1/40)

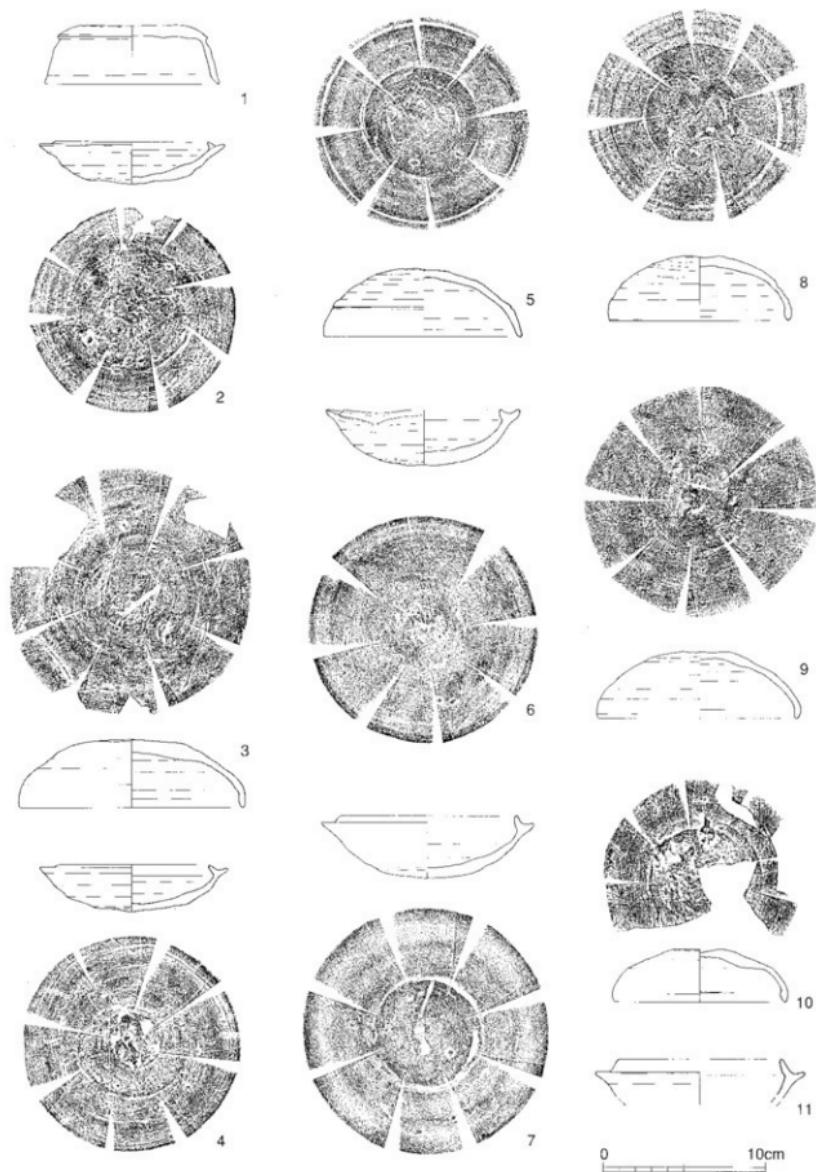
玄門・玄室

玄門は天井が崩壊しているため復元は難しいが、幅100cmを測る。

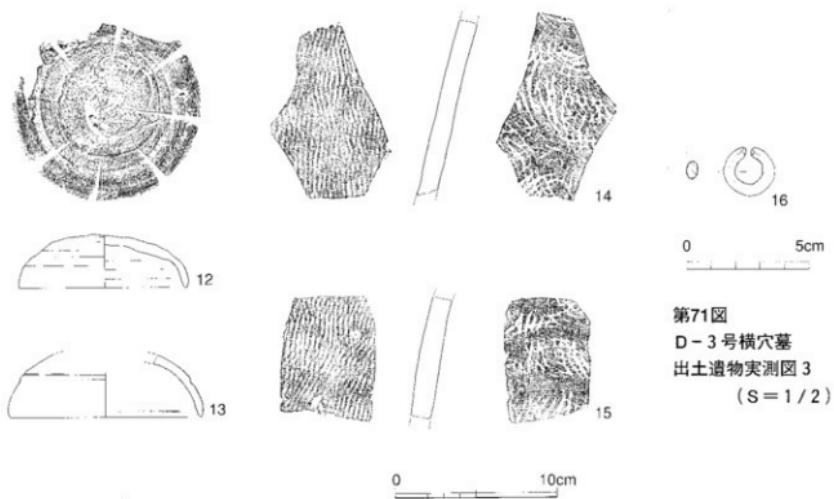
玄室は右側壁長170cm、左側壁長160cm、前幅134cm、奥幅155cm、高さ104cmを測る。平面形態は奥幅の広い正方形に近い縦長長方形で、四隅は角張っている。左右側壁の長さも若干異なり、また前壁の両袖長が極端に違い、右袖5cm、左袖25cmを測る。



第68図 D-3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第69図 D-3号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)



第70図 D-3号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/3)

奥壁は高さ90cmで界線は明瞭に残り、傾斜をもって直立ぎみに立ち上がる。横断面は頂部の若干尖った半円形を呈し、天井形態はアーチ形である。

床面には羨道部から延びる溝が真っ直ぐに続き、玄室中央部であいまいになり止まっている。玄門からの長さは右溝94cm、左溝60cmを測る。

加工痕

玄室内で観察された。両側壁及び奥壁にはその界線方向へ幅5~9cmの円刃状の加工痕が残存し、奥壁の界線にはそれが明瞭に残っている。天井から両側壁には肋骨状加工が行われており、天井頂部は水平に奥壁に向かって削り、その後それに直角するように平行した削りを側壁中央や上まで行っている。基本は削り下ろしているが、頂部付近は頂部に向けて削っている。

遺物出土状況

羨道部からは須恵器の蓋坏の片が数cm床面から浮いて出土している。

玄室内では入り口中央から右奥へかけて集中するように出土している。7のみが床面直上の出土で、7周辺から右奥へ出土する蓋坏の完形品(8・9)は数cm床面から浮き、入り口中央付近の破片(2)は床面から15cm浮いている。蓋坏の蓋5と身4は、5が4を入れ子状にし上向きで出土した。金環が1点右奥から出土しているが、これも床面から数cmの浮きをみる。左奥には長さ18cm、幅8cm、厚さ12cmの疊が1点横長に立てた状況で床面近くから出土している。

第71図
D-3号横穴墓
出土遺物実測図3
(S=1/2)



出土遺物

69-1～11・70-12～15は須恵器である。1～13は蓋坏で、2～9はほぼ完形品である。口径が3は13.8cmとやや大きく、5・7・9は約12cm、他は10.1～11.1cm（平均値10.6cm、破片である11・13を省く）とやや小型のものである。1・3・5・8～10・12・13は蓋で、1のみは半たい天井部から器壁が直立ぎみに立ち上がるもので、口縁端部は外反する。他は湾曲した天井部から内湾ぎみに器壁が立ち上がる。2・4・6・7・11はかえりのある身である。11はかえりが高いが、他は短く口縁部から若干立ち上がる程度のものである。2・4の底部外面にはハラ3本による同じ印が描かれている。

70-14・15は甕の胴部破片である。ともに外面平行タタキ目、内面同心円タタキ目を施す。

71-16は金環で、同横穴墓内からは1点しか出土しておらず、対になるはずの片方はない。直径2.0×2.1cm、厚さ7mm、内孔径1.1cm、挟み幅2.5mmを測り、銅芯のある全面に金箔を施したものである。

（4）D-4号横穴墓（第72～75図）

床面標高は15.0～15.15m、開口方向はS-63°～Eに位置する。1・2・5・6号横穴墓が50度台の方位に対して、3号横穴墓は70度台、当該4号横穴墓は60度台であり、3号横穴墓から南に位置する横穴墓は丘陵の向きに伴って、正面を合わせたものと考えられる。天井は玄室の半分近くまで壊れ、床面は羨道部の一部が残るのみで崩壊している。

土層堆積状況

玄室の天井が崩壊しているため、流入土が天井奥まで充填している。9層以下は黒っぽい層を成し、11層上に遺物の出土をみるとことから、10・11層は人為的に敷かれた層の可能性があり、9層は埋葬直後から堆積した層と考えられる。6層には拳大のレキを多く含んでおり、これは天井が崩壊して以降の堆積と考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部及び羨門は崩壊している。

羨道部は、天井及び前方部が斜めに崩壊しているため、平面形態も確実ではないが、長方形を呈するとみられる。現存長25～35cm、幅68cmを測る。床面中央には幅10cm、深さ6cmの溝が玄室入り口まで延びている。

玄門・玄室

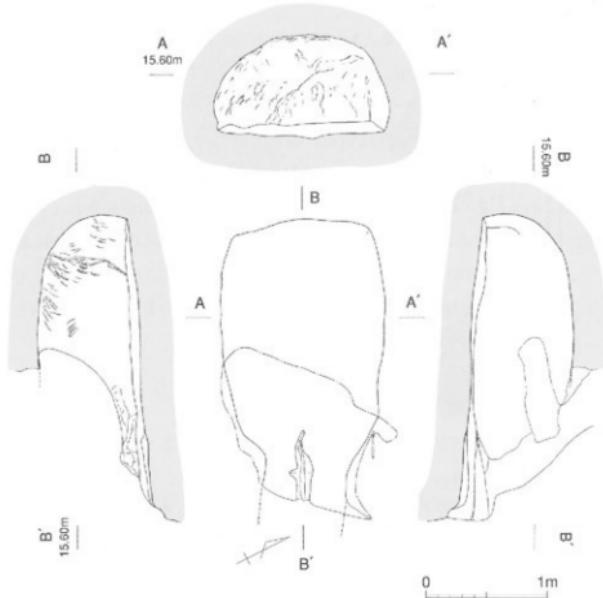
玄門は天井が崩壊しているが、幅68cmを測る。

玄室は長さ180～205cm、前幅115cm、奥幅110cm、高さ85cmを測る。平面形態は四隅の丸い縦長長方形で、前壁の両袖が斜めに狭まり不明瞭である。

奥壁は高さ72cmであるが、30cm程直立して立ち上がり、あとは奥壁としての意識が薄く湾曲して立ち上がる。奥壁と右側壁の界線はやや明瞭に残るが、あとは不明瞭である。横断面は半円形を呈し、天井形態はアーチ形である。

加工痕

玄室内で観察された。奥壁及び右側壁との界線、また左側壁に横方向の幅7～13cmの刃状加工



第72図 D-4号横穴墓実測図 (S = 1/40)

痕が残る。天井にも同様な円刃状加工痕が奥から前方向に残っている。

遺物出土状況

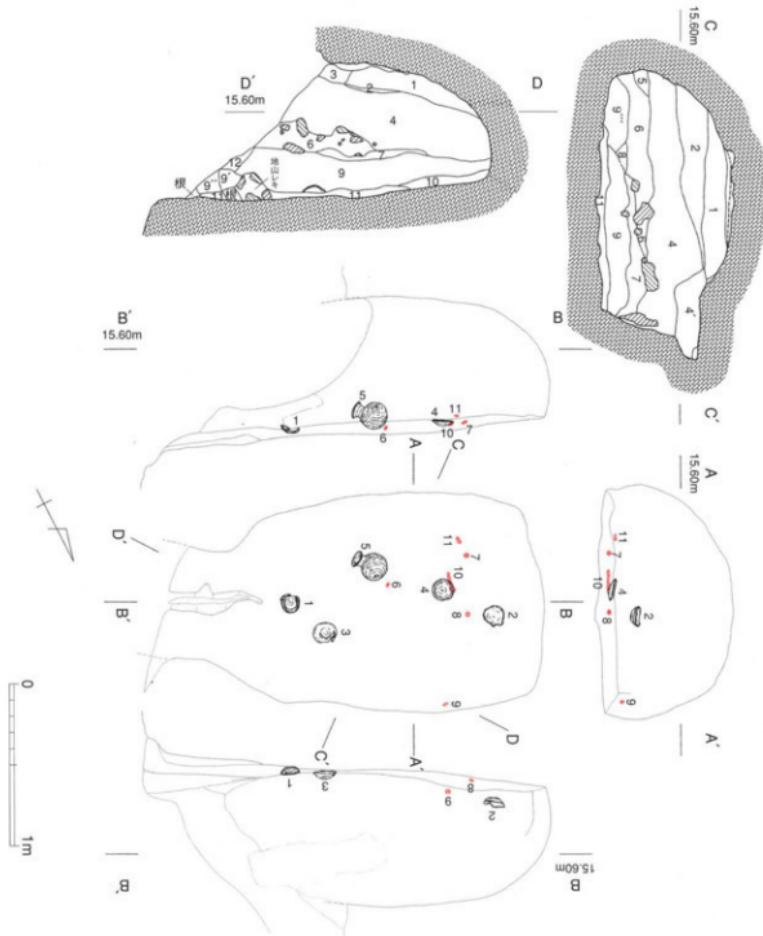
玄室内ほぼ中央寄りに出土しているが、9のみが右奥側壁近くからの出土をみる。それぞれ2~5cm程床面から浮いているが、これは人為的に10~11層を敷き、その上に遺物を載せているからのようである。2のみは13cm床面から浮いているので例外である。埋葬当時の位置とは考えがたいが、金環7・8を結んだ線が側壁に対して直角に位置し、それが35cmの幅をもっていることから、若干の移動があったにせよ、4を枕にした140cm位の人物を埋置するに十分な配置であると思われる。

出土遺物

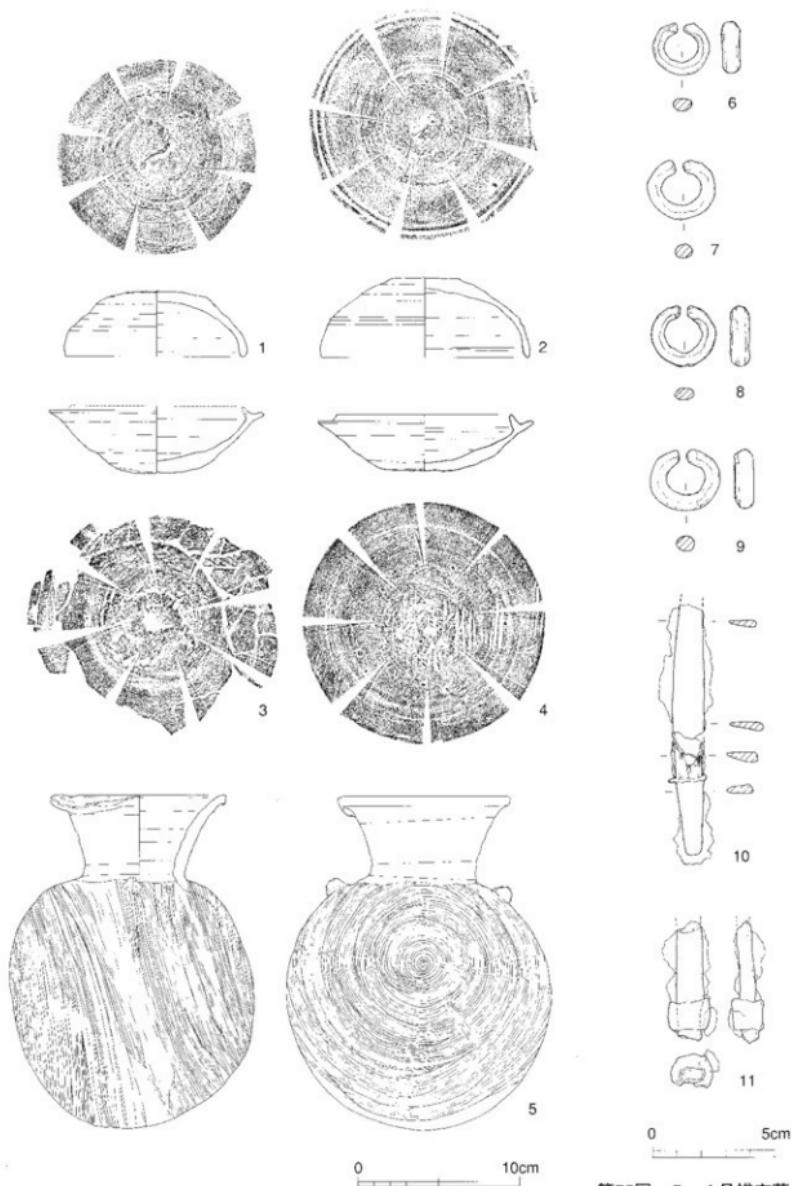
74-1~5は須恵器である。1~4は蓋坏の1・2が蓋、3・4がかえりのある身で、1・4は完形品である。2・3は共に口縁部周辺を打ち欠いた状況である。口径は3・4が約12cmであるが、1は11cmと小さく、2は12.8cmと大きい。5は提瓶の完形品である。小振りで体部があまり平べったくなく球形が一部潰れたような形状を呈している。口縁部は二重口縁で面をもち、把手は退化し三角形の瘤状のものが付く。

75-6~9は軸芯のある全面に金箔を施した金環である。出土状況から7と8、6と9がそれぞれ対になると考えられるが、6は他の3点より小振りで様相が若干異なる。6の直径は2.2×2.3cm、厚さ7mm、

1層 明褐色砂質土	8層 緑褐色土
2層 灰白色砂質土	9層 黒褐色土(粘性なし、 地山にキ少しまる)
3層 灰白色砂質土	9'層 9層より褐色が強い
4層 明黄褐色土(粘性なし、 地山にキ少し含む)	9''層 "
4'層 4層のやいしまりない層	9'''層 "
5層 暗褐色土	10層 黒灰色土(地山の小レキ 多く含む)
6層 暗黄褐色土(粘性なし、 泰大の地山レキ多く含む)	11層 褐色土(キメ細かい砂質土、 地山レキ含まない)
7層 褐灰色土(粘性なし、 地山レキ小さいもの少し含む)	



第73図 D-4号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第74図 D-4号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)

第75図 D-4号横穴墓
出土遺物実測図2 (S=1/2)

内孔径1.2×1.4cm、挟み幅2.5mmを測るが、7~9の直径は2.5×2.7~2.8cm、厚さ7mm、内孔径1.3~1.4×1.5~1.6cm、挟み幅3mmを測る。

75-10・11は鉄製品である。鋸の付着が多く断面形状も不明瞭であるが、刀子である。両者とも茎部から刃部にかけてのもので、10には鍔と考えられる出っぱりが残存し、11には鞘口金具が残存している。

(5) D-5号横穴墓 (第76~80図)

玄室のみが崩壊から免れ、しかも天井は玄室の半分近くまで壊れている。床面標高は14.8~15.0m、開口方向はS-54°-Eに位置し、1・2・6号横穴墓とほぼ同じ方位を向く。

土層堆積状況

玄室の天井が崩壊しているため、流入土が天井まで充填している。2層は拳大の地山レキを多く含んでおり、天井が崩壊して以降の堆積土と考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門が崩壊しているため玄室の長さは不明であるが、現存長167cmで、現存位置での前幅108cm、奥幅127cm、高さ82cmを測る。平面形態は両袖が崩壊して無いが、前方へ徐々に狭くなる縦長長方形を呈する。奥半分の床面の勾配はきつくなる。

奥壁は高さ40cmで直立ぎみに立ち上がり、横断面が半円形状を呈する。側壁との界線はやや明瞭であるが、天井との界線は不明瞭である。天井形態はアーチ形である。

床面右側壁沿いには幅10cm、深さ数cmの溝が延びている。

加工痕

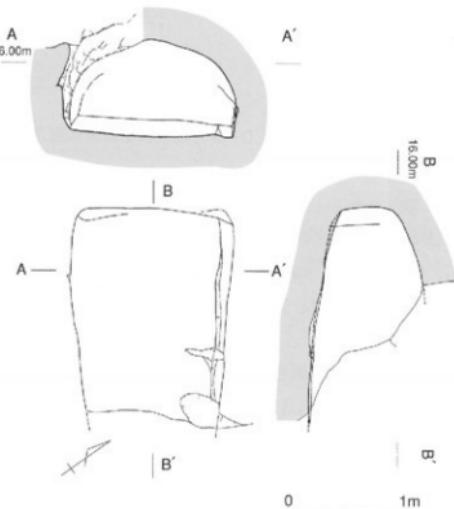
奥壁界線に円刃状の加工痕が観察される。

遺物出土状況

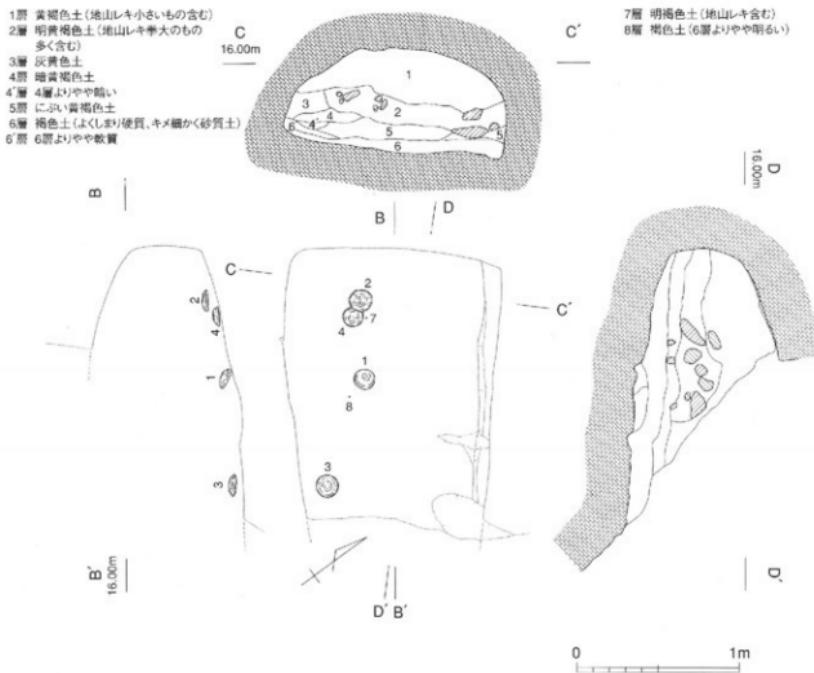
左側からのみの出土である。1・4が床面直上、2・3が床面から数cm浮き6層上面の出土である。小玉8は床面が風化して凹凸しているピット中の床面約9cm下から出土した。

出土遺物

78-1~4は須恵器の蓋坏で、1・2は蓋、3・4は身である。1・3・4は完形品、2は口縁部を欠損している。1・3・4の口



第76図 D-5号横穴墓実測図 (S=1/40)



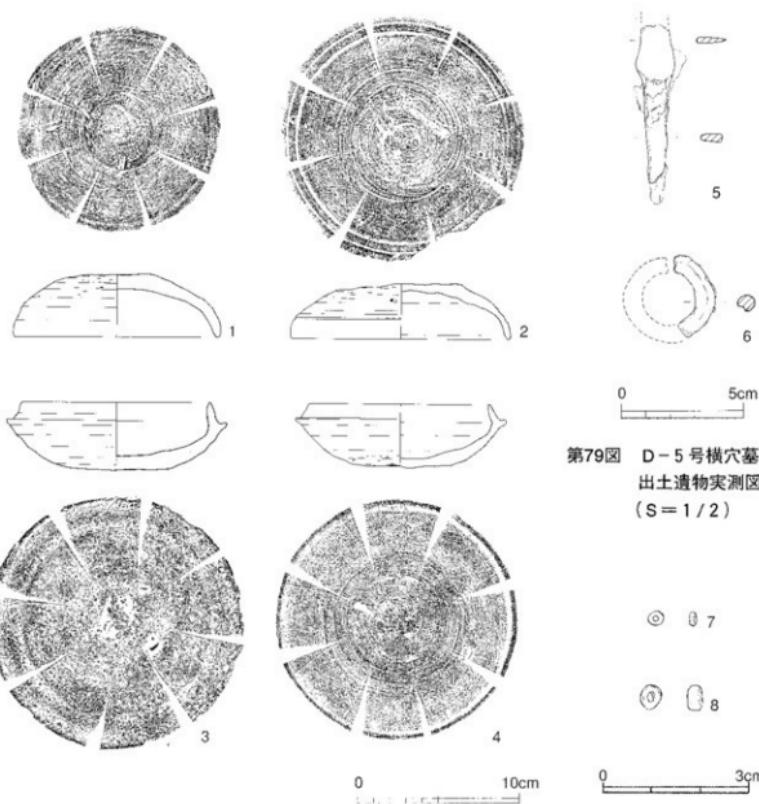
第77図 D-5号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

径はほぼ12.5cmであるが、2のみは13.5cmと大きいため平べったく感じる。3・4は長めのかえりをもち、底径が6～7cmと安定感のあるものである。

79-5は鉄製品で、基部の断面は四角形、先端部の断面は平べったい三角形を呈しており、刀子と考えられる。

79-6は湾曲した断面橢円形を呈するもので、ぼろぼろに風化しており銅製品であるかの判断もしがたいが、形状から耳環の破片と考えられる。

80-7・8はガラス小玉である。7は直径3mm、8は直径4.5～5mmを測るもので、7は紺色を8は濃紺色を呈するものである。



第78図 D-5号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)

第80図 D-5号横穴墓
出土遺物実測図3
(S=1/1)

(6) D-6号横穴墓 (第81~84図)

当該横穴墓は1~5号横穴墓の調査後、下斜面の表土剥ぎをしている際に見つけたもので、1号横穴墓と2号横穴墓の間のひと穴分下に位置し、床面標高13.3~13.8m、開口方向がS-54°-Eである。開口方向は1・2・5号横穴墓とはほぼ同じである。

土層堆積状況

最下層の6層は、漢門の内外に並べてある置石を挟んだ玄室から前部まで堆積している。後述するが、玄室から出土している遺物は元位置を動いているが6層中から出土しており、6層は盜掘を受けた直後から堆積したものと考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部は長さ124cm、幅110~125cmを測り、平面形態は長方形を呈する。床面には右側壁沿いの前半部に長さ60cm、幅10cm、深さ8cmの溝が掘られている。

羨門は天井が崩れているが、床面幅80cm、復元高85cmを測る。床面には長さ120cm、幅20cm、深さ7cmの閉塞施設を受けたための溝が造られている。

羨道部は前庭部より一段高くなり、長さ98cm、幅70~75cmを測る。平面形態は長方形を呈する。

玄門・玄室

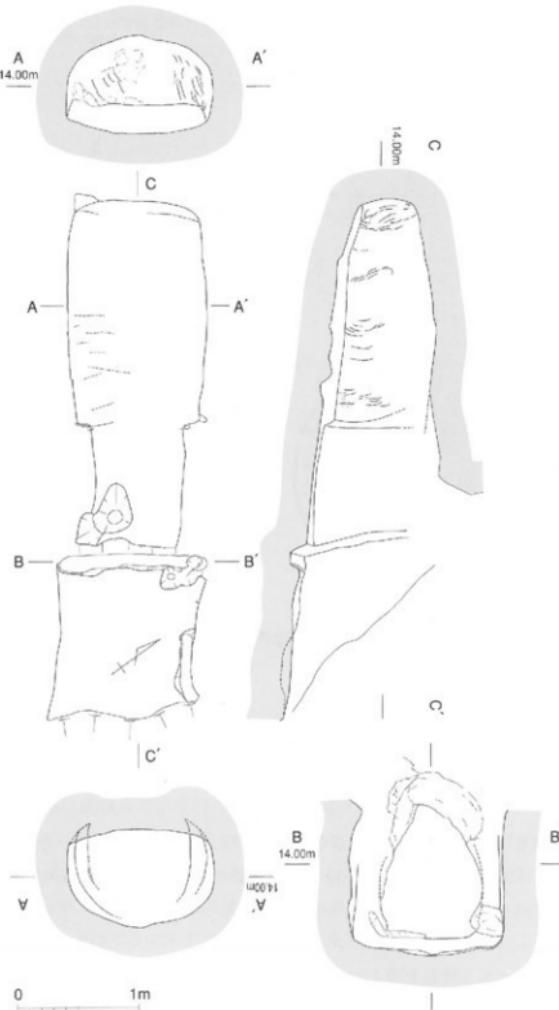
玄門は天井が崩れてはいるが、幅83cm、復元高85cmで、半円形に近い隅丸方形を呈する。

玄室は長さ184cm、前幅100cm、奥幅102cm、高さ85cmを測る。平面形態は縦長長方形であるが、奥壁側の隅は丸く、両袖側の隅は角張っている。

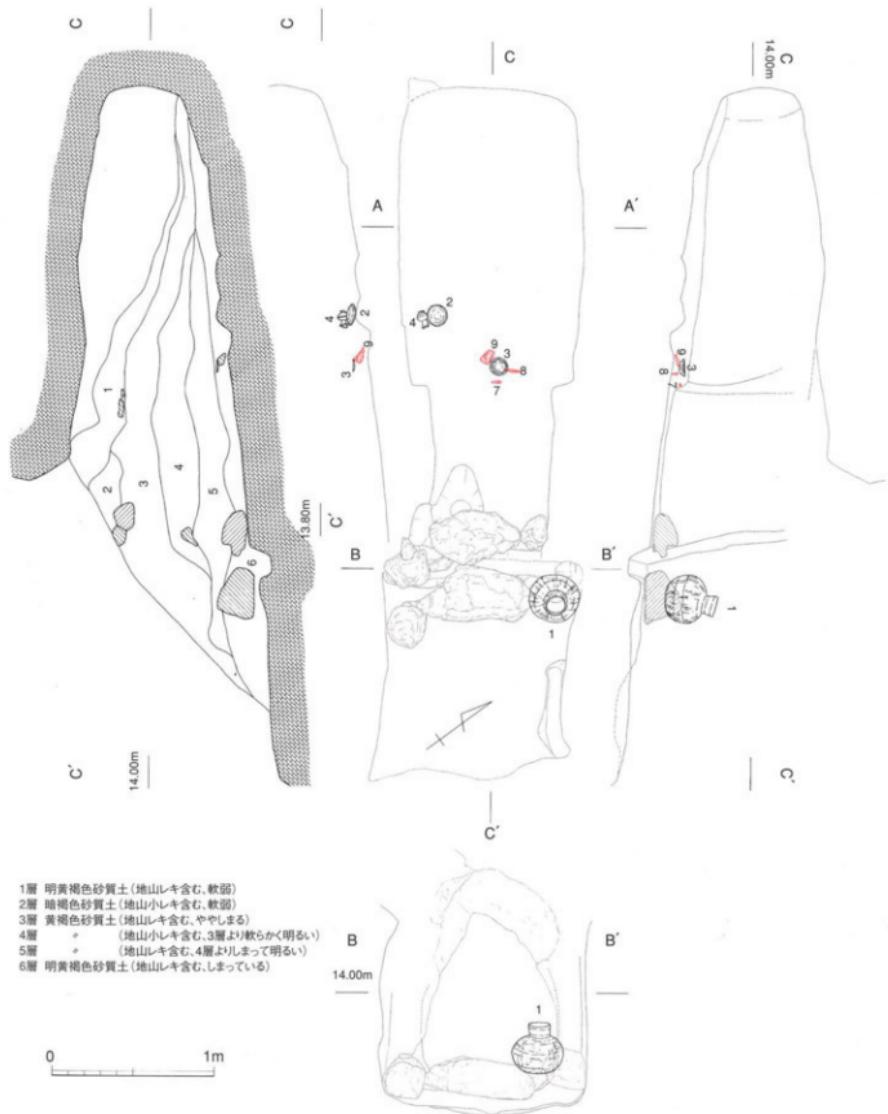
奥壁は高さ45cmで、直立して立ち上がり、横断面は半円形状を呈し、天井形態はアーチ形である。奥壁の界線は不明瞭であるが、前壁両袖のそれはやや明瞭に残っている。

加工痕

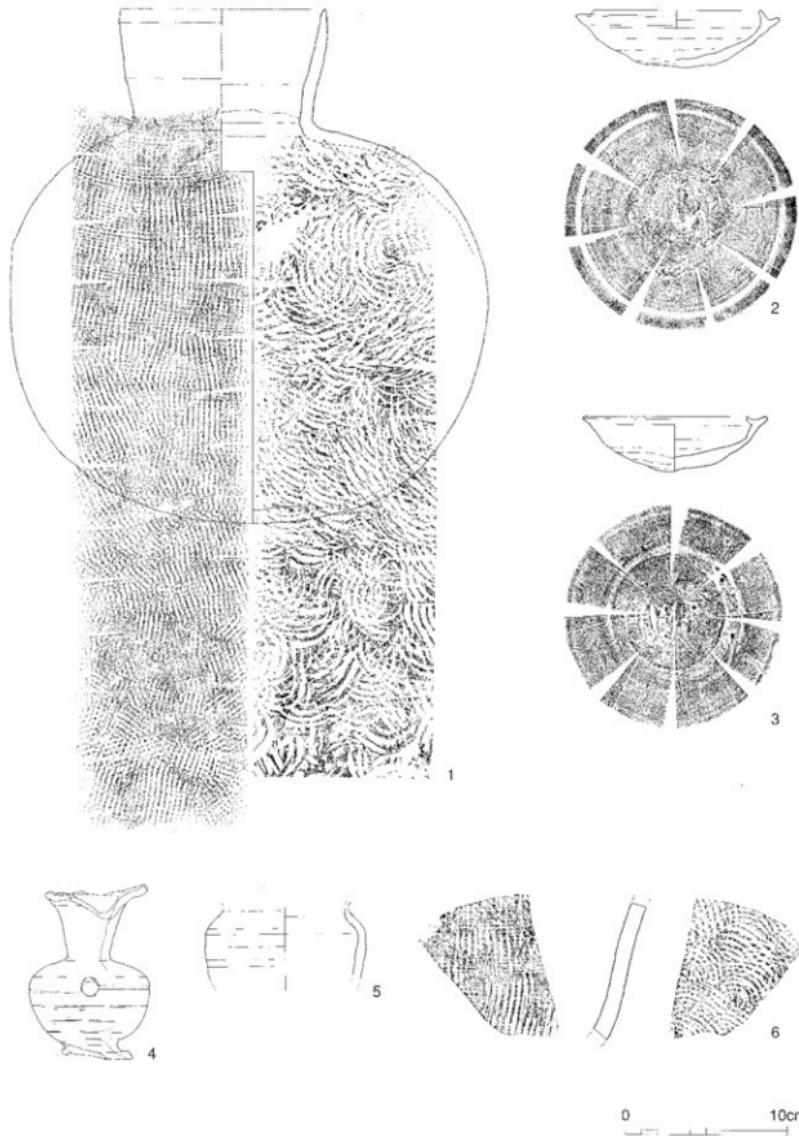
玄室内で観察された。奥壁と両側壁に幅10~15cmの円刃状の加工痕が観察される。上下の傾斜



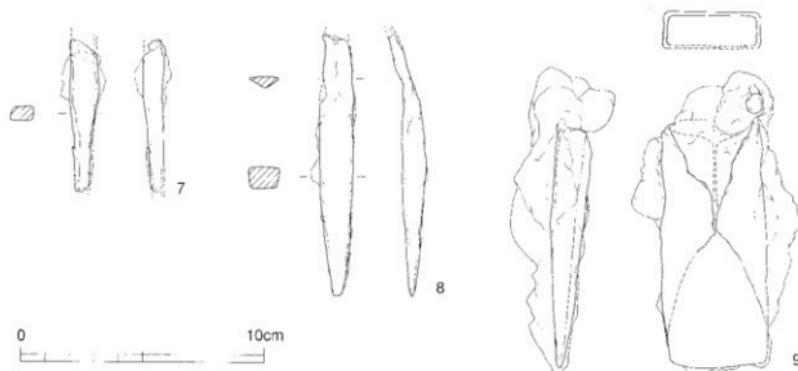
第81図 D-6号横穴墓実測図 (S = 1/40)



第82図 D-6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



第83図 D-6号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)



第84図 D-6号横穴墓出土遺物実測図2 (S=1/2)

はあるが基本的に水平方向に施している。奥壁右側の界線は円刃状加工痕が明瞭で線として成り立っていない。天井には平行した削り痕が部分的に観察され、床面には溝状の削り痕が観察される。全体的に荒掘りで止めたような状況である。

遺物出土状況

溪門にある閉塞溝を挟んで、前庭部側に長さ80cm、幅30cm強の石と直径25cmの石が、羨道部側に長さ55cm、幅30cm強の石と直径25cmの石が並んで出土している。閉塞溝に木製など板状のものを立てかけて内と外から押されたものであろう。

溪門右前に直口壺が据え置かれたように直立状態で出土した。置石と同じレベルなので、何か台の上に置かれていたような状況である。またその周囲から小型の直口壺の小破片(5)が出土した。

玄室内からは床面から浮いた状態で、玄門を入ると中央から坏身を中心に周りから鉄製品3点が出土し、左側から横倒れになった脚付きの壺と伏せた状態の坏身が接して出土している。

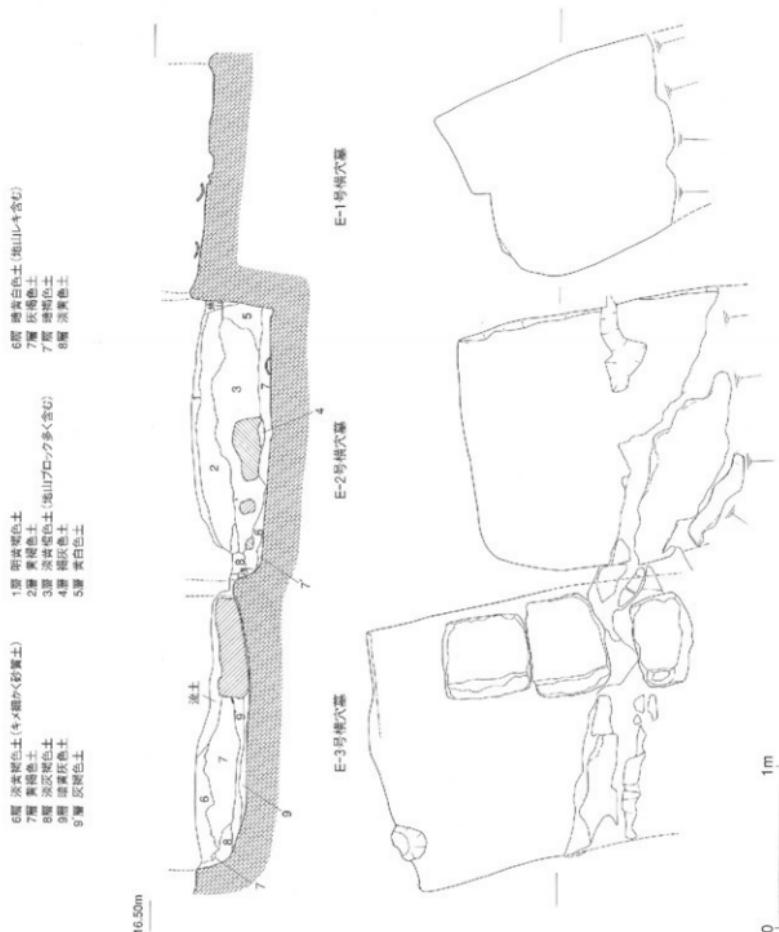
出土遺物

83-1~6は須恵器である。1は大型の直口壺の完形品である。横長の体部をもち、底部は丸底である。体部外面には格子状のタタキ目を施したのち上半部にカキ目を施している。2・3はかえりのある坏身の完形品である。それぞれ口径が11.5cm、10.0cm強と小振りのもので、かえりも口縁部から2は若干見えるが、3は見えないほど形骸化し小さいものである。4は小さな脚の付く壺で、頸部は縛まり、口縁部は段をもって開いていく。体部は肩が張り詰すばかりのプロポーションを呈し、無文である。5は小型の直口壺の肩部と考えられる小破片である。薄くて軽い器壁をもつ。6は周辺採集された大型容器の胴部破片で、外面には平行タタキ目を施したのちナデている。

84-7~9は鉄製品である。7は無闇の鉄鎌で、頸部~茎部分の破片である。8は刀子で、刃部の半分欠損した刃部~茎部分である。刃部は反っている。9は断面長方形の無刃の袋状鉄斧である。

第5節 E群の調査

東側斜面D群の南、D群より一段高い位置及びG群の上列に所在する。8基からなり、北側から1～5号横穴墓、一段下がって北側から6～8号横穴墓を確認した。丘陵頂部の破壊削平が行われた付近のためほとんどの天井が崩壊し、玄室の一部が残存しているという状況である。



第85図 E-1～3号横穴墓配置図及び土層断面図 (S = 1 / 30)

(1) E-1号横穴墓 (第85~89図)

E-2・3号横穴墓と並んだように検出された。特に2号横穴墓とは間隔が数cmしかない状況である。崩壊が著しく、玄室床面と奥壁、右側壁が一部崩壊しているが残存していた。床面標高16.1~16.25mを測り、開口方向はS-40°-Eである。

土層堆積状況

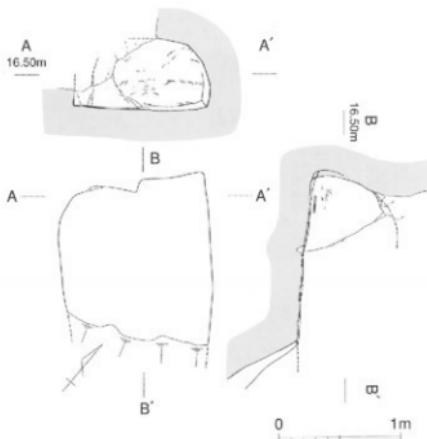
基本的に天井崩壊後に堆積した層であるが、最下層で黒褐色を呈する6層からは、遺物が出土しており、埋葬時から開口されるまでに堆積した層と考えられる。

前庭・羨門・羨道

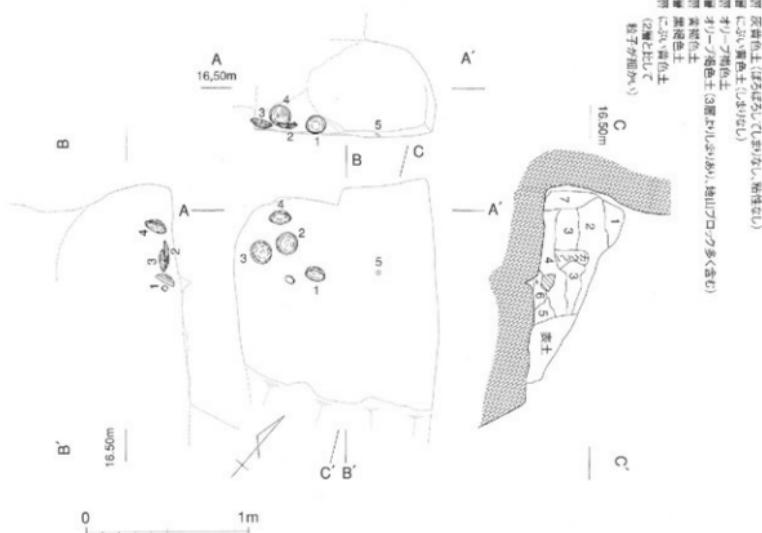
完全に崩壊している。

玄門・玄室

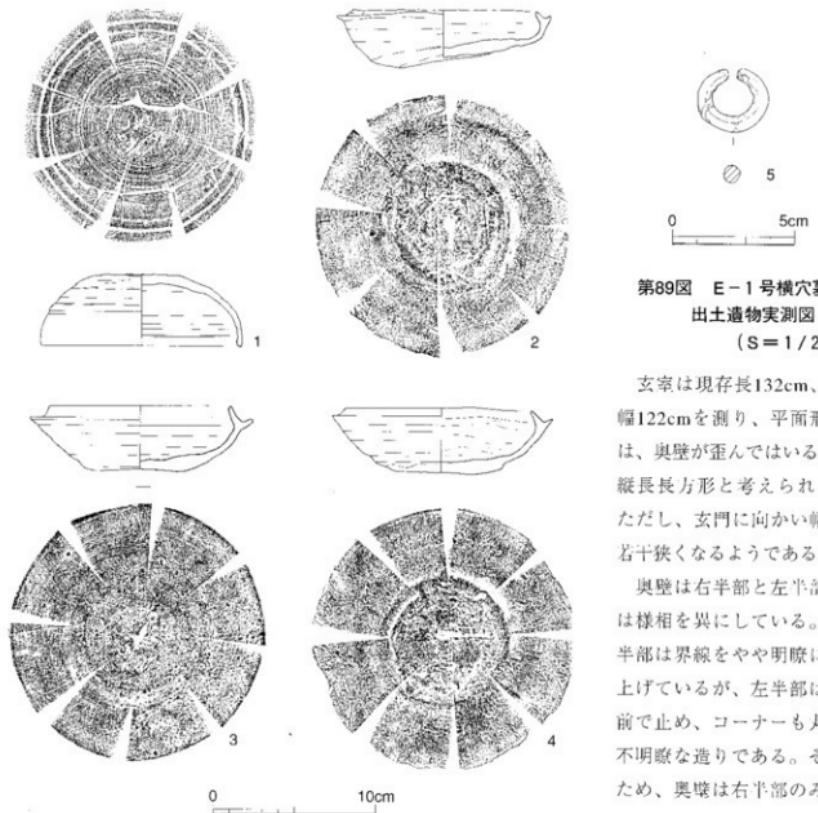
玄門は完全に崩壊している。



第86図 E-1号横穴墓実測図 (S=1/40)



第87図 E-1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図 (S=1/30)



第88図 E-1号横穴墓出土遺物実測図1 (S=1/3)

て立ち上がり、天井は崩壊して残存しないが、アーチ形と考えられる。

加工痕

奥壁右半部には幅5cm程の平刃状の加工痕が残存しているが、左半部には加工痕が観察されず平滑である。右側壁と床面には幅1.5cmの溝状の加工痕が残存する。

遺物出土状況

左奥から蓋環が4個体と土師器の小破片が1点、右奥から耳環が1点出土している。4個体の蓋環のうち身である2・3は正位に位置するが、蓋の1と身の4は正面に口縁部を向けて立った状況である。4個体とも床面に接している。耳環は床面から若干浮いている。

出土遺物

88-1~4は須恵器の蓋環である。1のみ蓋で、2~4はかえりのある身である。蓋である1の口径は

第89図 E-1号横穴墓
出土遺物実測図2
(S=1/2)

玄室は現存長132cm、奥幅122cmを測り、平面形態は、奥壁が歪んでいるが、縦長長方形と考えられる。ただし、玄門に向かい幅が若干狭くなるようである。

奥壁は右半部と左半部では様相を異にしている。右半部は界線をやや明瞭に仕上げているが、左半部は手前で止め、コーナーも丸く不明瞭な造りである。そのため、奥壁は右半部のみ完成させ、左半部は未完成のままの可能性がある。奥壁の残存高は55cmで、湾曲し

12.1cmであるが、身である1~4のそれは12.4~13.0cm、平均12.8cmを測り蓋より若干大きい。

89-5は耳環である。銅芯のあるもので、メッキは剥落し不明である。

(2) E-2号横穴墓 (第85・90~94図)

E-1・3号横穴墓と並んだように検出された。3基の中では最も低位置に造られている。特に3号横穴墓とは切り合ったような検出状況で、同一個体の壊の破片が各々から出土している。崩壊が著しく、玄室床面と奥壁、右側壁が一部崩壊しているが残存している。床面標高15.7~15.85mを測り、開口方向はS-29°-Eである。

土層堆積状況

基本的には天井崩壊後に堆積した層である。最下層の7層には床面直上から出土した遺物を含んでいるが、遺物の出土状況からは盗掘を受けているようなので、埋葬時の堆積土ではなく開口されてからの堆積土であると考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長166cm、奥幅138cmを測り、残存する床面から観察すると両側がほぼ平行して前方へ延びるようなので、平面形態は縦長長方形と考えられる。

奥壁は高さ50cmを測り、直立して立ち上がるアーチ形と考えられる。界線は右側は明瞭であるが、左側は隅が丸く不明瞭である。

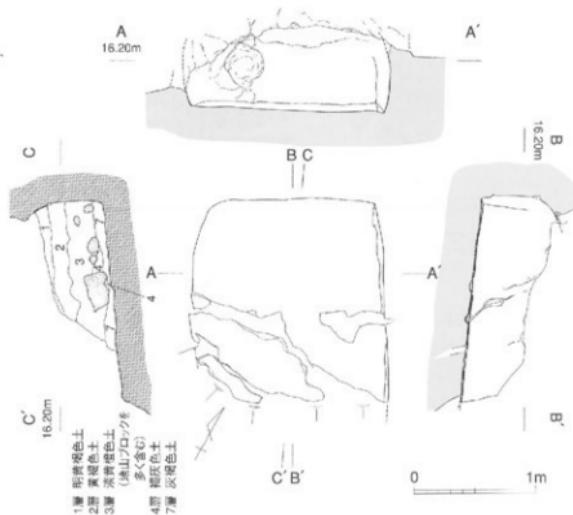
床面右側壁沿いには深さ数cmで断面V字状の溝らしき痕跡が観察される。

加工痕

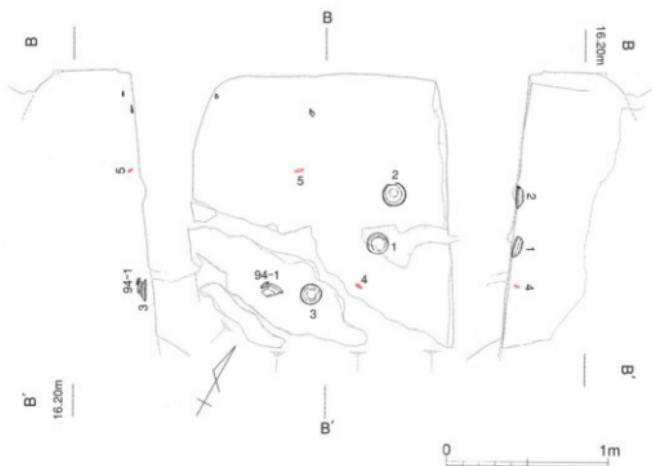
明瞭な加工痕は観察されない。

遺物出土状況

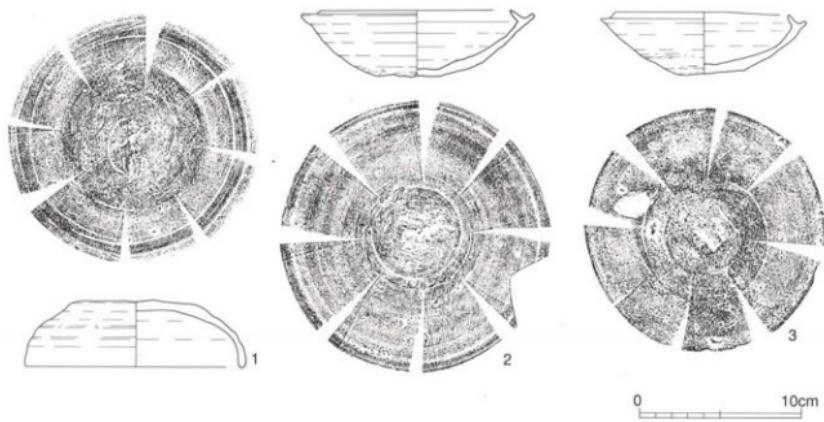
須恵器蓋壊3個体 半が床面直上から出土している。玄室右側から2個体と左前に床面が崩壊して離島状態となっている箇所に1個体半が、口縁部を全て下



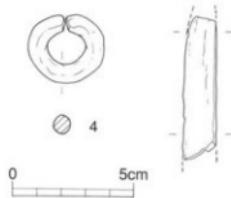
第90図 E-2号横穴墓実測図 (S=1/40)



第91図 E-2号横穴墓遺物出土状況図 ($S = 1 / 30$)



第92図 E-2号横穴墓出土遺物実測図1
($S = 1 / 3$)



第93図 E-2号横穴墓
出土遺物実測図2
($S = 1 / 2$)